
COBALT-SERIES
前田珠子
天使な忘れ者
空に響く緑の鈴音
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

空に響く緑の鈴音

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

空に響く緑の鈴音

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　空に響く緑の鈴音

空に響く緑の鈴音 …… 7

あとがき …… 191



ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。柱神さまを見きわめる「選定者」でもある！

物紹介



スカルトード

超絶美形の青年にして、とある柱神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。

ウォルセン

良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？

登場人

イラスト／明咲トウル

空に響く緑の鈴音

1

室内に密かに仕掛けられた集音装置からは、先ほどから途絶えることなく胡琴――その中でも四弦と呼ばれるもの――の音色が流れてくる。

その技量は決して巧みなものではないが、奏でられる音色は違う。

それは、天性の才が放つ輝きをそのまま体現したかのような響き。

耳にした者たちは、内心感嘆のため息を洩らす。

なんという音だろう、と。

それらを繋ぎ、曲と成す技術的には未だ到らぬ点も多々あるものの、この音だけは誰にでも出せるものではない。

マルシアス一族にとって女神以外の何者でもない女性――『妙歌星』ファタランテ。

彼女縁の品として、ガライラ大公国の柱神が持ち込んだ古いが見事な四弦は、女神の愛し子の手によって、耳に心地よい音色を奏でつづけている……。

そう、奏で『続けて』いるのだ、ここ十日ほどの間というもの。

最初は、四弦を届けたガライラの柱神の気まぐれのような一言がきっかけだったという……五世紀以上も過去のことながら、マルシアス一族……否、一門にとって決して忘れられない守護と約束を与えた女神に縁のある品として、件の胡琴を黒鷲城に持ち込んだ異国の柱神ネイスリーズは、なぜか一族が護り続けてきた秘密を知っていた。

女神と同じ緋色の痣を受け継いだ『聖印の子供』ウォルセンのことを。

そして、何でもないことのように頼み事を口にしたのだ——すなわち、女神の愛し子である彼に、件の四弦を弾いてほしい、と。

これが余人による願いであれば、次期マルシアス侯爵であるアシュアイードは一蹴したに違いない。

かの『愛し子』は先日まで、その身を利用しようと目論む一派によって拉致監禁の憂き目にあっていたのである。ようやくその黒幕——譜代の名門アタラクシア家の罪を暴くとともに救出したウォルセンを、アシュアイードは非常に気にかけている。

義弟であり、同時に有能な補佐となり得るひとつ年下の青年に衆目が集まることを、次期侯爵は望んでいなかった。

だが、頼んできた相手が悪すぎる。

相手は柱神——この世界の天と地の間……『空』を支える至高の存在である。

……とても断り切れるものではなかった。

だから、アシュアイードは未熟な腕前を理由に渋る義弟を説き伏せ、彼の演奏の舞台を用意したわけであるのだが……あろうことかなかろうことか、その決して巧みとは言えない調べを客人が殊の外気に入ってしまったのだ。

以来、ほとんど毎日ウォルセンによる演奏会は開かれることとなった。

最初はウォルセンが客人の部屋を訪ねていたのだが、「頼んでいるのはこちらなのだから」とネイスリーズが言い出し、その翌日からは客人一行のほとんど——護衛の青年を除く柱神と連れの少女ふたりだ——が、ウォルセンの部屋を訪ねることとなった。

それを聞いたアシュアイードは、一瞬実に不快げに眉宇をひそめたのだが……幸いにも誰も気づく者はなかった。

そして、彼は柱神の頼みを断る——正確にはウォルセンに断らせる——こともしなかった。

代わりに、本来は盗聴設備——集音装置はそのための仕掛けだ——と覗き穴のある客室をさもウォルセンの私室であるかのように半日で改装し、そこに柱神一行を迎えるようにと義弟に告げたのである。先日の騒ぎでアシュアイードに多大な心労をかけた自覚のあるウォルセンも義兄にして親友の提案を拒みはしなかった。

そうして……壁と壁の間に密かに存在する小部屋に家人を詰めさせて、柱神たちの訪問を受けることにしたというわけだ。

それから、もうかれこれ十日だ。

これといった情報など、なにひとつ拾えぬまま、平和に平穏に過ぎた日々。
本来であれば苛立ちを覚えてもおかしくない状況にあって、狭い小部屋に押し込まれた家人はしかし、不満などかけらも覚えてはいなかった。
なぜなら、ウォルセンの演奏の腕は日に日に上達していくのだ……正確には、過去の腕前を取り戻しつつあると言うべきか。
その音色は澄み渡り、技巧の拙さは目覚ましい勢いで消えていく。
この分であれば、早晩ウォルセンの四弦は聴く者の魂までも魅了するものとなるだろう。
その日が楽しみだ――詰めている家人はみな一様に期待し、同時に疑問を覚える。
「……なあ」
「ああ……」
わかっているとでも言いたげにうなずく同僚に、隠し部屋詰めになって以来、ずっと感じていた疑問を年少の家人が口にした。
「ウォルセンさまの四弦が聴けて、部屋にいるのは揃いも揃って見目麗しい男女四人で、その四人がにこやかに会話してるのをただ見てて……これって、本当に仕事なのかな？」
情報収集――しかも非合法だ――というには、いささかどころでなく楽且つ楽しいこの状況を、本当に仕事をしていると言って良いのかどうか……若い家人が疑問に思うのも無理からぬことである……かもしれない。

なにしろ、五感中聴覚と視覚は至福を感じる時間なのだ。
無論他の三感もあるかもしれない第六感もなんら異変は感じない。
若い彼の台詞を要約すれば、こういうことだ。
『こんなんで、お給金もらって良いのかな？』
それに応じた年長の家人は。
「仕事だ。異常や異変がないことを報告するのも立派な任務なのだからな……これはまあ、役得というものだ」
そう言って、にやりと笑った。

ナルレイシアは使命感に魂を滾らせていた。
好きでなったわけではない『選定者』だが、しかし疎かにするつもりはない。
……まあ、ちゃっちゃと片付けて本に埋もれる楽園の日々を獲得したいという下心はあるにはしてもだ。
見つけた『ふたり目』の新たな柱神――今のところは候補だが――であるウォルセンは、『ひとり目』だったリオライーシャに負けず劣らずな厄介な事情有り物件……いやいや、複雑

な事情を抱えた人物らしいのだが、そのあたりの問題はすでに解決済みらしいので気にする必要はないだろう――と、勝手に考えている。

となれば、後はただ、説得するのみというものだ。

緑の神宝『翠唱子』に選ばれたことをウォルセンに告げた後、その事実を彼が受け入れてくれさえすれば、晴れて選定者としてのお務め二件目は無事完了なのだ。

（楽勝ね！）

そう思っていた……思っていたのに。

「なんで……」

黒鷲城の一室、用意されていた客室の寝台にぎりぎりと爪を立てながら蜂蜜色の双眸の少女が唸る。

「なんで、ウォルセンさんはあんなにも頑なの!?」

「……ですよねえ」

と、同意を示してくれるのは、赤茶の癖毛の少女である。

ここ十日というもの、彼女たち三人――ひとりはもちろん表向きの主賓であるネイスリーズだ――は女神縁の四弦の演奏を請うという形で連日『女神の愛し子』たるウォルセンを訪ねていた。

訪ねた初日に、どうやら盗聴の気配ありということで、ネイスリーズが精霊たちに『お願

い』して傍目には問題のないやりとりやら光景を演出してくれたおかげで、ナルレイシアは思う存分説得に集中することができたのだが……にも拘わらず、当のウォルセンはけんもほろろにそれを拒絶しまくってくれているのだ。

いや……正確に言うなら、こちらが説得のための言葉を口にするより先に、絶対的拒絶の意思を示されて前に進みようがないという……。

なにしろ、ナルレイシアが初日に自分が選定者であることを打ち明けようと口を開いた次の瞬間には、彼からの拒絶の言葉が返ってきたのだから。

『あのですね、実はわたし――』

『聞く気ないから』

……瞬殺だった。

しかし、そこで怯んでいては話は進まない。ナルレイシアは自らの夢色の楽園を手に入れるために敢えて食らいついて続けた。

『申し遅れましたけれど、実は王都の黄神神殿からお墨付きをいただいてる選定者で……あの、簡単に説明するなら選定者というのは……』

『知ってるから説明は要らない』

ぴしゃりと言い切られて、ナルレイシアは口をぱくぱくさせる羽目に陥った。

ウォルセンの意図は明らかだった――聞く耳持たない、と言っているのだ。

が、そこで引き下がれるほど彼女も『出来た大人』ではなかった。
確かにエアランを出立する前日『その男が、絶対に神になどなりたくないと言い張ったら、どうするつもりだ』という問いを投げかけられた際、その時は頑張って長生きしてウォルセンが天寿を全うするのを見届けた上で次の候補を捜す――とは答えたが、それはあくまで最後の最後のぎりぎりの選択肢だ。
やはりウォルセンには素直に翠唱子の半身たることを受け入れてもらい、さくさくと次のお務めに移りたい。
『いや、でもですね』
『聞こえない。あんまりしつこいと、風霊に頼み事するよ』
それは、あまりにも明確な……脅し文句だった。
柱神の『お願い』にはかなわないまでも、精霊の愛し子たるウォルセンが願いを口にすれば、それなりに精霊たちは動くに違いなく、そうすればネイスリーズが張ってくれた完璧な目くらましが乱れてしまうかもしれない。
それがいやなら、口を噤めという……つまり、自分にはこれ以上話を聞く気はないのだというなによりの意思表示だ。
仕方なく、ナルレイシアは引き下がった。
それが初日のこと。

二日目は、もう少しだけ話を長引かせることに成功した……ほんの微々たるものだったが。
三日目にはさらにもう少しだけ、四日目にも微々たる進歩――塵も積もれば山となるとの古来よりの言葉の通り、十日経った今では少しは前進した……と信じたい。
一応、こちらの事情とウォルセンが神宝翠唱子の半身であることまでの説明を終えることはできたわけだから。
しかし……だがしかし。
だからといって進展があったとは言い切れないのだ……事情を知った上でもウォルセンは『お断り』の一点張りなのだから。
『どうしてですか!?』
尋ねたところで返ってくるのはただ一言。
『面倒くさいから』
こんな理由で納得できようか、いやできない。
(できるはずがないじゃないのーっっ!)
ぎゃんぎゃん叫んで訴えたいところだが、相手がそれ以上のことに踏み込もうとすると途端に『貝』になってしまうのではお手上げだ。
仕方がないからネイスリーズに頼んで毎日ウォルセンの部屋を訪ね、説得を試みているわけなのだが……成果はほとんどない。

しかし、ここで諦めるわけにはいかない。
（なにか……なにかあるはずなのよ、ウォルセンさんが翠唱子を拒む理由ってやつが！）
それさえわかれば――その問題さえ解決できれば、事態は一気に進むはず。
そう信じて、ナルレイシアは日夜努力を積んでいるわけだが……。
「む、難しい……」
人を説得するのって……。
はあ、と思わずため息を洩らした彼女に、ひとつの提案を持ち出したのは一行中、最も尊い立場にある万年超絶美青年だった。
「大人数で押しかけてるのがいけないのかもしれないね。それで、ひとつ考えがあるのだけれど……ただ、ひとつだけ問題があってね。ヴィル・ダカールの同意さえあれば、実現は可能なのだけれど」
持って回った言い方に、嫌な予感を覚えなかったと言えば嘘になる。
しかし、その時点ですでにナルレイシアは手持ちの札を使い切っていた状況だった。
だから――もう、何でも来いという気分だったのだ。
「ウォルセンさんを説得できるのなら、何だってします！　だから教えてください！」
ほとんど考えることなく即答した彼女に、超絶的な美貌を誇る柱神がにっこりと微笑んだ。
ぞくり、と。

背筋に冷たいものが伝うのを感じたナルレイシアだが、すでに逃れる術はなかった。
後に彼女はしみじみと思ったものだ。
（好機の神には前髪しかないというけれどっっ！　柱神さまが持ってくる話も最初の直感勝負で間違えちゃったらだめだめなのねっ！　やばいって、危険だって、どこかで感じてたはずなのに……ああ、わたしの馬鹿馬鹿馬鹿）
けれど。
きっと、こういう時のためにある言葉なのだ――後悔先に立たずという言葉は。
ナルレイシアはネイスリーズの申し出に一も二もなく――内容を確かめることなく「お願いします！」と即答した自分の浅慮を少なからず悔いることとなる。
確かに、他の途はないのだ。
それはそうなのだけれど……しかし。
（ああ、でもでもでもっっ！）
どんな提案であっても、即答は避けるべきだ――思うのは喉元通過中の熱さによく考えることもできずに柱神の提案に乗った愚かさの自覚があるからか。
けれど、振り返ったところでネイスリーズの提案を受け入れる以外に、事態を打開できる案が見つからなかったのは事実で……。
（我慢、ここは我慢するのよっっ！　他に方法はないんだから……っっ！）

必死に自分に言い聞かせるナルレイシアの背中は、びっしょりと冷たい汗で濡れていた。
恐怖でしかない未来が、彼女の目前に、広がっていたのだ……。

2

その日の朝――ウォルセンは久しぶりに……実に十日ぶりに一点の曇りもなく清々しい気分で目覚めた。

（ああ、今日はアレから解放される……）

その事実だけで、心が軽い。

今日ばかりは、心静かに過ごせるのだと思うとそれだけでじんわりと心が温かくなる――いかにこの十日ばかり、心労を重ねていたか知れようというものだ。

ウォルセンが『アレ』と思うとき、脳裏に浮かぶのは見事な金髪と蜂蜜色の大きな瞳を持つ少女の顔だ。

ナルレイシア・フォイリリル・ダカールという名の少女の姿をした……疫病神。

この二月ほど前に出会い、十日前に再会し、以来ずっとウォルセンの心を悩ませつづけてくれている疫病神は、しかし今日ばかりはここには来ない。

主賓――ということになっている――柱神ネイスリーズとともに、アシャス観光に出かけた

のだ。
手配したのは義兄のアシュアイードだ。
連日押しかけて来る柱神一行の勢いにウォルセンが不満を洩らしたわけではないが……なんとなく伝わったものと思われる。
（さすがアッシュ）
絶妙のタイミングだ。
……よもや、そこに「自分は仕事に忙殺されて義弟とろくに時間も持てないのに」という私情が勝った結果の手配だとまでは気づかなかったが。
ウォルセンは心底清々……いや、朗らかに朝の空気を満喫した。
今日一日、一行はアシャス観光に明け暮れる——つまりは金色の疫病神につきまとわれることがないということだ。
こんな素晴らしいことはない。
（今日は……今日だけは、神宝だの柱神だの半身だの候補だのって話を聞かなくってすむんだぁ……）
疫病神の顔を思い出しながら、ウォルセンは心底安堵する。
彼女の申し出は、到底受け入れられるものではないのだから、拒絶するしかないわけで、だから話など一切聞くつもりはなかった。

彼女が正真正銘の『選定者』であることは、実は出会った翌日には確信していたが、だからといって関わる気など毛頭なかった。

ただでさえ、一族の女神の愛し子たる証を持って生まれついた身だ。

かつてマルシアス一族を救った女神と同じ痣を持つというだけで、傍流に生まれた身でありながら無理矢理本家に引き取られ、その後継者争いに勝手に投げ込まれた。

その騒ぎがようやく治まってまだ間もない今のこの時期――到底新たな火種を抱え込む気になどなれない。

(そりゃあ……柱神になれば、人間じゃなくなるわけだから後継者争い再発は防止できるだろうけど……)

ディエーンにおける柱神交代劇に伴う内乱の歴史を知る者としては、到底「はいそうですか」とはうなずけない。

ナルレイシアが持ち込んだ神宝は、どうやらディエーンに伝わるものではないらしいが、それでも南部一の大貴族マルシアス家から新たな柱神が出たとなれば、一族内外を問わず騒ぎが起きるのは火を見るよりも明らかではないか。

そのせいで生来あまり丈夫ではないアシュアイードが苦労するのはイヤだ。

第一……。

(カミサマなんかになったら、アッシュを助けることもできないじゃないか)

柱神は俗世に関わることを禁じられているはずだ。マルシアス侯爵となるアシュアイードはこれから政治に深く関わることになる。柱神などになったら、彼を支えることも補佐することもできなくなる。

そんなことはご免なのだ。

未だにアシュアイードのそばにいていいものかどうか躊躇いはある。第二のアタラクシア家が出現する可能性は皆無ではない。

離れたほうがいいのかもしれない——とも思う。

だが、たとえそうなったとしても、自分はどこかで親友と繋がっていたいと思うのだ。

あの幼い日、自分の命を拾い上げてくれた綺麗なアシュアイード。

彼のために自分ができることなら何でもやると、ずっと決めていた。

彼が自分をそばにと思うのなら、決して離れずそばにいよう。

いつか彼が自分を不要と断じたら、その時は一切の迷惑がかからないよう手配して離れればいい——この命はすでに彼のものなのだから。

我ながら、常軌を逸していると自覚はある。だが、こればかりはどうしようもないのだ——気づいたら、もうそうなってしまっていたのだから。

だから……ナルレイシアの申し出を受けるわけにはいかない。

（とはいえ、全然聞き入れてくれないんだもんなー）

あれだけはっきりきっぱりと、譲歩の余地もなく話を聞くことすら拒んだというのに……使命に燃える選定者は諦めるということを知らないかのようにしつこくしつこく話を持ち出しつづけてくれる。

毎日毎日厭きもせず切々と訴え続けるその姿は、当事者でなければ哀れを覚えるものだった。なまじ容姿が整っているだけに、ウォルセンの拒絶に悄然と項垂れた顔など思わず手を差し伸べたくなる代物だ。

しかし、そんなことをしたが最後、つけ込まれるのは目に見えている。

あの少女は――一見したところ、そうは見えないが――なかなかどうして強かなのだ。出会った翌日の彼女の行動を思い出せば、情け心など見せられるはずがない。

(強引で頑固で、なにがなんでも自分の思い通りにことを運ぼうとする……)

とんでもない娘だ。

だのに、なぜ自分は彼女のことをアシュアイードに告げる気になれないのか。

ネイスリーズが精霊たちに『何』を頼んでいるのか知っているにも拘わらず、そのことをどうして黙ったままでいるのか……。

勿論、未だ騒ぎが完全に決着したわけではない状況で、親友の心を煩わせたくないというのが最大の理由ではあるのだが……。

(なんだか……なんだか、誰かを思い出すようで憎めないというか……)

多大な迷惑を被っているというのに、なぜか強硬手段を執りたくないというか……その気になれないというか……。

（あんな強引で乱暴で人の話なんて聞かないで、目的のためには手段を選ばない身勝手な知り合いなんていないはずなのに――）

と、そこまで考えたとき、何かがウォルセンの琴線に触れた。

強引で、人の話を聞かないで――。

『もう、来るな』

そう言った自分に、

『うん、今日はもう帰る』

とぬけぬけと答えた少年――。

頑固で――。

『また！　熱があるのに、ベッドの中にまで本を持ち込んで！』

そんなことだから熱が下がらないのだと言ったら、

『あと少しなんだよ、ここで中断したら気になって、絶対そっちのほうが熱が上がるから』

しっかりと読みかけの本を抱え込んで放さなかった翡翠の双眸の……。

目的のためには手段を選ばない――。

『ねえ、ディー……』

寝台の中から洩れるやや掠れた声――。

『駄目だって』

一曲だけだって言っただろう？

なかなか眠ろうとしない義兄に、このままでは際限がないとかぶりを振る自分。

『もう一曲だけ。ねえ、ディー……本当にもう一曲だけ弾いてくれたら、絶対に眠るから……約束するから……』

その手の約束が果たされたことが少ないことを知るからこそ、ウォルセンは四弦を片付けにかかろうとしたのだ。

が――。

『ディー……』

熱に潤んだ極上の翡翠を目にしてしまえば……もう。

『本当に、あと一曲だけだからね』

折れてしまうしかなくなる自分に、相手は嬉しそうに微笑んで……。

（あ）

気づいた瞬間、ウォルセンはがっくりと肩を落とした。

ナルレイシアはアシュアイードに似ているのだ。

その言動が直線的か曲線的かの違いはあれど――この場合、どちらが厄介なのかは考えない

ことにする――強引で、人の話を聞かないで、頑固で、目的のためなら手段を選ばないあたり、そっくりなのだ。

（うわぁ）

頭を抱え込みながら、ウォルセンは「気づきたくなかった」と呟いた。

そして、さらに危険な可能性に思い当たり真っ青になった。

（やばい）

心底から、まずいと思った。

なぜとなれば――自分はこれまでアシュアイードの願いに逆らえた試しがないのだ。勿論、彼女とアシュアイードは違う。

違うが……しかし、可能性は完全否定できない。

ついうっかり、相手のしつこさに負けて一歩ぐらいと譲歩しかねない自分を思い、ウォルセンは唸った。

先ほども思ったことだが、あの少女はなかなか強かなのだ――一歩のはずが二歩、三歩……ついには、という事態も考えられないことではない。

「ついうっかりで人間捨ててたまるかっっ！」

やはり仏心など起こすものではない。

彼女が困ろうが何しようが、知ったことではない。

幸いテキは現在アシャスを観光中のはず――さっさとアシュアイードに報告して、何とか彼女だけでも遠ざけなければ！

思い立ったが吉日、善は急げの言葉に従い、ウォルセンは親友を訪ねるべく立ち上がった。

が。しかし。

思い立ったのが、遅すぎた。

「うきゃあぁぁっ！」

絹を裂くような少女の悲鳴が響き渡り、ウォルセンはびくりと肩を震わせた。

風霊が運んで来たというには、いささか近すぎるそれは、悲しいことに記憶にある声で……

本来であればあり得ない方向から聞こえてきたのだ。

ウォルセンの部屋は黒鷲城の三階に位置している。

その露台から、少女の悲鳴が聞こえるなど、あってはならないことである。

しかし、現実は小説より奇なり――という言葉もある通り、現実にそこには悲鳴の発生源が存在していた。

青光りするしなやかで優美な体軀、青銀と青黒の二対の翼――伝説にしか登場しない雷馬の背中にしがみついた格好で！

絶句しながら、ウォルセンは先ほどの自分の考えにひとつ訂正を入れた。

ナルレイシアとアシュアイード――確かに似ているところはある。それは否定しないが、し

かしだ。

（アッシュはここまで非常識じゃない）

ウォルセンのなかで、『非常識の化身』と認定されたことを知ってか知らずか、金髪に蜂蜜色の瞳を持つ少女は、紫色になった唇に無理矢理笑みを刻むと「お、お邪魔します？」と、なぜか疑問符つきの言葉を投げてきたのである……。

3

一通りの指示を出し終えたとき、アシュアイードは深いため息をついた。
肩が重い。
首も硬くなっているし、書類と睨み合うばかりの日々が続いているせいで目の疲れも激しく両方のこめかみがずきずきと痛みを訴えてくる。
それもあってか、どうにも心が落ち着かない——それは今日ばかりのことではない。
ここ十日ほど、苛立ちが募っている自覚はあった。
元凶……いや、原因はマルシアス一族の女神ファタランテに縁のある胡琴を持ち込み……いやいや、わざわざ届けてくれたガライラ大公国の柱神一行である。
(なにを考えてるのか……)
他国の関係者を正式に迎えるのは、ディエーン王国にあって微妙な立場にあるマルシアス家としては避けるべき事態だった。
しかし、それが世界の『空』を支える柱神となれば話は違う。

たとえ他国に恵みをもたらす存在であろうとも、世界そのものを支える御柱を粗末に扱っていいはずがない。しかも彼が携えてきたのが、一族にとって至上の存在に関わる品だというのでは。

さすがに一族内がごたごたしている最中であったなら――もっとも、それはアシュアイードの周到な準備による粛正行動だったわけだが――無礼を承知で門前払いもやむなしとは思っていたのだが、さすがは神籍を持つ者というべきか、こちらの騒ぎが一通り片付くのを待っていたかのごときタイミングで長逗留していたエアランを出立した一行を足止めすることは、さすがにやるべきではないと思ったのだ。

彼ら――否、彼の目的がファタランテ縁の胡琴をマルシアス家に届けるというものだったから尚更だった。

（ならば、さっさとその品を受け取り、二、三日もてなした後に円満にお帰りいただこうと思っていたのに……）

実際、そうなるはずだったというのに――だ。

目算は、見事に外れた。

第一の誤算は、ネイスリーズが一族以外にはほとんど知られていないはずの『女神の愛し子』……別名『聖印の子供』の存在を知っていたことだ。

しかも今現在、それが生存していることを把握していたこと。

ウォルセンのことを確信を以て持ち出した柱神の輝ける美貌を目にした瞬間、刹那ではあるがアシュアイードは心底精霊たちを呪ったものだ……特に風霊を。

精霊たちと親しむ能力を持つ義弟から聞いた話によれば、風霊ほど世間話の種集めに貪欲且つ自らが集めたそれらをばらまくのに熱心な者はないということだったからだ。

どれほど人間が努力しようと、精霊と彼らに慕われる柱神を前にしてはすべての隠匿行為は無駄でしかない。

守り抜きたい秘密を抱え込む者にとって、これほど惨い現実はない。

(思慮もないくせに集めた端から垂れ流すような風霊など呪われてしまえ!)

……それが単なるつい、などではなく限りなく本気だったことは……秘密だ。

しかし、それでもアシュアイードは伊達に病弱にも拘わらず——先日片付けた一部勢力を除いて——一族の総領息子と認められたわけではない。

表面上はにこやかに、この上なく喜ばしい表情と声音で、ウォルセンのことを持ち出したネイスリーズに応じたのだ。

女神の愛し子であるウォルセンとつきあいの長い彼は、気を引き締めある種の注意をすれば精霊たちにさえ感情を読み取らせぬ術を学んでいた……病床時、読みたい本をウォルセンにばれずに読むために培った知識と経験によるものだが。

『デ……いえ、義弟の四弦を……? 何という名誉でしょう、ここしばらく体調を崩して寝込

んでいたのですが、そういうこととなれば、義弟も張り合いができましょう』

副訳――目当ての相手は現在体調不良です。

しかし、アシュアイードの言葉にこめた――はず――の意図は相手には伝わらなかった。

人外魔境の美貌の『人外生物』は、その言葉を聞いた途端、直視しかねるほどに輝かしい笑顔で頷いたのだ。

『そうですか！　演奏を聴かせてもらえますか……！　いや、心底助かりました！　実はこの四弦を女神のご親族から委ねられた方が、最後までゴネ……いいえ、無念だと仰ってらしたのが、この四弦が実際に空気を震わせる音色を耳にする事ができないということで……なにがなんでも一度は愛し子に演奏してもらうように、と。それを風霊たちを通じて聴くからと……叶わなければ、いったいどんな報復が待っているかと……イヤ、本当にほっとしました！』

晴れやかにきっぱりと、どんなとんでもないことを口にしたのか――かの現人神は自覚しているのだろうか。

いや違う。問題はそんなことではない。

重要なのは、その言葉によって、選択肢がひとつしか残されなかったということだ――つまり、ネイスリーズの要望に添い、ウォルセンに四弦を演奏させるという途しか。

そうは見えないが、わざとだとアシュアイードは確信した。

（……狸が……）

至高の存在に向けて良い言葉ではないが、考えるのは勝手である。
表面上は穏やかににこやかに、『それでは場を設けましょう』とは答えたものの、このとき彼はかなりの怒りに支配されていた。
だが、そこで冷静さを失うほど未熟ではない。
(取りあえず、一度聴かせれば……それで納得してお帰りいただけるのなら安いものだ)
半ば無理矢理自分にそう言い聞かせ、アシュアイードは嫌がるだろうウォルセン攻略に思考を切り替えたのだ。
裏はなさそうだが得体の知れぬ引っかかりを覚えさせる『柱神ご一行』にお引き取り願うには、どうやらそれしか方法はなさそうだから、と。
以前の水準に未だ戻っていない腕前を気にしているウォルセンには悪いが、ネイスリーズがそれでいいと言っているのだ……可哀相だが、ここは恥を忍んでもらおうと、あっさり決断したアシュアイードは、実は結構ひどい性格なのかもしれない。
だが、このときの判断を彼はすぐに悔やむことになった。
人外美貌の人外生物は、図々しさまでも人外だったのだ。
なんと、ウォルセンの巧みとは言いかねる——音色は確かに極上だったが——演奏に大層感激した様子で、連日彼の部屋に押しか……いや、部屋を訪ねては演奏を強請……もとい、頼むようになったのだ!

ウォルセンは体調がまだ本調子でないからと、やんわり断ろうとすると、『それはいけない、よければ［気］を分けてさしあげよう』などと言い出す始末。

おまけにそれを聞いたお付きの少女のひとり――金髪のほうだ――が『ネイスリーズさま、名案です！　是非そうなさってください！』と頷くと同時にこちらを振り向き、『すごーく、効くんですよ、ネイスリーズさまの［気］って！　ライ……さんの怪我も、おかげであっという間……と言うのは大袈裟だけど、ずいぶん早く治ったんです。お医者様が首を傾げるぐらいの快復力で……まさかネイスリーズさまの［気］のおかげですとは言えなくて、あの時はちょっとびくびくしたんですけど。お医者様のライ……さんを見る目が珍獣か何かを見るようなって、そういうことは関係ありませんでしたね。ごめんなさい』と、立て板に水の勢いでまくしたててくれたのだ。

イェイシスからの報告にあった護衛の青年の驚異の快復力のタネは柱神の『気』か……などとぼんやり思っていたアシュアイードは瞬時に我に返った。

不調でもないウォルセンに、過剰な『気』など注がせたら、逆になにが起こるかわからないと気づいたからだ。

なにより――。

（こんな人外の『気』など、ディーに注がせてたまるか！）

という本音が一番だったのだが。

しかし、せっかくの柱神の好意を断ったため、『体調不良』を理由に断るわけにもいかなくなり、結局押し切られる格好で、彼らの訪問を受け入れることになったのだ。

それでも、せいぜい二、三日のことだろうと思っていたというのに――すでに十日だ。

毎日毎日飽きもせず、柱神一行はウォルセンの部屋を訪ねては、四弦の演奏を強請り、他愛のない話題で盛り上がっているのだという……監視の者たちからの報告を疑う理由はないので、最初に懸念したような意図は一行にはないのだろう、とは思う。

思うが――。

(どうにも、落ち着かない……ノアイールの心眼が利かない相手というのが、こんなに厄介だとは思わなかった……彼女に依存しているつもりはなかったのだがな)

心眼で以て多くのことを見通す占術師の女性の言葉を思い出しながら、アシュアイードはひとつため息をついた。

『あまりにも、御柱の君の輝きが強すぎます……直視することもできませぬ』

おかげで、ネイスリーズを除く一行の身元を洗うことさえできない。

偽造が可能な書類による情報を信じるしかないというのはどうにも歯がゆい。仮にも柱神たるもの、文書の偽造などあり得ないはずなのだが、あの青年の狸ぶりを思うと、疑わずにはいられない……単なる勘に過ぎないが、そうしたものを軽視するべきでないことをアシュアイードはこれまでの人生で学んでいた。

もしかしたら、監視の者たちには気づかれない方法で柱神がウォルセンに何か干渉しているのではないかとも思ったが、年下の親友から特に何も報告がないということは、杞憂なのかもしれない。

だが、落ち着かないものは落ち着かないのだ。

（あるいはディー自身気づいてないだけなのかもしれない……あれは人が好すぎる上に信じられないところで抜けているから……）

直に話してみる必要がある――しかし相手は風霊という超自然の盗聴人員（？）を持つ柱神である。

城内にいられたのでは、話が筒抜けになる可能性は高い。

そこで、アシュアイードは彼らを一時期黒鷲城から追い出す方策を取った。

『せっかくですから……』

と、案内役をつけてアシャス観光に放り出……いやいや送り出したのだ。

黒鷲城には、用途に応じて発動可能な結界陣がいくつか存在する。その中のひとつを発動させ、城内の精霊たちが街に出ないようにした上で、ウォルセンの部屋を訪ねるつもりだった。

しかし、久しぶりに親友の演奏を独占できると喜んだのも束の間、配下から気になる情報が届けられた。

各地の緑神神殿で、妙な動きが見られるという内容のそれに、舌打ちしつつも放置するわけ

にもいかず、更なる情報収集の指示を出さざるを得なくなったのだ。

ディエーンにおいて、黄神神殿以外の六神殿は特に大きな力を誇るわけではない。

これはこの国の柱神が黄属であるからだが、だからといって無害とは言い切れない。跡継ぎになれない貴族の子弟の多くが神殿に送られるからである。

かつて何度も柱神交代の度に内乱を繰り返してきたディエーンは、だからこそ黄神神殿の人事には慎重に慎重を重ね、間違っても玉座に欲を抱くような家柄の者が入り込まぬようしてあるが、それはつまり、そうした人材は残る六神殿に配属されているということだ。

(緑神神殿の最高司祭は確か派閥嫌いの学者肌だったはずだ……頂点が動いているのなら、柱神関連ということになるが、我が国の柱神は一年前に選ばれたばかり……まさか、新たな神宝が見つかったとでも？　いや、あり得ない。もしもそうなら、この程度の異変ですむはずがない、黄神神官と違い、神宝の扱いに慣れていない彼らなら、もっと大騒ぎするに決まっている……となると……)

最高司祭以外の何者かが動いているということか。

(確か緑神神殿の第二位と第三位は揃って権門出身……しかも第三位の方は、マルシアス家に利権を奪われたと言って逆恨みしていた一族だったな……)

無関係かもしれないが、懸念材料は放置しておくわけにはいかない。

さまざまな可能性を考慮し、方々に手配するのにはかなりの時間を要した。

窓から見える太陽は、すでに中天を過ぎている。
（今日は一日、ディーの部屋で過ごすつもりだったのに……）
とんだことで時間を喰ってしまった。
しかし、時間はまだ残されている。
ネイスリーズ一行につけた配下には、夕食まで街ですませるよう言い含めている――当分は帰って来ないはずだ。
（緑神神殿のことは、夜にでもノアイールに視てもらうとして……十日ぶりにディーの四弦を堪能させてもらおう……）
技術など関係ない、ウォルセンの魂そのものが紡がれているかのようなあの音色を聴けば、このささくれだった気分もすぐに落ち着くに違いない。
幼い頃から、彼の胡琴と歌声以上に自分の心を和ませるものなどなかったのだから――。
（まあ、歌声に関しては独唱というわけではないけれど……）
そう思った途端、先日の義弟のしかめ面を思い出し、知らず口元が緩んだ。
ある時期を境に変わったウォルセンの歌は、特定の条件が整わない限り、当人が言うとおり『歌とは呼べない代物』に成りはててしまった。だが、その条件さえ揃えば、至上の歌声が紡ぎ出されるのだ……。
（御一行が帰り次第、時間を調整して二、三日郊外の別宅にディーを連れて行こう……あそこ

なら、あれが歌っても支障はないし……かれこれ三年ぶりになるかな？）

楽しみができたとばかりに、上機嫌で歩き出したアシュアイードはこの時想像もしていなかった――それが叶わぬ夢となろうとは。

異変に気づいたのは、ウォルセンの部屋の扉をノックしようとしたときのことだ。

扉の向こうで、複数の人間が言い合うのが聞こえてきたのだ。

分厚く頑丈な造りの扉は防音にも優れており、会話の内容までは聞こえないが、確かにウォルセンと誰かが激しく言い合っている気配が伝わってくる。

（ディーと……甲高い声……子供、いや娘か？）

いったい誰が、と思ったアシュアイードの脳裏に真っ先に浮かんだのは、自身の婚約者である少女の顔だ。

ラルクティア家のファンディアは父ザイオン同様、アタラクシア家が潰れた今でもウォルセンを警戒視している。正確には、一族内の何者かが御輿として担ぎ出してもおかしくない『聖印の子供』たる彼を、だが。

ウォルセン自身は一度も洩らしたことはなかったが、彼女が以前彼に相当きつい言葉を投げ

つけていたらしいことは家人の報告で知っている。
さては、またしても過剰な――余計な、ともいう――親切心でもって、義弟に要らぬ『忠告』を与えるために来たのだろうか。
だが、すぐにアシュアイードはその可能性を切り捨てた。
会話の内容は伝わって来ないが、室内でウォルセンが負けずに言い返している様子に気づいたからである。自分を立てることを第一に考えている節のある年下の親友は、それだけにラルクティア家の面々に対して、必要以上に腰を低くする癖を持っている。
ファンディア相手にウォルセンが対等に言い返すなど考えられない。
(だとしたら……相手は誰だ?)
来客の予定はなかったはずだ。
また、不意の客であってもその知らせはまず当主代行である自分に来るはずだ。それがなかったということは、相手は正当な方法でこの部屋を訪ねたわけではないということ――つまりは。
(不法侵入者……まさか、刺客か!?)
あり得ないとは思わなかった。
ウォルセンは時間稼ぎのために会話――というより怒鳴り合い――を続けているのかもしれない。だとしたら、一刻も早く警備の者を呼び、賊を捕らえるべきだと、アシュアイードの理

性は告げていた。

しかし、常に冷静であることを自身に課してきた彼が、この時ばかりは本能的な恐怖ゆえに発作的な行動に出た。

警備の者を呼ぶのではなく、体当たりする勢いで扉を開け、室内に飛び込んだのだ！

まさに、その瞬間――アシュアイードの耳に飛び込んできたやり取りは。

「そんな小汚いものが神宝のはずがあるか！」

「触ってくれたら変わりますって！　なによりこの緑の神宝は……あ、翠唱子って名前なんですけどっ！　翠唱子はエアランでとっくにウォルセンさんを選んじゃってるんですからっ！」

「信じられるかっ！　たとえそれが本当でも、断固拒否するっ！　おれは絶対、絶対、絶対、絶対っ！　柱神になんかならないっ！」

……彼の優秀な頭脳を凍りつかせるに充分な破壊力を持っていた。

4

「ふたりきりでじっくり話し合う機会を作ったほうがいいね」

どこまでも頑なウォルセン攻略にくじけそうになっていたナルレイシアに、ネイスリーズは軽やかな笑顔でそう提案した。

「是非お願いします！」

当時切羽詰まっており、もう藁にも縋る思いで美貌の柱神の申し出に一も二もなく飛びついたナルレイシアは――後日、心身ともに非常な忍耐を強いられることになった。

アシャス観光に出かけたその日――ネイスリーズは風霊に頼み、まるでそこにナルレイシアがいるかのように見せかけ――なんでも光線の加減を変えることでそういうことが可能なのだそうだ――彼女が単独行動できるように手配してくれた。

ついでにこっそりウォルセンの部屋を訪ねられるようにと移動手段……というか、移動用の乗り物まで用意してくれていたのには、心から感謝を覚えた……当の『乗り物』を目にするまではの話だが。

それを見た瞬間の、ナルレイシアの心境たるや……筆舌に尽くしがたいものがあった。

「こ、こ、これ……に乗るんですか……」

ぴしりと凍りついてしまった彼女の目に映っているのは実に実に幻想的な美しい生き物だった。

エアランの宿の中庭で初めて目にした時は、感動に心が打ち震えたものだ。

雷馬――閃公。

青光りする体軀も青銀と青黒の二対の翼も眩いばかり――その姿を目にするだけで感動が胸を締めつけることに変わりはない。

しかし……それ以上に大きな感情が、ナルレイシアを支配しているだけのことだった。

二対の翼が意味する通り、雷馬は大地ではなく空を――しかも超上空を超高速で――駆ける生き物だった。

超がつく上空――つまり、ものすごく高い、足場も何もない空中を。

それは高所恐怖症のナルレイシアにとって悪夢でしかない。

しかも、閃公には箱形の車さえついていない……いや、それどころか鞍も手綱もつけられてはいなかった――いや、大きな二対の翼を考えれば、とても普通の馬のように跨れるものでもないから、そうしたものをつけるだけ無駄なのかもしれないが。

だが、だ。

「ど、どうやって乗ればいいんでしょう……？」

涙目になってネイスリーズを見上げながら、ナルレイシアはこの時一縷の希望を抱いていた……裸馬状態の雷馬に『単なる人間』に過ぎない自分が乗れるはずがないのだと、遅まきながらにでも麗しの柱神が思い至ってくれないものか、と。

しかし期待は空しく霧散する。

「大丈夫」

にこりと微笑む青年は、なんでもないことのように、こう答えてくれたのだ。

「閃公の背中の上に正座して、たてがみにしがみついてたら、彼は振り落としたりはしないから」

聞いた瞬間、（ひいぃぃっ！）とナルレイシアは胸中で悲鳴を上げた。

鞍も何もない雷馬の背中にちんまりと正座して、摑めるものはたてがみのみ――。

「落ちます！　絶対に落ちますっっ！」

それも超上空を飛行移動中に――。

それは不安などではなく、はっきりとした確信だった。

もう、くっきりと脳裏にその光景が浮かぶほどに！

空高く舞い上がった優美な雷馬の背上で、かちんこちんに固まり意識朦朧とした自分が、ふとした拍子でころりと転げ落ちるさまが、それはもうまざまざと！

「無理です！　絶対、絶対、絶対落ちます！」

悲鳴を上げたナルレイシアに、しかし美貌の柱神はやはりにこやかに、人間ならざる常識によってかあっさりと答えた。

「それも大丈夫。落としても、彼なら必ず回収してくれるから」

くらくらと目眩を覚えたとしても、誰もナルレイシアを非難することはできなかったろう。

しかも、ネイスリーズは――決して意地悪のつもりはなかったのだろうが――止めとばかりの言葉を添えてくれたのだ。

「言っておくけど、この子以外で黒鷲城の結界の穴をかいくぐれる子はいないから」

つまり、代替策は望めないということだ。

ナルレイシアは恐怖の空中飛行を受け入れるしかないのだと……それ以外にウォルセンとふたりで会うことはできないのだと――その瞬間諦め……もとい、覚悟を決めたのだ。

その後の閃公による移動中のことは思い出したくない――というか、思い出せない。

始終目を瞑って、ひたすらに雷馬のたてがみにしがみついていたのだが、風の強さや冷たさでどれだけ上空を移動しているのかが伝わってきて、それだけで失神寸前だったからだ。

ようやく目的地である黒鷲城上空にたどり着いたときには――客観的に見ればそれは短い時間であったが、ナルレイシアにとっては永劫にも思える恐怖のそれであったのだ――青息吐息だった。

だから、呆然とした顔で自分を見つめるウォルセンの眼差しに気づいたとき、ぼやーっとした頭で決断したのだ。

黒鷲城滞在もすでに十日を過ぎている。

いくら柱神一行とはいえ、これ以上の長逗留は周囲からあらぬ関心を引く危険がある。

どうやら一族内で騒ぎがあったらしいマルシアス家にとって、そんな危険要因は遠ざけたいところだろう。

つまるところ、これはネイスリーズから与えられた最後の機会だということだ——ウォルセンを説得するための。

だとしたらもう、躊躇っている余地はないではないか。

覚悟を決めた——開き直ったともいう——ナルレイシアは、よろよろと閃公の背から降りるなり、手首に嵌めていた神宝『翠唱子』を外し、右の手で摑むとそのままずい、とウォルセンに向かって突きだした。

あまりの異常事態に意識がついて来れないのか、ウォルセンがなにやら焦った顔で「……なに、それ？」と訊いてきたのに対し、脳内配線の一部が恐怖の空間飛行のせいで切れてしまったナルレイシアは……それはそれはにこやかに、答えた。

「緑の神宝です。受け取ってください」

ひくり、とウォルセンの口元が引きつった……が、それには気づかないふりをする。

これが最後と思えば、退く気はない。というよりそんな余地はどこにもない。

「さあ、受け取ってください」

大丈夫、痛くありませんから——自分でもなにを言っているのか怪しい言葉を口にして、ナルレイシアはさらに一歩踏み出した。

つられたように、ウォルセンが一歩後ずさる。

逃してたまるかと、ずずい、と二歩また進めば、気圧された様子の青年もまた二歩後ずさろうとして……背後にあった長椅子につまずいた。

どすん、と椅子に座り込む格好になった彼に、すかさずナルレイシアは肉迫した。

立ち上がる隙を与えず、青年の正面に立ち、摑んだ翠唱子を突きつける——だが、ウォルセンは相変わらず頑なだった。

「要らないから！」

「いいえ！　必ず要るってわかりますからっ！　手にとってくださったら、それだけですぐに！　嘘じゃありません、ここはひとつ騙されたと思って——」

「嘘じゃないのに騙されたと思ってって矛盾してるだろうがっ！」

「いいえ！　矛盾なんかありません！　まずは手に取って……実感することで理解が生まれるんです！　そうして自分がまさしく神宝の半身だとわかれば、要らないだなんて絶対思わなくなるはずですっ！」

言い合いというよりは怒鳴り合いに近いやり取りを交わしながら、ふたりがなにをやっているかと言えば、翠唱子の押し付け合いだった。

ナルレイシアはとにかく緑の神宝をウォルセンに触らせさえすれば何とかなるとの思いのもと、何が何でも触らせようとし、一方の青年はそんな彼女の意図を感じ取ってか、こちらも何が何でも触るまいと彼女の手首を掴んで遠ざけようとする。

それは……長椅子に座るウォルセンにのしかからんとする美少女の図――に限りなく近かったのだが、共に必死な攻防を繰り広げる両者にその自覚はない。いや、正確にはなかったというべきか……ある時までは。

「なんだよ、そのどこかの押し売り商人みたいな口上は!?　絶対、絶対、絶対ご免だ！　第一に、だ！」

体勢の悪さにも拘わらず、必死に抵抗するウォルセンが叫んだ。

「そんな小汚いものが神宝のはずがあるか！」

（ああ、やっぱりそう思うよね）

ちらりとそうは思ったが、退けないナルレイシアは強気に攻めた。

「触ってくれたら変わりますって！　なによりこの緑の神宝は……あ、翠唱子って名前なんですけどっ！　翠唱子はエアランでとっくにウォルセンさんを選んじゃってるんですからっ！」

これは確信していることだから自然に声に力が籠もった。
だが、熱意は常に相手に真っ直ぐに伝わるとは限らないのだ——ということを、改めて彼女は痛感した……ウォルセンの反応で以て。
「信じられるかっ！　たとえそれが本当でも、断固拒否するっ！　おれは絶対、絶対、絶対、絶対っ！　柱神になんかならないっ！」
「なんで、どうして、そんなに頑ななんですか!?」
悲鳴混じりの問いを放った瞬間のことだった。
……第三者の声が室内で響いたのは。
「……ヴィル・ダカール……？」
呆然とした声音にそちらを振り返ったナルレイシアは、そこに想定外の人物を認めて一瞬固まった。
褐色の髪に極上の翡翠の双眸を持つ青年が、信じられないものを見たという顔で自分を見つめていたのだ。
（ええ……っと、確か、アシュアイードさん……？）
会ったのは二度だけだが——その綺麗な顔と物腰の柔らかさに好印象を抱いたので、今のこの焦った様子の彼の表情やら声には意外の念を覚えた。
が。

（ちょっと、待って）

ふと、自分とウォルセンの位置関係や体勢を思い出した瞬間、ナルレイシアはざーっっ、と脳裏が凍りついた。

恐怖の空中飛行のせいで、思考の一部がぶっちぎれ……押しに押しに押しまくった自覚はさすがにある。

そうして――翠唱子をウォルセンに押しつけ……もとい受け取らせるために、ずいずいずいと迫って、彼が長椅子に足を取られたのをいいことにさらに距離を詰め、（翠唱子に）「触れ」「イヤだ」の押し問答を至近距離で繰り広げた記憶はさすがにある。

その結果成立した今のこの体勢はといえば……。

（わたしってば、もしかしてウォルセンさんにのしかかってる……!?）

……現状を冷静に客観的視点において見つめた場合、そうとしか表現できないと認識した瞬間、ナルレイシアは背筋に冷たい汗がどっと流れるのを感じた――。

（なんでこんなことになったんだ……）

理解不能な事態を前に、ウォルセンは必死に考える。

目の前では金色の疫病神が、迫力満点の笑顔で小汚い腕輪を押しつけようとのしかかっている。

自分はといえば、彼女の尋常ならざる気魄に圧され、後ずさったのが敗因で、長椅子に足を取られ座り込んだ格好で……体勢を立て直す間もなく距離を詰められたものだから、動くに動けない状況だ。

傍から見れば、色っぽい場面に見えるかもしれないが、両者の間に流れる空気にそんな甘やかなものはかけらとして存在しない。

ふたりとも本気の本気で腕輪の押し付け合いをやっているのだ。

緑の神宝だという『翠唱子』を目にした途端、ウォルセンは（まずい）と直感した。彼女の言うままに手に取ろうものなら、ありがたくない未来が決定してしまうと確信してしまったから本気で退けようとした。

これが普通の状態であれば、それは難しくはなかったろう。

相手は年下の少女で、自分は平均よりは細いかもしれないが、成長期の男だ——力で劣るはずがなく、いざとなったら逃げ出すことで危険を回避することもできたはずだ。

（いや、ドレスで全力疾走できる非常識な娘だから、追いつかれる可能性はなきにしもあらず、か……？）

エアランの街での追いかけっこを思い出し、小さく訂正を入れるが、それでもこの黒鷲城内

なら、隠れる場所は無数にある。
ネイスリーズがいない今ならば、精霊たちは自分の味方だし、万が一にも見つからないよう隠れることは難しくない。
だがそれは……自分が間抜けにも長椅子に腰を落とした状態でなかったなら、の話だ。
立ち上がることもできないほど肉迫された状態では無理だ。
（誰かなんとかしてくれっ！）
敢えない望みを抱いたところで事態が変わるわけでなく、ウォルセンは必死に抵抗するしかない。
とにかく、腕輪を受け取ったら最後だという危機感はいや増すばかりなのだから。
要る要らないの押し問答の末、「絶対、柱神になんかならない！」と叫んだのと前後して、部屋の扉が開いたのに気づきさらに「ヴィル・ダカール……？」という声が聞こえたほうに目をやった瞬間、ウォルセンの頭は真っ白になった。
常になく動揺を露にした顔で、翡翠の瞳の親友が立ち尽くしていたのだ！
（アッシュ!?）
なぜ、どうしてと、意味をなさぬ疑問だけが脳裏を埋め尽くす。
だが、それは長くは続かなかった。
見る間にアシュアイードの表情から感情の色が消えていくのを目の当たりにしたせいである

……元々が整った顔立ちをしているだけに、全くの無表情となったその姿は、言いしれぬ不安を、恐怖を見る者に与えるのだ。

そして、それもまた一瞬で笑顔に切り替わる——双眸に宿る感情を除いて。それはそれはにこやかなそれに。

（ぎゃーっ！）

ウォルセンは内心恐怖の悲鳴を上げた。

親友は——激怒していた。

5

かちゃかちゃと磁器が小さくぶつかる音がする。
茶器の載った盆を手に、ウォルセンは一人掛けの椅子に腰を下ろしている親友に、恐る恐る声をかけた。
「あったかいお茶で、いいよね……？」
内心のびくつきが如実に表れた声音に、しかし相手は答えようとしない。
（怒ってる……静かに深ーく怒ってる！）
こうなったアシュアイードの扱いには慎重を要する――ということで、機嫌を取るために茶の用意などしたわけだが……怒りの極寒嵐は治まる気配を見せない。
「あー、今日休みの予定だったのに……なにか面倒事が持ち込まれたんだって？　疲れたよね、よかったら……」
四弦でも弾こうか――と続けるはずの言葉は、親友の返事に遮られ、喉の奥で消えた。
「ああ……緑神神殿でなにか動きがあったらしいと報告があってね」

無難な話題を持ち出したつもりが、とんだ地雷だった。

（緑神神殿……）

ばくばくと心臓が暴れ出す。

「そ、そうなんだ……」

我ながらなんと間抜けな相づちだとは思ったが、アシュアイードの怒りを抑えた声に、ほかにどう答えていいのかわからないのだから仕方ない。

返す返すもあの疫病神が憎い。

とんだ体勢でとんでもなく危険なやり取りの片棒を担いでいたナルレイシアは、アシュアイードに気づくなり数瞬凍りついたかと思うと、脱兎の勢いで逃げ出してくれたのだ！

露台に駆けだし雷馬に跨るまでの素晴らしい速度は人間離れしていた……残していってくれた災難の巨大さといい、もしかしたら少しばかり人外の血が流れているのではないだろうかと疑いたくなる。

本当に、腹立たしい。

（ひとりでさっさと逃げやがって……この状態のアッシュがどんなに恐ろしいか……！）

爆弾投下した本人だけが無事にすむとはあまりではないか。

（呪ってやる）

アシュアイードの沈黙の重さから思考逃避していたウォルセンは、けっこう本気で方法を考

え始めた。
が。
「……ヴィル・ダカール……」
とつぶやくアシュアイードの声に、あえなく現実に引き戻された。
「え、え、え!?　な、な、な、なに……!?」
情けなくも声がひっくり返る——盆を握る手が震え、ちゃかちゃかと茶器のぶつかる音が室内に響いた。
「……ずいぶん親しい様子だったけど……知り合いだったんだ……？」
水くさいなあ——くすくす笑いながらの声も、据わりきった翡翠の双眸を見れば空恐ろしくしか感じられない。
（こ、怖っっ！）
背筋に冷たいものがたらたらと伝う——まさしく蛇に睨まれた蛙である。
「知り合いっていうか、エアランで半日一緒にいただけで……」
嘘ではない。
しかし親友の目元が緩むことはない。
「ふうん……？」
全然納得していないのが明らかな白けた口調に、胃のあたりがきりきりと痛みを訴える。

「隠してるけど、実はけっこう人見知りの君が、半日であんなに打ち解けるだなんて、珍しいこともあるものだね」

ちくちくと刺さる言葉の棘が、イタい……。

「や、ほんとに……打ち解けるとかって話じゃないから！　遠慮してられない状況で一緒に行動したってだけの話で……」

なんとか誤解を解こうと必死に言いつのるウォルセンに、またしても「ふうん」と頷いたアシュアイードの瞳がきらりと輝いた。

「遠慮してられない状況、ね」

なにがあったのかな？

目線で問いかけられ、ウォルセンはまたしても自分が墓穴を掘ったことを悟る。

エアランでリーインに捕まるもとい保護される前に、物騒な客人に追いかけられたことは話していなかったのだ。

理由はいくつかあるが、その最たるものは、襲撃者たちの黒幕がラルクティア家である可能性が高いというものだ。アシュアイードを支持するかの家の令嬢が、彼の婚約者であることを考えれば溝を生むかもしれない情報はなるべく伝えたくないではないか……ラルクティア家が自分に刺客を放ったのはなにも初めてでないことを、とうにアシュアイードが知っていたとしてもだ。

「……まあ、その、熱心に話を聞いてほしいと言われてる最中にお客さんに襲われたものだから成り行きで一緒に逃げることになったってだけで。だから確かにぽんぽん言い合うようにはなったけど、でも全然親しいとかそういうことじゃなくて……」

「なるほどねえ」

それなりに納得した様子で頷かれ、ウォルセンはほっとした。

まだまだ空気は冷ややかだが、先ほどまでのブリザードの勢いはない。少しは機嫌が上向いたらしい……と。

しかし、それは早計な判断だったらしい。

「死線を共にかいくぐった仲なら、親しくもなるか……けどね、ディー」

わざと言葉を切って、アシュアイードが真っ直ぐにウォルセンを見つめてきた。

翡翠の双眸に、激怒の色はない。しかし、代わりに底冷えするような静かな光がたたえられているのに気づいた瞬間、彼は親友の怒りがまだ鎮火していないことを悟った。

「彼女、選定者なのだって？　君は知っていたんだね？」

問いかけの形を取った確認の言葉に、ウォルセンは思わずぶんぶんとかぶりを振った。

「知らなかった！　しつこく話を聞いてくれって言ってたけど！　彼女が選定者だなんて、ほんとにほんとに知らなかった！」

……嘘ではない。

エアランで行動を共にしていた最中、彼女は一言だって自分が選定者などと口にしたりはしなかった——からかうつもりでウォルセンが口にした「なに、あなたは選定者なの？」という台詞に、あからさまに狼狽えまくっただけだ。

そんな彼の様子をどう思ったのか——アシュアイードはふう、と息をついた。

「そう。でも、ネイスリーズさまと一緒に来た彼女を見ても、君はなにも言わなかったね……それはどうしてか、訊いても？」

声音は穏やかだが、言い逃れを許すつもりがないことを、緑の瞳が伝えてくる。

こういう時の親友が実に容赦ないことを知るウォルセンは、それでも必死に言い訳した。

「それは……出会ってすぐに、彼女が精霊に頼み事してるのを目の当たりにして、でもおれみたいに精霊が視えたり声が聞こえたりするわけじゃなさそうだから尋ねてみたら、『そういうことのできる人』のところで働いてるって答えたから……確かにネイスリーズさまと一緒に現れたのには驚かされたけど、じゃあ彼女が言ってたのはネイスリーズさまだったのか、と思っただけで……」

「じゃあ、彼女が選定者だって知ったのは、つい先ほどだと？」

アラを突かれたらどうしようと、内心冷や汗だらだら状態だったウォルセンは、アシュアイードの問いに飛びついた。

「そう！　びっくりした！　アシャスの観光に出かけたはずなのに、突然雷馬で露台に現れる

んだから！　挙句にあんなとんでもないことを言い出されて……ほんとに――」

心臓が飛び出すかと思ったよ、と。

言いかけたウォルセンの頬に、アシュアイードの右手がそっと触れた。

「……ディー」

優しい、優しい――しかし呆れを隠そうともしないその声に、びくんと心臓が跳ねた。

「君は、自分が嘘が下手だと自覚しているかい？」

「へ……？」

間抜けな声が出たのは、あまりに意外なことを言われたせいだ。

きょとんとしたウォルセンに、アシュアイードは苦笑混じりにこう告げた。

「他の人間に対してはともかく、君はわたしと母上に限っては嘘をつくとき、いつもある癖を出すよ……指摘して矯正されたら困るから教えないけどね」

（ええぇぇっっ!?　癖!?　癖って何だ!?　その癖のせいで、これまでアッシュたちについた嘘は全部もろばれだったってことか!?　しかも矯正されたら困るってなに!?）

脳裏に浮かぶのは、これまで彼らに対してついたいくつかの小さな嘘――気づかれていないと思っていたのに、笑顔で見逃してもらっていたのだとは……想像もしていなかった。

それはひどく気恥ずかしいことだった。

しかし、ウォルセンはすぐに今ここでそのことを告げてきた親友の真意を悟り、口元が引き

つった。
それは――。
（今回ばかりは見逃すつもりはない、ということ……）
再び背中に冷たいものが伝うのを感じる。
問い詰めると決めたアシュアイードは容赦がない。かつて何度も隠し事を暴かれた折のことを思い出せば冷や汗も出るというものだ。
「あ、あの……アッシュ……」
「ディー」
遮る声には、逆らうことを許さぬ力が溢れていた。
アシュアイードの長く綺麗な指が、彼の正面の長椅子を指さした。
「お茶はいいから、話を聞かせてもらいたいな」
翡翠の瞳に浮かぶのは、有無を言わさぬ支配者の光――。
それは命令に等しい。
「だから、座って？」
にこりと微笑む親友の顔に、逃れることがかなわないことを悟り、ウォルセンは内心天を仰いだ。
（カミサマ……）

救いがもたらされることはないとわかっていても、時に人間はそれでも神を呼ばずにはおれぬのだ。

そうして……やはり救いはもたらされず、ウォルセンはエアランの街でのナルレイシアとの出会いからこの十日間に『実際に』交わされた会話の内容を、洗いざらい吐か……もとい白状させられることとなったのである。

自室に戻るなり、アシュアイードは身近な壁に思い切りこぶしを叩きつけた。

（あの……狸が！）

脳裏に浮かぶのは、人間ならざる美貌の人外魔境の顔である。

油断ならない曲者だという印象は間違っていなかった。虫も殺さぬ顔をして、大した策士だ……完全にしてやられた。

（自分自身を目くらましに使って……とんだ爆弾を持ち込んでくれたな）

オアイーヴですら、彼の放つ気の強さゆえに、連れの三人を詳しく視ることが適わなかった——恐らくあの柱神は、そこまで狙って気配を抑えなかったのだ。

自らの輝きで以て、『選定者』の特異なそれを覆い隠した。

そして、もっともらしい理由を作って、周囲の不審を買うことなくあの少女を黒鷲城に連れてきた……華やかすぎる『黒子』ぶりを発揮することで、彼は真の主役から周囲の目を逸らしたのだ。

彼らが俗世に関わることを禁じられていることで、つい忘れがちだが、関わらないからといって彼らが無垢で世慣れていないとは限らないのだ。なにしろ彼らはかつて、確かに人間であったのだから！

（やられた……選定者に、緑の神宝だと!?　緑神神殿が騒がしくなったのはそのせいか……しかし、ガライラの柱神がついているのならディエーンの神殿が口を挟む権利は認められないはずだが――）

これが、よそ事であったなら喜んで情報だけ集めてすませていたところだが、その中心にウォルセンが巻き込まれているとなれば話は別だ。

放置などできるはずがない。

ようやく手元に取り戻したのだ。二年近くもの彼の不在を受け入れたのは、誰にも文句を言わせずそばに置くために時間が必要だったからだ。邪魔な石を取り除き、口うるさい周囲を黙らせ、二度と放さないために――そのためだけに連絡ひとつ取れない時間を耐え抜いたのだ。

（だのに……神宝に選ばれた、だと……？）

ウォルセンが新たな柱神になるというのか。

人間ならざるものへとその身を変えるというのか。そして俗世に関わらぬために……再び、今度は永遠に自分のそばから離れると……!?

がし、と握りしめたこぶしから奇妙な音がした。

感情のこもらぬ表情で右手を見下ろしたアシュアイードは、爪で傷つけられた掌から血が流れ落ちるのを無言で見つめた。

（……許せるものか、そんなこと）

そうして彼はその足で書庫に向かった。

選定者に関する情報が記載された書類があることを、彼は知っていたのだ。

（確か、前回の柱神交代の折……マルシアス家からも候補が出たはず……その時の選定者が確か……）

目当ての書類は奥深くにしまい込まれていたが、そこに記された内容は、アシュアイードの期待に応えるものだった。

「やはり……」

に、と口の端をつり上げながら、彼は書類を自室に持ち帰った。

時間はあまり残されていない——件の一行もそう思ったからこそ、今日の昼間のような強硬策に出たのだろう。

幸い、ネイスリーズの施した細工のおかげで少女の正体も、その目的も家人には洩れていな

い――だが、どこで誰がなにを耳にするかしれない状況下で暢気に構えているわけにもいかない……ウォルセンが新たな柱神候補だなどということは、決して知られてはならないのだ、永遠に。

そのためには――。

すうっと細めた目で、アシュアイードは二、三度口をきいただけの少女の顔を思い浮かべた。

見事な金髪と蜂蜜色の大きな瞳を持つ少女は、今や看過できぬ存在となったのだ。

「悪いね……だけどね」

小さく息をついた後、彼はその場に居ない彼女に向かって囁きかけた。

「おれは、ディーをカミサマなんかにさせるつもりはないんだよ」

ぞっとするほどに冷ややかなその声を、耳にする者はなかった――。

6

（し、失敗した……！）

蒼白な顔で閃公の背中から降りたナルレイシアははぁ、と大きく息をついた。

ネイスリーズたち一行の長逗留にそろそろ不審を抱き始めたらしいマルシアス家が提案してきた『アシャス観光』は訪ねてきた客である一行にとっては断れないものだった。

お家騒動が収まって間もない時期のことだ、この申し出を断れば、どんな憶測が侯爵家関係者に広まるかしれない。一応ディエーンとは関係のないネイスリーズが『看板』役を引き受けてくれたとはいえ、憶測が彼の祖国であるガライラにまで及んでは笑って済ませられない事態も起こりかねない。

だから、一行は素直にその誘いに乗ったふりをして、ナルレイシアだけが雷馬を駆ってウォルセンのもとへ駆けつけ、最終説得に当たるという計画だった——というのに。

（失敗も失敗、大失敗だわ）

よりにもよって、あんな場面を彼の身内に目撃されてしまうだなんて！

思い出すだけで羞恥のあまり叫びたくなる。

あの時はただただ必死だった。それは断言できる。

しかし、焦るあまり自分がやったことといえば……長椅子の脚に蹴躓き、腰を落としてしまった彼にまるでのしかかるように——神宝『翠唱子』を突き出す格好で……。

冷静に考えた場合、自分とウォルセンの体勢は、非常に……非常に危ういものだった。

あの時はひたすらに翠唱子を受け入れてもらうことだけに夢中になっていて、気づかなかったのだけれど。

しかし、改めてあの場の自分たちの体勢と、それを見てしまったアシュアイードがなにをどう感じたのかと想像してみれば……。

（うわぁぁんっっ！　絶対っ！　誤解されたっ！　年頃の娘が連れもなくひとりで異性の部屋を訪ねて……しかも、あれってば見ようによっては押し倒してたようにも見える体勢だったし……っ！）

絶対、強引にウォルセンのことを押し倒し、迫っていたようにアシュアイードには見えたに違いない。

そう、彼女が確信する根拠と言えば、茫然自失した状態で放った「ヴィル・ダカール……？」発言の実に一瞬後——全身を貫くような凍りつく気配をアシュアイードが放ったことにある。

ぞわり、と全身の肌が粟立つような強烈な気だった。
（あれって、やっぱり怒ったのよね……？　すぐに消えたけど……大事な義弟を押し倒すふしだらな娘だって、きっと思われちゃったんだわ……！）
これはいけない。
大変、よろしくない。
ただでさえ頑固なウォルセンを説得しなければならないというのに、その一番親しい間柄にある青年の不興を買ってしまっては、会うことすらままならなくなりかねない。
（ここはひとつ、誤解を解いた上で協力を仰がなくっちゃ！）
ウォルセンにはまだ告げていないことだけれど、もしもあくまでも彼が神宝を拒むとしたら――場合によっては彼の命が危険に晒される可能性があるのだから。
（セルフィアの最高司祭アルタードさまは、ファティ・リンシャも信頼なさってる方だから、事態が落ち着くまで待ってくださるとは思うけれど……万が一他の神官に……それも権門出身で野心むんむんの神官にばれたりしたら大変なことになりかねない……）
ディエーンに代々伝わる神宝のひとつ――『黄金の黄昏』の半身は一年と少し前に決定し、選ばれた少女が王家の養女となったことで内乱の危機は一応避けられた。
しかし、ここに新たな神宝が国内で見つかったとわかったら、玉座に色気を持つ貴族たちが蠢動し始めないとは言い切れない。

そんな者たちがウォルセンのことを知ったとしたら……。

（取り込もうとするだけならまだしも、ウォルセンさんがマルシアス家のひとだってことだけで危険視するかもしれない。ガスカールもマルシアス家は厄介だと言ってたし……それに、自分の一族から新たな柱神を出したいために、ウォルセンさんを邪魔だと思ったりしたら……）

アマンシールが柱神となった折、候補のひとりに選ばれていたマルシアス家の次男が暗殺されたことを思えば、あり得ない話ではない。

それに、ナルレイシアにはもうひとつ懸念していることがある。

それはセルフィアの神殿を辞した後、ファティ・リンシャから聞かされた話だ。

もしも神宝の半身が見つかっても、相手が了承するまではアゼルフィアに神殿への報告をさせないように言われ、首を傾げた彼女に老婦人が教えてくれたこと。

『神殿は、柱神の誕生を心から願っているわ。何しろ暗黒時代のせいで、神宝の数は激減してしまったのだから。空を……この世界を支える柱は、明らかに足りない状況なの。だから神殿は新たな神宝が見つかったら何をおいてもその半身を捜そうとする……ひとりでも多くの柱神が世界には必要なのですからね。けれど、半身に選ばれた者が皆、喜んでその運命を受け入れるとは限らない……それはそうでしょう、それまで人間として生きてきた者が、突然人間ならざるものへ変化することを受け入れるのは簡単なことではないわ。俗世に関わってはならない決まりがある以上、家族や恋人と離れなければならない場合もある……家族や恋人が政治に深

く関わる立場にある時などにね。最愛の家族や恋人と別れてまで、世界を支える柱となる決意を固めるのは生半なことではない……』

ファティ・リンシャの話は意外な内容だったが、しかしすぐにナルレイシアは得心した。

（そうよね、いくら崇高なお役目だとしても、家族や恋人と別れてまで務めようとはなかなか思えないわよねぇ……わたしだって、選定者だって言われた時、『証の硬貨』なんか捨てちゃいたいって思ったし……）

それに自分の場合は――あと三人は柱神を見極めなければならないのだけれど――役目を終えれば読書三昧の楽園の日々に戻れるだろうが、神宝の半身はそうはいかない。

柱神へとその身を変え、生涯世界を支え続けなければならないのだ。

神宝に選ばれたからといって即座にうなずくひとは決して多くないだろう。

（と……でも、あれ？　確か……？）

『神宝に選ばれたら拒否権はないんですよね……じゃあ、結局選ばれたひとは受け入れるしかないってことでしょうか？』

そう尋ねたナルレイシアに、ファティ・リンシャが憂い顔で息をついた。

『大抵の場合はそうなるわね。神殿は新たな柱神を立てるためには手段を選ばないこともあるから……けれど、一部のタチの悪い神官はね――』

そこで声を潜め、告げられた内容にナルレイシアは衝撃を受けた。

『あくまで拒むような半身など不要だと見なして処分に踏み切るのよ……世界を支える役目から逃げようとするなど、半身の資格なしだと、生きている価値がないと……身勝手なことこの上ないったら！』

憤慨も露に吐き捨てるようにそう言ったファティ・リンシャの顔を、ナルレイシアは一生忘れられないと思った。

『そんな……』

にわかには信じられなかった——しかし、それを告げたのは現在最年長……いや、最長老の座にある柱神なのだ。

事実なのだと認めるしかない。

もしも翠唱子の半身である人間が、あくまでも柱神となることを受け入れようとしなかったら……そのことが神殿に伝わってしまったら。

（神殿は、そのひとのことを殺そうとする……？　わたしが見いだしたせいで、命を奪われるかもしれないというの……!?）

『そんなの！』

認められない。

許せない。

蒼白になったナルレイシアに、ファティ・リンシャが『落ち着きなさい』と言った。

『だから、アゼルフィアには神殿にすぐには報告しないように言っておくのです。あの子は聡い……けれど、こんな事実を知るにはまだ幼すぎます。知ってしまっては隠す重圧に苦しむことになるでしょう……だから』

いいですね――念を押されてナルレイシアは即座にうなずいた。

確かにこんな話はまだ幼さの残るアゼルフィアに聞かせたい話ではなかったからだ。

そして、その時ナルレイシアは心に誓ったのだ――絶対に、絶対に翠唱子の半身を見つけたら説得しよう、と。

選定者としての役目は、確かに尊いものかもしれないが、そのために誰かの命が摘まれることになるなど到底看過できないのだから。

そうして――今。

不安は大きくなるばかりだ。

ウォルセンは意地になったかのように翠唱子を受け取ってくれない――このままでは、神殿が動き出す可能性はないとは言えない。神宝が見つかった以上、遠くない内にその半身は見いだされるものだからだ。

（アルタードさまにしても、いつまで沈黙を守ってくださることか……やっぱり、どう考えてもわたしひとりでは説得は無理そうだわ。ここは事情を打ち明けてアシュアイードさんに協力を仰ぐのが一番だわ！）

そうと決まれば善は急げだ。
ナルレイシアは部屋に戻るなりせっせとアシュアイード宛の手紙を認めた。
万が一他者の目に触れても大丈夫なように、言葉を選びに選んで伝えた内容は――。
『ご相談したいことがあります。内密にお会いできませんでしょうか』
要約すれば、そういうことだった。
(早く返事が来ますように……)
祈るような思いで、ナルレイシアは部屋付きの女性に手紙を託した。
それが思いがけない未来を引き寄せることになるとも知らずに――。

「駄目だったんですか？」
アゼルフィアの素朴ながっかりした様子にナルレイシアは打ちのめされた。
「あ、やー、その……説得の最中にアシュアイードさんが来て、ね。それで……」
その際の自分たちの体勢など――恥ずかしさのあまり――はしょって説明したものだから、赤茶の巻き毛の少女は不満そうに突っ込んでくる。
「アシュアイードさんて、あの綺麗で優しそうな方でしょう？　どうせなら事情を説明して味

方に引き入れてしまえば良かったのに……」

そんなこともしないだなんて、役立たず――とは、実際にはアゼルフィアが口にしたわけでも態度に出したわけでもなかったが、その時の体勢が体勢だったもので、ナルレイシアは思わず言葉に詰まってしまった。

（や、あの場面で即座にアシュアイードさんに「聞いてください、実はかれこれしかじかで、ウォルセンさん説得するのを手伝ってください」……だなんて言えないわよ）

何しろ……自分はウォルセンにのしかかっていた――としか見えない体勢だった！――のである。

「ま……わたしも突然のことで驚いてしまったし……しかも、驚き過ぎて即行で逃げ出してしまったし……恐慌状態に陥ると、なにをするかわからないって見本よね」

あは、あはと乾いた笑いが室内に響く。

「ナルレイシアさんって、そうは見えないけど突発事態に弱いひとだったんですか？」

アゼルフィアの――あくまで――素朴な問いに、「そうでもないと思っていたんだけど、実はそうだったみたいー」と答えながら、ナルレイシアはちろりとほかのふたりに目をやった。

寝室が三つに浴室が二つ、さらにはなんのためだかわからない部屋が幾つも繋がった……部屋というより一画を与えられたネイスリーズ一行だが、現在使用している部屋はひとつきりである。

寛ぐための空間であるその……というか、この一室には、いま微妙な緊張感に溢れる空気が漂っている。

発生源は……アゼルフィアではなく、勿論ナルレイシアでもなく——残る二人、ネイスリーズとライエンだ。

「……知れてしまったか……」

苦いものを孕んだ声を洩らしたのは美貌の柱神だ。

その隣でライエンがこれ見よがしなため息をつく。

そのわざとらしさにむっとするものを覚えながらも、ネイスリーズの様子が気にかかり、ナルレイシアは恐る恐る問いかけた。

「あの……やっぱりまずかった……んでしょうか……？」

（明らかに不法侵入しちゃったしなぁ……）

柱神の連れの行動としては、やはりまずかったかもしれない。

あれが原因でネイスリーズの評判が悪くなったらと思うと悔やんでも悔やみきれない——まあ、あの行動を唆したのは他でもない彼自身であるのだが。

「ネイスリーズさまへの印象が悪くなったりしたら……でもっ！　きちんと謝って説明すればわかってくださるんじゃないでしょうか!?　優しそうなひとですし、本当にウォルセンさんのこと大事にしてるみたいですし……」

しかし、美貌の青年の懸念は別のところにあったらしい。
「いや、それは別にいいんだけどね……今更悪評のひとつやふたつ増えたところで痛くもかゆくもないし」
あっさりと言い切られ、ほっとする一方、その内容に引っかかりを覚えずにはいられなかった。
（今更って……）
深く聞くと後悔しそうだったので、ナルレイシアは言葉を呑み込んだ。
「しかし、優しそう――ね。小鳥姫には彼がそう見えるわけか」
「え、えーと……ネイスリーズさまは違うんですか？」
思わず問い返してしまった彼女に、ネイスリーズがかぶりを振った。
「そういうわけじゃないよ……うん、確かに優しそうだよね。ただ、わたしは彼がこの城の主に似つかわしいという印象を抱いたものだから、少しばかり意外に感じただけだよ」
意味ありげな言葉に、ナルレイシアは首を傾げたが、相手はそれ以上説明するつもりはないらしく、あっさりと話題を切り替えてきた。
「まあ、お家騒動の後だからいろいろ考えなければならないことが多いだろうからね、もう少し時間をおいたほうがいいかもしれないね。それにしても……」
不意に、何かを思い出したかのようにネイスリーズがくすくす笑い出した。

「押し倒したんだって？　いっそ、そのまま迫って口説き落とせば良かったのに」
誰を――とは言われずともわかった。
瞬時に顔に血が上る。
（そ、そうだった！　この方は精霊たちから情報を得ることができるんだった――っっ！）
「押し倒したりしてませんっ！　あれは……あれは偶然そう見えるかもしれない体勢になっただけの話でっっ！　断じてわざとじゃありませんしっっ！　っていうより、口説き落とすってなんですか!?」
真っ赤な顔で慌てふためき、誤解を解くことに必死になったナルレイシアは、この時ライエンの瞳が不機嫌に翳ったことに気づかなかった――。

夜更け――。
少女ふたりが床に就いてしばらくしたころ、ネイスリーズとライエンは向かい合って座っていた。
それぞれの手には酒の入ったグラスが握られていたが、どちらもほとんど量は減っていない。

先に口を開いたのは柱神だった。
「ライ、君は彼をどう見るね？」
「どう、とは？」
精霊たちによる偽装を解かれた黒髪の青年は、探るような目を相手に向けたまま問い返す。
「はたして小鳥姫たちが期待するように、説得を手伝ってくれそうな人物だと思うかい？」
ネイスリーズの言葉に、青年はすぐに答えることはなかった。
不可思議な光を宿す瞳を宙に据えたまま、やがてぽつりと返された言葉は——。
「難しい問題ですから、どうとは断言できませんが……次期侯爵があの青年をどの程度気に入っているかにかかっているように思えますね」
「そうだね。しかし、彼は先の騒ぎの折、元凶とも言える義弟を救うために動いた。客観的に見て、問題の分家ともども処分したほうが後々楽だとわかっていたはずなのにね。かなり執着しているのは間違いない。補佐となる有能な人材だからの一言では片付けられない程度にはね」
「それでは——」
ライエンが考えこむように顎に手を当てた。
「大切な家族であれば、複雑かもしれませんが最終的には協力してくれるかもしれません……ですがもしも互いの中に聖域を見いだしているようであれば……」

その瞳に暗い色が宿る。

同意するように、ネイスリーズが息をついた。

「まさしく、わたしもそれを心配しているんだよ。周囲の思惑に踊らされることなく互いを信頼しあっていればこそ……その信頼が篤ければ篤いほど、その心中をはかるのは難しい」

「ええ。特に彼はマルシアス家の次期当主だ。当主にしか伝えられていない情報も握っているでしょう……もしも、前回の柱神交代時期にあったことを調べる気になったらと思うと、到底あの娘のように期待する気にはなれませんね」

ライエンの言葉に、美貌を曇らせた柱神が大きくうなずいた。

「そう……だから」

小鳥姫には気をつけておいてあげてくれ――。

続けられたそれに、黒髪の青年は心外そうに眉尻を上げた。

「言われずとも……」

そう言いかけたところで、彼ははっと息を呑んだ――まるで、まずいことを口走ってしまったとでも言いたげに。

そうして、誤魔化すように小さな咳をひとつ洩らした後、彼は「わかりました」と答えたのである。

7

翌日――黒鷲城の裏手の木立をナルレイシアは歩いていた。
ウォルセンが体調を崩したということで、本日の訪問は遠慮してほしい旨がアシュアイードを通じて伝えられたため、突然時間が空いてしまったのだ。
（昨日は元気そうだったのに、夜の内に体調を崩した……ってことは、ないだろうなぁ……）
原因は、アシュアイードに目撃されたアレだろう……。
やはり心証を悪くしてしまったのだろうか――だとしたら、これからどうやってウォルセンを説得すればいいのか……考えなければならないことは山積みで、正直頭が痛かった。
しかし、そんな彼女の気分は、家人からそっと手紙を渡されたことで一気に浮上した。
差出人の名はなかったが、内容を読めばそれが誰からのものかは明らかだったのだ。
最初に感じたのは安堵だ。
（良かった……。あんな場面を見られちゃって、どうしようかと思ったけど……ウォルセンさんがきっと説明してくれたのね）

しかし、あの頑固なウォルセンによる説明だと考えると、少々不安にもなった。
（なんて説明してくれたんだろ……）
エアランの街での出会いから、半日強の手を取り合っての逃避行……そうして再会してからの連日の口説き攻撃……。
思い返すまでもなく、ウォルセンにとって好印象を覚えるものではなかったように思う。
しかし、アシュアイードがこうして手紙をくれたということは、どんな説明であったとしても彼がウォルセンの未来のために、自分と話し合う必要があると判断したということで。
（うん、まあ、これはこれで良しとしよう。ウォルセンさんにはまだ神殿関係者の危険性についてまでは説明できてないんだけど……却ってアシュアイードさんのほうが話を聞いてくれるかもしれない）
現に、彼から詳しい事情を訊きたいという手紙が届いたわけなのだから。
問題は、そこに『内密に』という条件がつけられていることだ。
そこで少し考えこんでしまったナルレイシアである。
内密にということは、恐らくふたりきりで会って話すということだ——考えるまでもなく、その内容は秘匿性の高いものとなるだろう。
この時ナルレイシアの脳裏に浮かんだのは、昨夜のネイスリーズの言葉だった。
『もう少し時間をおいたほうがいいかもしれないね』

実はその時にはすでに協力を仰ぐための手紙をアシュアイードに送ってしまっていたのだが……なんだか不思議な柱神の雰囲気に、そのことを言えないままに向けられてしまった言葉。

だからこそ、胸に引っかかってしまうのだろうけれど。

（えーと、でもあれは、お家騒動の後片付けとか何とか、今はあれこれ忙しい時期だからすぐに冷静に対処できないかもしれないから、時間を置いたほうが良いって……そういう意味合いだったのよね？）

だが、アシュアイードはネイスリーズが心配するよりはずっと冷静で、すぐに返事をくれたのだ。

ならば断る理由はない。

少なくともナルレイシアはそう判断した。

そうして、ウォルセンを訪ねる予定が消えた今、こうして手紙に記された場所へと急いでいるというわけだ。

が。

（なんだろ、胸がざわざわする……）

こんな感じは初めてのことだ。

よくわからないけれど、あるべきものがない不安定な空間に放り出されたような、妙に頼りない気分だった。

精霊の気配を感じ取れない——と思っている——彼女には、その落ち着かなさが普通あるべき精霊の存在が閉め出された空間が作り出されていることがわからなかった。

気が急いていたのもあり、その感覚をナルレイシアは見過ごした。

約束の刻限は迫っている。

(急がなくちゃ)

脳裏に響く警鐘を無理矢理無視して彼女は目的地へと向かう。

指定されたのは、裏庭にある四阿だ——ひとりで抜け出すのに手間取ったために、すでに時間はぎりぎりである。

だから、当然の選択として手紙に記してあった近道を選んだ。

ウォルセンを……そして、その彼が信頼してやまないアシュアイードを信じるからこその選択だった。

だが、それこそが落とし穴だと……彼女が気づくのはもう少し後のこと。

誰かを大切に思う心は、時に刃と化して変化をもたらそうとする者に襲いかかることがあることを、ナルレイシアはこれまで知らずに来た。

そして——今回初めて知ることとなったのだ……。

（なんか、薄暗い……）

夏の強い日差しさえ届かない深い木立のなかを走る小道は、涼しいというより肌寒さを感じさせる奇妙な冷気に包まれていた。

（なんだか落ち着かない……）

胸がざわざわする。

戻ろうかとは、しかしナルレイシアは思わなかった。

ウォルセンにも内密に尋ねたいことがあると言ってきたアシュアイードとの約束の刻限は迫っている。どうあっても彼を味方に引き入れたい彼女としては、遅刻などしてその心証をさらに悪くすることだけはなんとしても避けたかった。

（約束の四阿まではこの小道を突っ切たらすぐなんだし……少しぐらい変な感じがしてもここは我慢すべきでしょう！）

無理矢理自分にそう言い聞かせ、彼女はせっせと目的地へと急いだ。

王都に出てくるまで、故郷のフィレアで思う存分自然と戯れていた彼女にとってこの程度の木立は臆するほどのものではない。鬱蒼と茂った雑木や大木のせいで雑草すら生えていない自宅の裏山で隠花植物を嬉々として採取していた彼女にとって、この程度の木立は物の数ではない。

暗くて怖い、とか静かすぎて怖いという感覚は彼女のなかには存在しないのだ。
しかし、木立に入って以来どうにも落ち着かないのも事実で……内心首を傾げたナルレイシアは、すぐにその理由に気づいた。
静かすぎるのだ——小鳥の声ひとつ聞こえない。
そうして悟る。
(周囲を包む……これは、殺気!?)
どくん、と脈が跳ね上がった。
殺意を抱く何者かがこの木立に潜んでいる——それの意味するところは?
(まさか、お家騒動で負けたほうの残党が……!? だったらまずいじゃない! この先にはアシュアイードさんが待ってるのに!)
ウォルセンを担ぎ上げようとしていた者たちはあらかた縛に就いたはずだが、逃げ延びた者がいないとも限らない。
もしもその人物がアシュアイードを狙ってこちらから潜入を果たしたのだとしたら——まずい、本当にまずい。
(もしかしたら、もうわたしのことは気づかれちゃってる? だったら引き返すのは不自然かしら……でも、アシュアイードさんが危ないってことを、城のひとたちに伝えないと……ええい、落ち着けわたし! こんなことは初めてじゃないんだから!)

立ち止まったまま、ナルレイシアは必死に自分に言い聞かせる。
ここ一年ばかりですっかりお馴染みになった呪文「わたしは女優」を。
「馬鹿馬鹿、わたしの馬鹿！　あれを忘れちゃお話にならないじゃないのーっっ！　何のためにテーブルに載せたんだか！」
間抜けだぁ、とぼやきながら、彼女はため息まじりにきびすを返――そうとした、まさにその時。
ざわり、と空気が揺らめいた。
四方の木立から、五人の男が現れたのだ――その手に握られた抜き身の剣に、ナルレイシアは自分もまた標的にされてしまったことを悟り、唇を噛みしめた。
自分こそが標的であるという考えは、この時彼女にはなかったのだ……。

（落ち着け、わたし！　伊達に修羅場はくぐってない……はず。ここはまず冷静に状況を分析するのよ。ひのふのみのよの……テキは五人。全員長剣持ってるってことで、木立を有効利用するのがお勧め。道なき道を走り回るのは慣れてるから大丈夫。まずは隙を作るのが肝心ということで――）

死にかけたこと、すでに片手の指の数では足りない経験を持つナルレイシアは、冷静に逃げ出し且つ屋敷にこのことを知らせる段取りを考える。

とはいえ、突然すぎる上に地の利もない以上、それはかなり運に頼らざるを得ないものばかりだったが。

しかし、本人も自覚している通り、伊達に彼女は修羅場慣れしてはいなかった。

普通の年頃の少女であれば、恐怖に喉さえ凍りつくこの場面で、彼女は襲撃者の隙を誘うという目的の下、実に盛大な悲鳴を張りあげたのである。

（お腹に力をこめて――コツは頭に突き抜ける感じで）

すうぅ、と大きく息を吸いながら、彼女は最も響く悲鳴を上げるべく準備した後。

「きゃあぁぁっっっ！」

と、絹を裂くような声を狙い通りに上げたのである……大変な高音で。

びりびりと空気を震わせる高い悲鳴に、男達に一瞬の動揺が走る――それを見逃さず、彼女はだっ、と駆けだした。

決して広くはない男達の隙間を縫って、裾をからげて木立に飛び込んだのだ！

それは、間違ってもドレス着用の淑女に可能な動きではなかった。

思いがけない事態に、男達は呆気にとられたのだろう――「ま、待て！」という怒声が響いたのは、彼女が木立に飛び込んでから少し経ったときのことだった。

勿論待つつもりなどナルレイシアにはない。いくら不意打ちには成功したと言っても、着ているのはドレスで履いているのはそれなりに踵の高い靴なのだ。ここが草原なら靴を脱いでという選択肢もあろうが、枯れ枝や石がごろごろ転がっている場所をさすがに裸足――薄い靴下は履いているが――同然で走り回るのは無謀だ。

となれば、後は男達をかわしながら城に戻るしかない。

（だから……アシュアイードさん！　どうか、それまで見つからないように……無事で！）

祈りながら彼女は走った。

故郷の裏山で培った体力と経験値を遺憾なく発揮しながら、ひたすらに城のある方向を目指す――もっとも、それも長くは続かなかったが。

最初こそナルレイシアの悲鳴に度肝を抜かれた様子を見せた男達だったが、どうやらそうした修羅場には彼女以上に慣れ親しんでいるらしく、すぐに追いついてきたのだ。

しかも木立の中では邪魔にしかならないと、長剣を短剣に持ち替えて、だ。

（うわぁ！　間合い詰められたら万事休すな状況に！　こんなことなら体術だけじゃなくって短剣の扱い、お師匠に習っておくんだったーっ！）

とは思ったが、それはそもそも実現不可能な夢想でしかない。

なにしろ、素手での護身術の伝授にはそれなりに熱心だった故郷の師匠ギスカリールは、剣や短剣に関しては教える気配さえ見せなかったのだ。

その理由は至極簡単。

『応戦するつもりなのにどうしてか自分を斬りつけたり、威嚇のつもりなのにうっかり相手を死に至らしめたりしそうだから』

という言葉に、ナルレイシアとしては全否定したいところであったが、持って生まれた強・凶・悪運の強さを思えばとてもできるものではなかった。

特にその理由の後半部分はどうにも自分には受け入れられそうにないことであったので、彼女はその時、それ以上食い下がることを諦めたのだ……が。

（わぁぁん！　師匠の馬鹿馬鹿馬鹿っ！　うっかり相手を殺しちゃうのは勘弁だけどっ！　ちょっとばかし自傷する程度のことなら殺されちゃうより断然ましだからってことで教えておいてほしかったーっっ！）

どうしようもない状況に陥った時、人間は過去に思いを馳せ、そこに仮定を持ち込みがちである——つまり『あの時こうしていたら』もしくは『あの時こうしてくれていたら』……しかしそれが現実に慰めをもたらしてくれることはない。

まさに今のナルレイシアがそうだった。

じりじりと追っ手たちが迫ってくる。

しかもどうやら襲撃に慣れている手合いばかりらしく、ひゅんひゅんと宙を切って投げつけられてくるのは短剣より小振りの隠剣だ。

頬と腕にちりりと痛みとも熱ともつかぬ感覚を覚えたのは、その刃が皮膚を傷つけたからである。

憎らしいことにその腕は確かだ。

（どうしてっっ！　こういう時に限って手練れが揃ってるのかなーっ!?）

自棄のようにそう思い至った時、ひとつの可能性が突然脳裏に閃いた。

この襲撃者達は、あまりにも手慣れすぎている。

敗北が決定した貴族の残党に、はたしてこれだけの腕前の刺客を揃えることが可能だろうか……？

もしも、この男達がアシュアイードではなく、最初から自分を狙って配置されたという可能性はないだろうか、と。

そして、気性はどうあれ、ナルレイシアは与えられた情報を的確に分析する能力は有していたのだ――主観的判断が勝るせいで、気づくのが遅れるというかなり致命的な欠点が付随しているとはいえ、だ。

そうして、この状況下において、なによりその確率が高いことを認識した。

どう考えても、アタラクシア家とやらの残党による襲撃より、しっくりくるのだ――自分をこそ始末すべく男達が配置されていたというほうが。

ただひとつだけ、わからないのはその『理由』だけ。

けれど――。

（もし、この想像が当たってるなら……とにかく逃げるが勝ちだわ！　理由なんて……そんなものは後でいくらでも調べるなりなんなりできるんだから！）

生まれてからまだ十七年と少し。

その長いとは言えない人生において片手の指に余るほど死線を彷徨った経験を持つ、実に稀有な少女の命を紡いでいるのは、実のところはその貪欲なまでの生への執着かもしれない。

何度となく彼岸に流れ着く川に身を浸しながら、常にそこからはじき出され続けてきた少女は、その思い故に死をはねつけてきたのかもしれない。

しかし――だ。

何度目かわからない隠剣による襲撃が、その左肩をかすめた瞬間。

（あ、まず……っ！）

と思うと同時に、体のバランスが崩れた。

ぐらりと倒れる――その先は。

（げ）

足下に丈の高い草が生えていたせいで気づくのが遅れたが……衝撃のあまりよろめいた足下から、突然地面が消えたのだ。

（げげげ、うそっっ！）

胸中で叫んだときには、すでにその体は宙に舞っていた。
（こんなところに崖があるだなんて嘘でしょーっっ!?）
思いとは別に生理的な悲鳴が喉を突いて出た。
「っっぎゃぁぁぁぁっっっ！」
魂が消えるかのような絶叫だった――。

8

完全には満足できない配下からの報告を受けた時、青年はしかし軽く眉根を寄せただけだった。

「し損じた可能性は……？」

短く問うと、配下は「それはないかと――」と言下に否定した。

「あの崖から落ちては万が一にも助かるはずはありません」

配下の言葉に、青年は問題の崖を脳裏に思い浮かべた。

切り立った断崖――途中に木の一本もなく、地底にまで届くかに見える細くも深い地溝……確かにあそこに落ちたのであれば、生存を期待するほうが間違っている。

間違いなく即死だ。

遺体が見つからないのは、地溝の底まで下りる手立てがないからだ。

わかっている……それでも安心しきれないのは、標的の少女が常識では計れない存在であるためだ。

しかし――恐らくはそれが杞憂にすぎないこともわかっている。
精霊の親愛を一身に受ける柱神の連れであるとはいえ……その身が新たなる御柱を見極める役目を負っているとはいえ……少女を守護する力は、問題の場所では発現しようがないのだから。
あらゆる精霊の出入りを防ぐ結界に包まれたあの空間で――あの断崖から落ちたのであれば、少女が助かる可能性は皆無だ。
だから、心配する必要はない。
そう思うのだが……それでもなにかが引っかかる気がしてならないのは、連れの柱神の一筋縄でいかない人柄が最大の原因かもしれない。
（ヴィル・ダカール……）
すでに燃やしてしまった彼女からの手紙の内容を思い出しながら、青年――アシュアイードはここにはいない少女に語りかける。
（ヴィル・ダカール……貴女が、いけない……）
貴女が、よりにもよってわたしに相談の手紙など送ったのが。
さらに遡れば、貴女が選定者であったことが。
そうしてウォルセンと出会ってしまったことが。
（ディーを柱神に……？　どうしたって、そんなことをわたしが認められるはずがないという

のに）

説得の協力を求めてきた少女の愚かさには憐憫の情すら覚える。

一、二度しか会ったことはなかったが、真っ直ぐな目をした美しい少女だった。迷いのない光をたたえる蜂蜜色の瞳は、確かに創世七神に選ばれるだけの強さと資質をたたえていたと、そう思える。

だが、それはアシュアイードにとっては無意味どころか障害でしかなかったのだ。

だから、抹消すべく手を打った。

我ながら短絡的だとは思ったが、事が事だけに長引かせた挙句、事情が公になるのはどうしても避けたかった。

ディー――ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスが、ディエーン人である選定者によって見いだされた新たな柱神候補であるなど。

どうあっても世間……いや、神殿の一部にすら知られるわけにはいかなかったのだ。

そういう意味で、ウォルセンの選択は正しかったと言える。

ただひたすらに、選定者である少女の言葉を拒絶しつづけ……耳に入れることさえ満足にしないということで、相手を諦めさせようとした。

……アシュアイードにしてみれば、生ぬるい方法ではあったが。

思い出す。

昨日のことだ。

久しぶりに訪れた義弟の部屋で、思いがけない光景を目にした後の……怒りや様々な感情が溢れかえった状況で、ウォルセンにこれまでの経緯を洗いざらい白状させてもなお冷めることのなかった激情を叩きつけた時のことを――。

腹の中に鉛が突然落ちてきたかのような不快感を覚えながら、アシュアイードはウォルセンの話を聞いた。

ナルレイシアとはエアランで偶然出会ったこと、翌日再会した際しきりに話を聞いて欲しいと訴えかけられたこと、イヤな予感に拒絶している内に襲撃を受け、成り行きで行動を共にすることになったこと、彼女をどうにか落ち着ける場所に送り届けた後、さっさと姿を消すつもりだったのが追いかけて来られて驚いたこと……等々。

『ドレスで全力疾走するわ、橋の上からひとのこと道連れにして川に飛び込んでくれるわ、挙句に自分は溺れるわ……ほんっと、破天荒な娘だったけど、別れた後、おれもいろいろあってすっかり忘れていたんだよ』

そう告げるウォルセンの表情に嘘はないように思えた。

だが、腹に落ちた鉛のようなしこりは消えない。

『……では、ネイスリーズさまについて黒鷲城に彼女が来るまで、彼女が何者であるかは君も知らなかった、と……？』

尋ねた自分にウォルセンは困惑も露な顔で問い返してきた。

『さっきから、何度もそう言ってるだろう？　アッシュ、なにが言いたいんだ？』

なにを――そんなことは決まっている。

『ネイスリーズさまの一行が連日君の部屋を訪ねたね？　その間、悪いとは思ったけれど覗き穴にひとを配置した……彼らからの報告では、選定者の「せ」の字も、神宝の「し」の字も上がっては来なかった……ああ、説明は必要ないよ。どうせ御柱たる方のお力なんだろう、実際の光景や会話が外に洩れないようにすることぐらい容易いことだろうからね』

そう、世界を支える柱神にとってはそれぐらいは容易にできることだろう。

新たな柱神の選定には常に危険が付きまとう――少女の身を案じてかの青年の姿をした現人神が力を割いたとしても不思議はない。

だが、問題はそんなことではないのだ。

アシュアイードにとって看過できない問題は――。

『……わかっているだろうに、君はそのことを僕に言わなかった……』

ウォルセンがはっと息を呑むのがわかった。

『……なぜ……？』

真っ直ぐにその緑がかった榛の瞳を覗きこんで尋ねれば、らしくもない歯切れの悪い言葉が返ってきた。

『そんなの……知らせるまでもないことだと思ったんだよ』

『君が、新たに見いだされた緑の神宝に選ばれたことが？　それが、僕が知る必要のないことだと思った、と……？』

そんなはずはないだろうと言外に告げる。

自分の補佐とするために、父エルセイドは惜しみなくウォルセンに知識を与えた。

そしてそれをさらに有効に活用できるように磨いたのは彼自身と自分だ。マルシアス家というひとつの大きな船を守るため、さまざまなことを蓄えてきた。

その彼が、この事態を「知らせる必要のないこと」だと判断する……？

あり得ないことだ。

それ以上の言い逃れを許さないとばかりに間近に瞳を覗きこめば、自分の前では腹芸ができない素直な親友は、落ち着かない様子で視線を彷徨わせた。

『……言う、必要なんか、ないだろ……？　だって、おれは絶対に受けるつもりなんかない話なんだし……』

嘘だ――それは直感だった。

『そう言っているのは君だけだ。あちらはここまで……他国の御柱まで巻き込んで乗り込んで来たんだ。退くつもりはないだろう。幸い、君の説得が第一だと思ってか、周囲に吹聴するような真似は慎んでくれているようだけれど……わかっているかい、ディー？　彼女は……世界を支える柱神を見極めるという役目を背負う彼女は、いつそうしてもおかしくない立場と理由を持っているんだよ？』

さっ、とウォルセンの顔色が変わった。

『そんなことはさせない！』

断固たる決意を窺わせる表情でそう言い切る彼に、苛立ちが募る。

確固たる意志を見せながら、自分にその奥にある理由を見せようとしない――それは一体何故なのかと。

『ディー』

静かな声で、再度その名を呼ぶ。

その声音に宿る響きの某かが彼の動揺を誘うことを重々承知の上で。

知りたい真実を得るためには、自分は手段を選ばない――離れていた二年ほどの間に忘れてしまったというのなら、今こそ思い出してもらおう……そんなつもりで。

『もう一度、訊くよ？　なぜ、おれに打ち明けなかった？』

目を逸らそうとするウォルセンの顔を両手で包みこむようにして、逃れようのない状態に追

い詰めて、その目を再び覗きこむ。
ウォルセンの榛の瞳に動揺が走る。
知られたくないことを必死に隠そうとしているのだ。
だが、ここで逃すわけにはいかない――これだけは。
止めとばかりに、アシュアイードは再び口を開いた。
『ディー、答えて。……どうして？』
『そんなの――』
悔しげに唇を噛みしめた後、ウォルセンが呻くように答えた。
『そんなこと、今の状況でアッシュに言えるはずがないだろ!?』
そうして、彼が吐露した心情は、半ば以上予想していた通りではあったが、自分にとってはありがたくない気遣いに満ちたものだった。
『代々のマルシアス家の当主がどれだけディエーン王家との関係に気を遣ってきたか、本家に引き取られてからイヤっていうほど知ったんだ。目の上のたんこぶ扱いされて、それでも王家が本格的にマルシアス家を排除しにかからなかったのは、代々当主が細心の注意を払って行動していたからだ！　このディエーンで大きすぎる影響力を抱えてしまった一族は、大抵が何かと理由をつけられて力を削られるか潰されるかする……エルセイドさまも、それを慮って王都に出ようとはなさらなかった……そんな問題視されてる一族に、よりにもよって新たな柱神

候補が現れただなんて……あってはならないことじゃないか！』

ウォルセンの言い分はもっともだった。

しかし、それは自分が問うた内容への答えではない。

『……そうだね。でも、おれにだけは打ち明けてほしかったよ？』

冗談めかしてそのことに水を向けると、義弟は『だって』とまた口ごもった。

『だって――？』

にこやかに、しかし逃げるのは許さないとばかりに促せば、相手は拗ねたようにそっぽを向いた。

『ディー？』

辛抱強く声をかけると、大切な親友は不承不承に答えるのだ――そう、彼がこれまで自分の追及から逃れ得たことはない。

『だって、アッシュは……この前の騒ぎの後始末でただでさえ大変じゃないか。無理でも何でもしなくちゃいけないことだからって、体調悪くてもやってるだろ。今だって、平気そうに見せてるけど微熱があるだろ？』

言い当てられて、正直驚いた。

周囲の誰も気づいて――否、気づかせないように振る舞っていたつもりだったからだ。

しかし、二年以上離れていたにも拘わらず、的確に自分の体調まで見抜いてくれる親友の気

違いは配りどころを間違えているとしか思えない。
ディエーン王家に目をつけられているマルシアス家を、現在実質的に支配している自分の体調を気遣って事の次第を黙っていたというのなら、それは大きな間違いだ。
突然訪れた他国の柱神という扱いの難しい客に頭を悩ませた挙句、その狙いの在処を探るべく手がかりのひとつもあればと義弟の部屋を訪れた際、耳目に飛び込んできたあの衝撃的な台詞のやりとりと光景――。
あんなものを見せられ、聞かされるぐらいなら、とっとと事情を打ち明けておいてほしかったというのは贅沢な望みだろうか。
だが……いかにもウォルセンらしい理由ではあったので、アシュアイードは思わず肩を落とした。
『ディー、あのね……』
それを遮ったのは、ウォルセンの必死な声だった。
『だって、おれはそんなものになるつもりなんかないんだ……許されるなら、アッシュのそばで、アッシュを補佐して……ずっと、ずっとそばで……それがかなわないのなら、せめてアッシュの邪魔にだけはならないように静かに……生きていきたいだけなんだから』
それは――本人にはそんなつもりは皆無であろうが――熱烈な告白に聞こえた。
同時にそれこそが自分の望むことである。

だから――。

『最後の案を除けば、おれも同じ思いだよ』

答えながら、ここ二年ほどで実際の政治に関わるようになった自分と、あくまで真似事の範疇でしかそれを知らない相手との距離にこっそりほくそ笑んだ。

ウォルセンにはきっと、わからないだろう。

自分が同じ思いだと伝える言葉になにを託すのか――その果てにどんな結果が待っているのか……。

(そう言えば、君は障害を前にして、まず説得することを選んでいたね……)

そうして和解の道をできる限り模索しようとした。

対して自分の選ぶ方策は――。

(君は仕方ないとわかりながらも苦い顔を隠せなかった……)

なぜなら、自分が選ぶのは謀策であったので。

綺麗事ばかりではやっていけないことを知りながら、それでも理想を貫こうとする彼がそばにいてくれたから、真っ先に策謀に飛びつこうとする自分を律することができた。

これからも、彼がそばにいてくれる限り、自分は政治の暗部に関わろうとも溺れることはないと信じられる。

だが、そのために今必要なのは――。

（君が眉を顰めようと……これればかりは譲れない）

ウォルセンを自分から引き離すような真似は誰にもさせない――許さない。

たとえそのために罪なき命を摘み取ることになろうとも――。

アシュアイードはそこでひとつの決意を固めたのである。

黒鷲城の奥まった一郭には、代々当主にしか伝えられない隠し部屋がある。

その部屋へ足を踏み入れたアシュアイードは、手に持っていた記録を無造作に放り出した。

書庫から持ち出したそれには、二世紀ほど前の出来事が記されている。

そう……前回の柱神交代劇に関することが。当時のマルシアス家の第二子が柱神候補に選ばれたために、そこには詳細が記されている。

その第二子は結局暗殺されてしまったが……。

その犯人が誰であったのかは、結局明かされないままだった。アシュアイード自身、そのことに興味を覚えたわけではない。

彼が関心を抱き、永遠の秘密とすべくこの部屋に書類を持ち込んだのは――当時の選定者に関する記述の内容ゆえだった。

前回の選定者の名はウァランセイド・セルクール・レンス・セディシャ。
小貴族の血を引く老人で、研究以外には興味を抱かない――なかなかの変人だったという。
だからこそ創世七神に、新たな柱神を見極める役目を与えられたのかもしれないが、彼はしかしそれを全うすることができなかった。
恐らくはマルシアス家の第二子の命を奪ったのと同じ者によってその命は刈り取られた。
その犯人についてアシュアイードがなにかを感じることはない。
重要なのは、ウァランセイド・セディシャの死とほぼ時を同じくして、厳重に保管されていたはずの神宝が忽然とその姿を消したということだ。
当時の侯爵は、自らの息子の命を奪った原因を究明すべく、柱神選定における情報をあらゆる手段を用いて集めたと見え、その記載内容は今では王都にすら残されていないものまで網羅されていた。
その執念に、アシュアイードは感謝を贈りたいと思う。
選定者の死が、神宝に与える影響――それを自分に教えてくれたのだから！
今回の選定者――ナルレイシアが死亡した時点で、見いだされたという神宝『翠唱子』は姿を消したはずだ。
新たな選定者が立たない限り、神宝が再び姿を現すことはないだろう……いや、たとえ早々に次の選定者が現れたとしても――。

「神罰がなんだというんだろうね」
うっすらと笑いながら、アシュアイードは宙に囁く。
「神宝など何度でも遠ざけてみせる」
それは、重すぎる罪を繰り返す覚悟を示す言葉だった。
（選定者など……何人だって葬ってやるさ）
ぞっとするような笑顔で、隠し部屋を後にした。
二度とあの書類を外に出すつもりはなかった――。

9

アゼルフィアがそのことに気づいたのは夕食の席についた時のことだった。
いつもながらため息を禁じ得ない豪華な食器に盛られた料理の数々を前にした彼女は、いつもの癖で「これ全部食べたら確実に体重が危険なことになりますよね」と、その場にいるはずのもうひとりの少女に話しかけようとして——気づいたのだ。
なぜか空席がふたつあったのだ。
そうして、この場に足りない顔がふたつ。
「ネイスリーズさま……あの、ナルレイシアさんとライさんは……？」
ふたりがあまり仲むつまじいとは言えないことをよく知るアゼルフィアとしては、意外なふたりの不在に胸がざわめいた。
（単なる遅刻……ならいいけど。ナルレイシアさん、本を読み出すと時間も忘れて没頭しちゃうから……）
そんな彼女から情け容赦なく本を引っぺがすのは専らライ——ライエンの役目であり、その

こともあってナルレイシアは彼にいい顔をしないのだ。
自業自得だとちょっぴり思っていることは内緒だけれど。
「ああ、小鳥姫が帰って来なくてね……ライには捜しに出てもらったんだ。どうせ、またどこかで脳内楽園に浸っているんだろう。なに、すぐにライが引っ張ってきてくれるよ。さ、フィア、冷めない内にいただこう。一勝負つかないことには戻ってこないだろうからね」
一勝負とは口撃合戦のことだ。
大抵はナルレイシアが言い負かされて終わるのだが、たまにライエンがやりこめられて黙り込むこともある。その勝敗の行方を聞くのをアゼルフィアは実は結構楽しみにしていた。
「はぁ」
頷きながら、彼女は今日の戦績を予想する。
（昨日は珍しくナルレイシアさんの完全勝利だったから、今日はライさんの勝ち、かな？　平気そうな顔してたけど、いつもより少し眉根が寄ってたし……負けっ放しにはしないだろうな……いや、でももしかしたら勢いに乗って奇跡の二連勝とか……？）
普通、他人であっても口論する姿を目にするのは気が滅入ることが多いのだが、あのふたりの間に交わされるものについてだけは別だった。
はっきり言って、面白いのだ。
口論のはずなのに、掛け合いに聞こえる。聞いていると笑いを堪えるのが大変になるほどだ

……それはネイスリーズも同感なのか、ふたりの口論を止めようとはしない。
だから、この時アゼルフィアはさほど心配することなく食事を先に始めたのである。
しかし——夕食も終わろうという頃になって、戻ってきたのはライエンだけだった。
難しい顔をしている黒髪の青年を見るなり、彼女は胸騒ぎを覚えた。そこに、隠しようのない緊張と焦燥が浮かんでいたからだ。
「ナ、ナルレイシアさんは……？」
どうなさったんですか——。
尋ねた彼女に彼は無言でかぶりを振り、ネイスリーズに何事かを囁いた。
途端に柱神の顔にもさっと緊張が走った。
「ネイスリーズさま!?」
名を呼び、どうしたのか尋ねようとするのを制するようにネイスリーズもまたかぶりを振ると席を立ち上がった。
「当主代行殿にご協力願ったほうが良さそうだ……」
低い声でそこまで口にしたところで、アゼルフィアを気遣ってか、ふわりと柔らかい笑みを浮かべた。
「小鳥姫はどうやら迷子になったらしい……だが、まあ、心配することもないだろう。土地勘のない我々では心許ないからこちらの方に捜してもらうことになるが……どこに迷い込んだん

だろうねえ」

呆れたように肩を竦める様子に、しかしアゼルフィアは全然安心できなかった。

なにしろ……ナルレイシアのとんでもない災難吸引率はすでに脳裏に刻み込まれて久しかったのだから！

客分として扱われている城内――敷地含む――での迷子。

確かに普通に考えれば危険に陥る可能性は低い。

しかし、あの金の髪と瞳を持つ少女は、あり得ない事態を招き寄せることに関しては天才的な『強（凶）運』を発揮する人物なのだ！

彼女が引き寄せたトラブルは、つきあいの短いアゼルフィアにとってすら十指に余るほど思い出せる程度にはある。

買い物に街に出たらひったくりに遭遇し、その犯人を追いかけた挙句に捕まえた――などということは序の口。

取り違えられた鞄から毒蛇が出てきたり、新たな柱神候補の説得に出かけたはずが、なぜだか命を狙った襲撃にあい、半日近く追いかけ回されその途中で橋の上から川に飛び込んで、挙句に足の爪を完全に割ったり……一番印象深いのは、ネイスリーズの計らいで雷馬の牽く箱形が来るまで超上空を移動中、さらなる上空から落ちてきた人間を拾ったということだろう。

まるで禁じ手なしのびっくり箱だ。

通常なら「あり得ない」と断言できることが、彼女に関しては言い切れない。

そんな「とんでもびっくり箱」な彼女のことを思うと……とてもネイスリーズのように「心配ない」とは思えないアゼルフィアだった。

「……本当に、大丈夫だと思います……？」

恐る恐る尋ねた彼女に、ネイスリーズは一瞬だけ視線を宙に逸らし……そうして答えた。

「……であることを祈ろう」

それは先行きの不安を煽るものでしかなく、しかもそれは現実となった。

ネイスリーズの要請を受け、アシュアイードが手配した捜索班がその日の内に上げた成果は皆無――。

しかし二日目の夕刻になって、もたらされた品と、それが発見された場所の報告内容に、アゼルフィアは口元を押さえ、悲鳴を堪えるのに必死となった。

捜索班が見つけ、持ち帰ってのは瀟洒な靴の片割れで――それは確かにあの日ナルレイシアが履いていたものだった。

そしてそれが見つかった場所というのが……。

「地溝の……そば？」

そんなものが、なんで城の敷地内にあるんですか!?

食いかかるようにそう尋ねたアゼルフィアに、ネイスリーズが沈痛な面持ちで答えた。

「黒鷲城を建てる前に、地震でできたらしい……当然黒鷲城を建てるに当たってその周辺は避ける予定だったらしいが、異常な磁場が発生したらしく何人もの人死にが出たらしい。それならいっそ、完全な侯爵家の私有地としたほうがひとの出入りを規制できるだけ被害を防げるとの判断で城の敷地に組み入れたということらしい」

らしい、らしい、らしい――伝聞のみの情報は、しかし絶望的な内容で。

その地溝のそばで発見されたというナルレイシアの靴。

それは、彼女が人間が足を踏み入れることもできぬ地溝に落ちた――その事実を窺わせるものであり、それはすなわち彼女の命が潰えたという意味しか示さない。

あくまで、普通であれば。

しかし、アゼルフィアは知っていた。

ナルレイシアという少女の、尋常でないトラブル遭遇率と、あり得ないほどの運の強さを……この三月足らずの間に、それはもうイヤというほどに！

「……遺体は、発見されていないわけ、ですよね……？」

それでも念のためとばかりに尋ねてみれば、ネイスリーズはこくりと頷くばかり。

その灰緑の双眸に、ちらりと笑みが浮かんだと思ったのは気のせいだったのか――。

「そうですか――」

もたらされた情報が、どれほど絶望的なものであろうと、そんなことは問題ではない。

アゼルフィアは知っている——ナルレイシアという選定者である以前にあり得ないほどの強運と凶運を誇る人物のことを。

だったら、心配する必要はないのだ。

本音を言うなら、一刻も早く彼女を見つけたい。

見つけるために捜しに出かけたい。

だが、彼女の無事を信じられるから——。

アゼルフィアは全てをネイスリーズに委ねた。

ここ数日の晴天が嘘のように、厚い雲が空を覆い小雨が降る朝、ネイスリーズたち一行は半月近く滞在した黒鷲城を後にした。

訪れた時四人だった一行から、金髪の少女の姿は消えたまま……片方の靴だけが、アゼルフィアの荷物に大切にしまってある。

(死んでない……ナルレイシアさんが死ぬはずがない……)

信じると決めたものの、こうして彼女を見つけられないままここを立ち去るとなると心が軋んだ。

（なぜ、精霊も立ち入れないような場所に……）

ナルレイシアが何を思ってそんな所に行ったのかはわからない。

ただ、精霊のいる場所でなら、事故に遭ったとしてもネイスリーズがすぐに気づくことができただろうと思うと残念でならないのだ。

（そうすれば、すぐに駆けつけたのに……）

目頭が熱くなるのを必死に我慢して、アゼルフィアは空を見上げた。

空は厚い雲に覆われ、太陽を見ることはできない。

（信じてる……信じてるから……）

誰かの死を、あれほどに厭っていたナルレイシアだからこそ、自らの死もまた厭い避けるに違いないと、確かに信じているけれど。

（ナルレイシアさん……早くひょっこり戻って来てください。わたし、「選定者死亡で神宝を見失いました」なんて、セルフィアのアルタードさまに報告したくありませんから！）

このままでは、早晩その必要が出てくるだろうけれど――。

（どうか……どうか、神さま、どうかナルレイシアさんをお守りください……！）

知らず両手を祈りの形に組んだ彼女を、沈痛な顔をした青年の翡翠の双眸がじっと見ていることに、気づいた者はいたのかどうか――。

降りしきる雨の中、馬車に乗り込んだアゼルフィアの頬には涙があった。

馬車に揺られて小半時――涙をこらえて俯いていたアゼルフィアは、くすくすおかしそうに笑うネイスリーズの声に思わず顔を上げた。

本当に愉快そうに美貌の柱神が笑っているその隣では、ライエン――否、エアランの宿を出立するとほぼ同時にリーインと入れ替わった黒髪紫瞳の青年が咎めるような目をネイスリーズに向けている。

「ネイスリーズさま……!?」

なにがそんなにおかしいのかと、喰ってかかろうとした彼女に、青年神はなおも笑いながら「すまないね」と謝ってきた。

そこに誠意を感じ取れなかったのは、なにもアゼルフィアの心が曇っているからではないだろう。

「いや、今日のこの日に雨が降るだなんて、小鳥姫はとことん運に愛されているなあと……そうは思わないかい、エルスカーネ公爵？」

途端に黒髪の青年が顔を顰めた。

「その顔でそう呼ばれると寒気がするのでやめてください……まあ、本人はそうは思わないで

しょうが、確かに悪運だけは強い娘ですね」
この雨なら、誰もわざわざ空を見上げもしないでしょうし――。
続けられた言葉は、アゼルフィアには理解不能な内容だった。
（小鳥姫ってナルレイシアさんのことよね……？　雨が降って幸運……？　もしかしたら怪我してるかもしれないのに……？　それに、空……？）
なにがなんだかわからない。
その思いが顔に出たのだろう、ネイスリーズが苦笑混じりに再度謝った。
「すまなかったね、フィア。君が心を痛めていたのはわかっていたのだけれど、あちらに早々に気取られるわけにはいかなかったから、君には隠していたんだ……小鳥姫なら無事でぴんぴんしているよ」
告げられた内容が、すぐには理解できない。
「は？　でも……靴が……じゃなくて！　無事ならどうしてお城に戻って来なかったんですか？　どんなに心配したと思って……て、あちらって……？」
訊きたいことがありすぎて、うまく言葉にならない。
そんな彼女に、ネイスリーズが可愛く包装された飴玉を差し出した。
「ありがとうございます……だから、そうじゃなくて！」
「落ち着いて、フィア。きちんと説明してあげるから……それを口に入れてしまいなさい。頭

が働かない時は甘い物を摂るに限るからね」

まあ、少し長い話になるし――。

続けられた言葉に、アゼルフィアはようやく頷いた。

そうして――。

ネイスリーズによって語られた内容のあまりのとんでもなさに、アゼルフィアは開いた口が塞がらない思いを味わわされたのである。

全てを聞き終えた時、彼女はがっくりと肩を落とした。

「……つまり、ナルレイシアさんを襲った誰かがどこで見ているかわからないから、わたしには事情を伏せたまま、おふたりはしっかり演技なさってたというわけですね？」

（あの心配そうな顔や焦燥も露な声が全部、全部演技だっただなんてーっっ！）

偉いひとたちのことを信じられなくなりそうだった。

それでも、これだけは訊いておかなければと口を開いた。

「それで、今ナルレイシアさんは……？」

答えは簡潔明瞭で――やはり内容はとんでもなかった。

「んー、今頃は空の上だと思うけど……雲のおかげで飛んでいる姿を見とがめられる可能性はほとんどないから心配いらないよ」

雲の上なら晴天だしねぇ。

暢気な声で答えたネイスリーズに続けるように、ガスカールがぼそりと付け加えた。
「高所恐怖症の上、大の雷嫌いのあの娘にとっては地獄でしょうけどね」
……遠くで雷鳴が響いている。
「雲の中で当たらないといいけどねー」
どこまでも楽しげに応じるネイスリーズを見ながら、アゼルフィアはこっそり（この方はもしかしたら鬼かもしれない）と考えた。

10

「ようやく帰られたよ」

日の光が溢れるテラスを前にして、アシュアイードはウォルセンに声をかけた。

ウォルセンの緑がかった榛色の双眸に、悲しげな光が走るのに気づかぬはずもあるまいに、翡翠の瞳の青年は柔らかく微笑むのだ。

「アッシュ……」

「悪かったね、ディー、こんな密閉されたような部屋に隔離するような真似をして……もう二、三日……そうだね、例のご一行が領内を出られたら、出してあげるからもう少し我慢してくれるかな?」

問いかける口調ではあるが、それは事実上の宣言である。

ウォルセンが何を訴えようと、アシュアイードは決してそれ以前に彼をこの部屋から解放することはないだろう。

確信できるだけに、ウォルセンの胸は悲しみに塞がれる。

「アッシュ……なんで……」

今更無意味な問いだとわかっていても、彼は尋ねずにはいられない。

薬物を盛ってまで、突然自分を精霊たちを閉め出した結界に包まれたこの部屋に閉じ込めた彼の真意は聞いてはいるが、それでも納得できないままなのだから。

「狸なお方という印象の割に、あっさり退かれて正直肩すかしを食った気分だけれど……まあ、常に精霊を頼りにしていたら、却ってその力が及ばないことには無力なのかもしれないね。ヴィル・ダカールのことも、どうやら仕方ないと諦めてくださったようだから、わたしとしてはありがたいけれど……」

アシュアイードが口にした「ヴィル・ダカール」の一言に、ウォルセンの肩が覚えず震えた……。

それは義兄が犯した重すぎる罪の被害者の名だ。

ナルレイシア・フォイリリル・ダカール――傍迷惑な疫病神と思っていた少女の命は、目の前の青年によって摘み取られた。

理由はただひとつ。

彼女が選定者であり、神宝『翠唱子』の半身として、ウォルセンを『見極め』たからだ。

そのことをアシュアイード自身からなんでもない口調で知らされた時の衝撃は到底忘れられるものではない。

それは、彼女が行方知れずになった日から二日も経った頃。

気怠さのなかで目覚めたウォルセンは、そこが最後に就寝した部屋でないことにすぐには気づけなかった。

室内の調度のすべてが同じだったこともあるが、頭がひどく重かったせいだ。

体にもうまく力が入らない——どうしたことかといつものように風霊に尋ねようとして、異常に気づいた。

なぜなら室内には一切精霊の気配がなかったからだ。

それだけではない。呼んでも応える気配がない。明らかに精霊と自分との接触を阻む仕掛けが施されていた。

その仕掛けには覚えがある。

一カ月も前ではない——アタラクシア家の別宅に監禁されていた時期、最後のあたりで否応なく押しつけられた環境だった。

結界による精霊排除空間——。

アタラクシア家にできたことが本家であるマルシアス家に不可能なはずはない。より完璧な術力を誇る結界術師を雇い入れたとしてもなんら不思議はない。

しかし、ここで看過できない疑問が生まれた。

いったい誰が、何のために、自分を精霊から切り離そうとするのか——。

思い当たる人物が限られているだけに――それはあり得ないと叫ぶ心ゆえに、ウォルセンは混乱した。

しかし、夜になって訪れた青年の姿を目にした瞬間、自らの懸念が現実であったことを悟らざるを得なかった。

『ごめんね、ディー』

優しい声で謝るアシュアイードに、しかし本当に詫びる気持ちはないことが瞬時に見て取れてウォルセンはますます混乱した。

精霊を遮断した空間、鍵の掛けられた扉、テラスへ出ることはできるが、その先へは上にも下にも横にも移動できぬよう張り巡らされた不可視の結界……。

なぜ、アシュアイードが自分にこのような真似をするのかわからなくて、言葉を整理することさえできないままに問いかければ。

返ってきたのは微笑みさえ浮かべた親友の思いがけない言葉、だった。

『ご一行には君は体調不良で寝込んでいると伝えているけれど、なにしろ精霊を使える御方がいらっしゃるからね、万が一、協力でも求められたらまずいと思って』

的を射ないアシュアイードの言葉に、（らしくない）との思いを隠せず眉宇をひそめたウォルセンは、直後に衝撃的な解答を与えられた。

『ヴィル・ダカールがね、なぜだか黒鷲城の裏の森に迷い込まれたようでね……行方が、知れ

ないんだよ』

黒鷲城の裏の森――そこは精霊の出入りを阻む結界が敷かれている。

そうして、そのほぼ中心には、大地を分断する深い地溝が走っているはずで――。

そんな危険な場所に、なぜあの少女が迷い込んだのか。なぜ、自分が二日以上も薬物で眠らされたのか。そして目覚めた場所が、なぜよりにもよって精霊の立ち入れぬ結界が張り巡らされた部屋であったのか。

全ての謎の答えは、ただひとつしか示してはいなくて。

ウォルセンはさっと顔色を失った。

『アッシュ……アッシュ！　どうして……!?』

どうして、そんなことを――!?

声にならなかった問いかけを、アシュアイードは確実に理解していたに違いない。

返されたのは、声ではない彼の温もり。

まるで壊れ物に触るかのような優しい仕種で頬を撫でられた。

『……わからない？』

するりと触れた指は冷ややかで、しかし親友の双眸に宿る光の熱が伝わってくるような気がした。

『……本当に、わからない？』

再度尋ねた後、アシュアイードはくつりと喉を鳴らした。

『……だよ』

耳元で囁かれた答えを思い出すことはできない。

けれど、そこに籠もる狂おしいばかりの思いに、背筋に冷たいものを覚えた。

そうして――それから五日が経った今日、ネイスリーズ達は黒鷲城を去ったのだと嬉しそうに語るアシュアイードの瞳に翳りはない。

彼は自らの行動にかけらの後悔も覚えてはいないのだ。

「……アッシュ……」

苦いものを孕んだ声で名を呼ぶと、翡翠の双眸を微かに細めた親友はにこりと微笑んだ。

「大丈夫だよ、ディー。神罰を受けるのはおれひとりだ……君は何も心配する必要なんてないんだ。ずっとそばにいてくれたら、それだけでいいんだ」

心底そう思っているのが明らかな声に、ウォルセンは激しい衝撃を受けた。

（アッシュ……！）

壊れてしまった――否、自分が壊したのだ、と思った……。

「うー、ううーっっ！」

雷馬のたてがみにしがみついた格好で、ナルレイシアは声にならない声を上げていた――なぜならその口には猿ぐつわを噛まされているからである。

「おい」

そんな彼女に声をかけるのは、黒髪黒瞳の青年である。

……因みに、猿ぐつわは彼の仕業である。

「うーうーうーっっ！」

しかしナルレイシアはその声が聞こえないのか、「うーうー」唸るばかりである。

がたがた震える彼女の瞼は固く閉ざされている。

「おいって！　選の巫女！」

「うー、ううぅーっっ！」

「おい、聞けってば！　とっくに地上に下りたのに、いつまで閃公にしがみついてるつもりなんだ!?」

先に下りたリーインが、正気づかせるために少女の腕をぽん、と叩くと、びくりと震えて一際大きな唸り声を上げた。

……察するまでもない、大絶叫だ。

と、恐怖のあまりか、その金の長い睫に縁取られた瞼が開かれ、蜂蜜色の大きな瞳が現実を

捉えた……らしい。

「うー、う？」

アレ？　とでも言いたげな顔になると、少女はきょろきょろと周囲を見回した。

そうしてリーインが大地に立って自分を見上げていることに気づくなり、あからさまにほっとした様子で肩の力を抜いた。

「わかったか、ここはもう地上。そろそろ閃公から降りような？」

念を押すようにリーインが告げると、ナルレイシアはこくりと頷いた後、両手をたてがみから放した。

「よーし、手を貸すからさっさと下り……って！　まずは下りるのが先だろうが！　なに猿ぐつわ外そうと……やめ……って言ってる先から！　この馬鹿娘！」

リーインが慌てて止めようとするも時すでに遅し――不安定な雷馬上であることを失念したらしい少女は、自分の口に嚙まされた猿ぐつわをまず外そうとし……当然の結果として体勢を崩した。

ぐらりと揺れた少女の体が、濡れた地面に転がり落ちずに済んだのは、リーインの腕が彼女を支えたから――ではなく、彼の体が下敷きになったせいだった。

ベシャリ、と音を立てて水たまりに顔から倒れ込んだリーインの背中に、少女がどすんと落ちてきた時、彼は金輪際彼女に対して仏心など抱くまいと決意した。

恐怖の超上空長距離移動を余儀なくされたナルレイシアの記憶は曖昧だった。
必死に閃公のたてがみにしがみつき、固く目を閉じてただただ地獄の時間が終わるのを待っていた。
しかも途中からはさらなる恐怖の音――雷鳴である――が耳を打ったこともあり、半ば気を失いかけながらも器用に――とはリーインの言葉だ――悲鳴を上げ続けて今に至る。
突然腕を叩かれ、びくりと震えた時思わず目を開けなければ、あるいは永遠に悲鳴を上げ続けていたのではないのかと思う。
耳覚えのある声のしたほうに顔を向ければ、リーインが地上にしっかりと足をつけて立っていた……それを見た瞬間、彼女が思ったことは。
(じ、地獄が終わった……)
というもので、体中から力が抜けた。
雷馬から降りるのに手を貸してくれるつもりなのだろうリーインに礼の言葉をかけようとして、彼女は初めて猿ぐつわの存在に気がついた。
(え、と……これ、猿ぐつわ……? なんで? わたし、噛んだ覚えないんだけど……)

恐怖の空中飛行中のことはほとんど覚えていないが、恐怖に凍りついていた自分が率先して猿ぐつわを噛むとは思えなかったので、犯人は同乗していたリーインだろう。

（仮にも乙女に……しかも暴れてもいないのに猿ぐつわ噛ませるかな!?）

……普通、滅多な状況では老若男女を問わず猿ぐつわを噛ませられることはないのだが、そのあたりの常識は彼女にはない。

幼少時の誘拐騒ぎに加え、運悪く事件に巻き込まれたことも一度や二度ではきかない彼女はすでに片手の指では足りない回数、猿ぐつわを経験していた。

だから、いつもであれば彼女としても下馬を優先するところだったのだが……礼なり文句なりをリーインに言わずにはおけないという思いが勝ってしまい、我ながら迂闊としか言えない行動に走ってしまった。

鞍も手綱もない雷馬の背の上で、両手を上げてしまうなど、不慣れな人間が決してしてはならないことをやったのだ。

結果は当然バランスを崩し、あえなく地面とこんにちは……のはず、だったのだが。

（……あれ、痛くない……）

お尻から落ちたはずなのに、何か柔らかいもののおかげで予想した痛みは襲って来なかった。

……のは、いいのだけれど。

問題は、ナニを下敷きにしたのかということで……恐る恐る目線を下げてみると、水たまり

に黒い頭が。

（げ）

声に出なかったのは、まだ猿ぐつわが外れていないからだ。

ナルレイシアは慌てて立ち上がると、大急ぎで猿ぐつわを外し、地面に倒れ込んだ青年に声をかけた。

「リ、リーイン……さん……？」

いつもはしないさん付けで呼んだのは、やはりそれなりに罪悪感を覚えるからだ。

しかし、そんな殊勝な思いは、次のリーインの台詞で吹き飛んだ。

むくりと起き上がった青年は、泥水を拭いながら一言告げた。

「疫病神」

ぷつん、とナルレイシアの中のなにかが切れた。

「なんですって!?」

「馬上で猿ぐつわ外そうとするか、普通！　馬鹿だろ、あんた絶対に大馬鹿だろう！」

「なによ！　あなたにお礼を言おうとしたら猿ぐつわのせいで声が出ないのに気づいたから思わず手が伸びただけじゃない！　第一、どうしてわたしが猿ぐつわ噛まされてたのよ!?　一体なんのつもりなわけ!?」

気づいたら猿ぐつわ――という事態には、当然のことながら良い思い出がない彼女としては

是非訊いておきたいところだった。

しかし、彼女の威勢もそこまでだった……ぐうの音も出ない完璧な理由が、リーインの口から放たれたのだ。

「あんたが！　いくら宥めても悲鳴を止めなかったからだろうが！　恐慌状態に陥った挙句大絶叫繰り返しやがって……あのままじゃ、あんたの悲鳴で人が集まるのは目に見えてたんだ！　黙ってくれないなら、猿ぐつわしかないだろうが！　もっといい案があるなら言ってみろ！」

それとも見つかっても良かったっていうのか!?

噛みついたら噛みつき返された――まさにそう表現するしかない状況だった。

しかも、圧倒的に自分に不利だ。

ナルレイシアは「あー、うー」と意味をなさない声を洩らした後、ここは潔く降伏することにした。

これからウォルセンに会いにいくのに、リーインの協力は不可欠なのだ。機嫌を損ねて閃公にひとりで乗れなどと言われては堪らない。

「ありません。すみません。わたしが悪うございました……ごめんなさい」

そう言って、ぺこりと頭を下げると、黒髪の結界術師がふん、と鼻を鳴らすのが聞こえた。

次いで、実に偉そうな声で「わかればいいんだよ」と言われた時には少々……いや、かなりむっとしたが、ここは我慢と忍の一字で頑張った。

しかし、顔を上げた瞬間目に入ってきた光景を前に、彼女の『忍』は逃げ出した。
仏頂面のなかなかの二枚目の青年の、無残に濡れた前髪から、ぽとりぽとりと泥水がしたたり落ちるさまは……本人には悪いが、非常に……ある種の衝撃を誘うものだったのだ。
ぶ、と思わず噴き出した彼女に、リーインの怒声が飛んだ。
「誰のせいだと思ってるんだ、馬鹿娘ーっっ！」
アシャスの外れ——小高い丘の木立の中でのことだった……。

「きゃあああぁぁぁっ！」

想像もしなかった崖の存在に、落下する自分の状況を把握するより先に、喉を衝いて出た悲鳴は生理的なものだった――しかし本人の自覚とは別に、第三者が耳にしたのは「っっぎゃぁぁぁぁっっっ！」という絶叫だったのだが。

落ちる先には底さえ見えない暗い暗い……黄泉への扉にさえ思える暗黒。

この時ナルレイシアははっきりと死を確信した。

なぜなら、落ちていく間に、脳裏にこれまでの長くはない人生のあれこれが、走馬燈のように再生されたからである。

人は最期の瞬間、それまでの人生が走馬燈のように――とは、古くから言われていることであったが、ナルレイシアは実にこの瞬間まで、それを信じてはいなかった。

なぜなら、これまで何度も何度も何度も何度も死線を彷徨い、黄泉の川流れさえ経験したというのに、そうした映像が脳内再生された記憶がないからだ。

11

しかし今、はっきりくっきりと甦るあれやこれやは……。

（ええええっっ!?　これが噂の走馬燈っ!?　なに、わたし本格的にまずいってことっ!?）

底の見えない崖から落ちたのだ――絶望的なことは考えるまでもないのだが、幸か不幸か、これまで助かるはずのない事故や事件から奇跡的に生還し続けてきた彼女には、それは必ずしも絶望的な状況だとは思われず、だからこそ『走馬燈現象』に衝撃を受けたのだ。

（死ぬ？　わたし、死んじゃう!?　このまま選定者としての役目も果たせないまま……!?　まだふたり目なのに……ウォルセンさんを口説き落としたとしても、まだふたりも残っているのに……なのに、ここで……こんなところで!?）

これが、ナルレイシアではない選定者であったなら、すかさず自分を選び役目を与えてくれた虹神――創世七神に祈りを捧げるか、自分の力不足による役目の未完遂を謝罪したことだろう。

しかし、彼女はそのどちらもしなかった。

というか、恐慌状態に陥ってしまったのだ。

口から迸るのは未だ実現化していない楽園の日々への未練だった。

「ぎゃぁぁっっ！　いっやーっっ！　わたしまだファティ・リンシャの書庫の本、読み尽くしてないーっっ！　アマンシールさまのお屋敷の本だって、数が膨大だからまだまだだしー！　ネイスリーズさまにだって、今度まとまったお休みもらえたらお屋敷伺って本読ませてもらう

って約束取り付けたばかりなのにーっっ！」

限りない愛情と執着を書物に捧げる彼女としては至極まっとうな未練ではあるが、世の一般的な年頃の少女としてはいかがなものかという内容を絶叫した彼女の体が落下を終えたのは、想像したよりずいぶんと早かった。

暗黒の地溝の口に呑み込まれて間もなく――突然、彼女の体は重力から解き放たれたのだ。

（……へ……？）

まさに命が繋がれた瞬間、そんな感想を抱けたのは彼女ならではと言えるかもしれない。

だが、突然落下が止まったのはともかく、今度は容赦ない横風に晒される羽目になったナルレイシアは混乱の極みにあった。

「自由落下じゃなくて、地形による乱気流!?　そんなものに巻き込まれたら、もしかして遺体の損傷　激しすぎ!?　というより、ちゃんと原型保てるの……？　さすがに肉片になって家族とご対面は避けたいというか……」

これまで奇跡的な生還を果たしてきた根拠を『走馬燈映像なし』に定めていただけに、走馬燈映像が流れてしまった今回、彼女の意識は自分の死体のありようだとかに絞られていた。

だから。

「なに、混乱してるんだ、この猿娘」

呆れ果てたと言わんばかりの声を耳元で聞かされた瞬間――。

（嘘!?）

信じられなかった。

「……どうして……」

声のしたほうに顔を向けてみれば、そこにはいつも不機嫌な色しか見いだせない——そしてそれは今も、だった——紫の双眸。

「どうしてここにガスカールがいるのぉおおっっ!?」

「つまり……」

ナルレイシアの話をそれまで黙って聞いていたリーインが、ぼそりと呟いた。

「選の巫女はしっかり秘密行動取ってるつもりだったのに、実のところは美貌の御柱と紫公爵にはすっかり筒抜け状態だったというわけだ。良かったじゃないか、おかげで命を拾ったんだもんな」

……別に皮肉のつもりはないのだろう——とは思う。

思うが、複雑な気持ちになるのは彼の言い回しに問題があるのに違いない。

（なによ、夜までの時間つぶしに……まあ、濡れた服を乾かさなくちゃいけなくて身動き取れ

ないからっていうのもあるけど……詳しい事情を聞きたいって、言い出したのはリーインのくせに）

何だって、こうも神経に障る物言いをするのか。

しかし、言われていることはいちいちもっともなので反論もできない。

そう……ナルレイシアとしては細心の注意を払って待ち合わせの四阿に向かったつもりだったのだ。誰にも気づかれないように、本当に本当に気を遣って、絶対ばれないと信じて疑わなかったのだ。

だのに、断崖から落ちたナルレイシアを『回収』したガスカールに理由を聞いたところ、自分の言動は怪しんでくださいと言っているような胡乱なものだったらしい。

『お前が勝手に出歩くと、ろくなことにならないのは先の騒ぎでも身にしみたからな。目を離すわけがないだろう』

見張っていたのだと言われて楽しいはずもなかったが、確かにそのおかげで助かったのだから文句は言えない。

『案の定、怪しげな場所に入り込んだと精霊からの報告を受けたネイスリーズさまが閃公を貸してくださったんだ。精霊は出入りできない結界でも、幻獣まで規制する結界はないだろうからと仰ってな』

伝説や神話にしか存在しないと信じられる幻獣を想定した結界は、確かにないだろう。

ナルレイシアが助かったのは、雷馬という存在がこちら側に味方していたからこその奇跡だ……そうでなければ……走馬燈経験は確実に死へと誘ってくれたに違いない。

『オカゲデタスカリマシタ』

それでも、素直にガスカールに礼を言うのが気が進まず、棒読みになってしまう。

しかし意外にも、そのことに関して彼が文句をつけることはなかった。ただ、乱暴に彼女の髪をくしゃり、と乱すと『……まあ、無事でなにより』と不機嫌な声で告げただけだった。

そこで黙って頷いていればよかったのだが、ナルレイシアは思わず『どうしたの、ガスカール、体調でも悪いの？』と尋ねてしまい、黒髪紫瞳の青年に、それはそれは冷たい眼差しで『お前がおれのことを日頃どう思っているかはよくわかった』と告げられたのは余談だ。

そうして、こっそりと部屋に戻ると、ネイスリーズに事情を話して相談したのだ。

その時点でもまだ、ナルレイシアは自分こそが唯一の標的であった事実を認識してはいなかった。

だから、アシュアイードこそが黒幕であると言われても、すぐにはぴんと来なかった。

しかし、狙われたのは確かなことで、ここはひとまず必殺『死んだふり』が有効だろうというネイスリーズの言葉には頷いたのだ。

しかし、黙って死んだふりをしていても埒は明かない。

そこで、ネイスリーズが提案したのは——更に多くの助言と協力を仰ぐというもので……早

い話、現在ファエンで同窓会よろしく集まっているファティ・リンシャを始めとする柱神たちに会いに行くということだった。

幸い、ファエンには怪我が完治したリーイン・ル・ファンが、ガスカールと入れ替わりに詰めている。

『餅は餅屋に、結界は結界術師に。いやあ、早々に解放してなくて良かったよねぇ』

にこやかな笑顔が、どことなく黒く見えたのはナルレイシアの気のせいだったのだろうか。

そうしてナルレイシアは他に方法がないということで、恐怖の超上空を単独で飛行移動することとなったのである……はっきり言って、無事にファエンにたどり着けたことのほうが、断崖から落ちて助かったことより奇跡的だと本人は思っている。

そうして、ナルレイシアから事情を聞いたファティ・リンシャとそのご友人――言うまでもなく皆人外だった――たちは、実に快くというか楽しげに協力を約束してくださり、その準備のためにナルレイシアとリーインのふたりは先駆けてアシャスに戻ってきたというわけだ。

しかし、この段になっても、ナルレイシアはまだアシュアイードが黒幕という考えに納得できずにいた。

焚き火に枯れ枝を投げ込みながら、ぽつりと呟く。

「アシュアイードさん……優しそうで、とてもそんなことしそうに見えないんだけどなあ」

「そりゃあ、仕方ない。巡り合わせが悪かったんだよ」

リーインはこともなげにそう応じた。

「巡り合わせって……」

「あの当主代理が、そんなあからさまにばれる行動に走ったってことのほうが、おれには信じられないけどな。だが、考えてみりゃあ、おれや問題有りとはいえ何十人単位の人間を、目的のためにあっさり捨て駒にするやつだ。同時に、そこまでしてでも、あの御曹司は義弟を手元に取り戻したかったってことだ」

ところが、取り戻して、これからはずっとそばにおいておけると思った矢先に選定者が現れて『あなたの義弟さんは柱神確定候補です』なんて言ったらどう思う？

問いかけられて、ナルレイシアは似たようなことを聞いた覚えがあるような気がして記憶をひっくり返した。

（そう……あれは確かセルフィアでファティ・リンシャから神殿の裏事情を聞かされたとき）

『それまで人間として生きてきた者が、突然人間ならざるものへ変化することを受け入れるのは簡単なことではないわ。俗世に関わってはならない決まりがある以上、家族や恋人と離れなければならない場合もある……家族や恋人が政治に深く関わる立場にある時などにね。最愛の家族や恋人と別れてまで、世界を支える柱となる決意を固めるのは生半なことではない……』

最愛の家族——政治に深く関わる立場。

ウォルセンがアシュアイードのことをとても大切に思っているのは見ていればわかる。

アシュアイードのことは知らないが、あれほどの好意をウォルセンが抱くというのなら、それが一方通行だとは思えない。

もしも、アシュアイードもまたウォルセンのことを同じほどに……あるいは、それ以上に愛情を抱いているのだとしたら……？

次期マルシアス侯爵として、政治に深く関わることは避けられない彼にとって、ウォルセンが柱神に選ばれるということは、永遠の別離を意味するのではないのか。

そしてそれはウォルセンにしても同じことだ。

（もしかして、ウォルセンさんがあんなにも頑なのは、アシュアイードさんと離れたくないから……？　あれ、でも出会ったとき、エアランに住んでいたわよね……その後お家騒動があったって話で……不安がなくなったから……？　ううん、違う……）

最初から、ウォルセンはナルレイシアの話を聞こうとはしなかった。

いや、最初は単に面倒に巻き込まれたくないと言いたげな態度だった。頑としてこちらの話を聞こうとしなくなったのは……。

（いつから？　思い出すのよ、きっときっかけがあったはず……初対面の時は全然問題なし。翌日も顔見るなり悲鳴上げてくれたけど、あれはまるで予想もしなかった化け物かなにかに遭遇して驚いたって感じで……）

自分で考えた挙句その内容に凹んでしまうナルレイシアだった。

（えー、と、だからその後脱兎のごとく逃げ出されて、追いかけたらまた化け物見るような目で……このあたりは思い出す必要なし。凹むし）

それから、それから――呟きながら目を瞑った。

（どうしても聞いてもらわないとってわたしも必死で、神罰落ちちゃうとかなんとか言って……うん、言った。そうしたら、ウォルセンさんが呆れたように……）

『なに、あなたは選定者なの？』

あの時、あまりの驚きに焦りまくった記憶が……。

もしも――あの時すでに、彼に自分が選定者であることがばれてしまっていたのだとしたら……彼のその後の逃げっぷりを思えば、真実柱神になることを厭っているのは間違いないけれど。

「ああ、もう！　結局わかんないまんまだわ！　ウォルセンさんのこと、どうしても説得しなくちゃいけないのに、全然糸口が見つからないーっ！　まさか、『アシュアイードさんと離れたくないからなんですか？』なんて、不躾すぎて訊けないしーっ！」

頭を抱え込んで煩悶するナルレイシアの耳に、そろそろ乾いたらしい服を着込みながらリーインが洩らした声が飛び込んだのはその時だった。

「訊いてみれば？」

「は？」

何を言われたのかすぐに理解できず、思わず間抜けな声を上げてしまった彼女に、黒髪の青年はあっさりと答えた。

「だから、離れたくないから柱神になりたくないのかって、さ。状況打開の糸口になるかもしれないだろ？」

さらりとした口調で告げられても、ナルレイシアにはどうしてそう思えるのかがわからない――ので、ついきつい目で睨みつけてしまった。

「……ふざけてる、もしかして？」

「ふざけてないよ、本気でいいんじゃないかって思ってる……その反則ぎりぎりの直球攻撃。ま、あの当主代理には間違っても使うべきじゃないだろうが……ウォルセンのほうはなー、根っこの素直さがまだだれてないし……もしかしたら、思わぬ本音が飛び出すかもしれないぜ？」

ますます訳がわからない。

「だって、ウォルセンさんはどう考えても『離れたくないから』って理由で翠唱子を拒んでるわけじゃなさそうなのよ!?」

訊く意味なんてないじゃない。

そう告げると、リーインはくつりと喉を鳴らした。

『これだからお子様は』

という副音声が聞こえた気がしたのは……多分気のせいではない。

しかし、嬲られたと感じてナルレイシアが噛みつくより先に、彼は自分の提案の理由を説明し始めたのだ。

「選の巫女はひとつ思い違いをしてると思うぜ。おれが見たところ、ウォルセンは義兄っていうか親友？　あいつと一緒にいられるならいたいと思ってる。これはあんたらの鼻先であいつをかっ攫って、感動の再会を目の当たりにしたおれの確信だ。だが、今回のお家騒動も含め、そう簡単な状況じゃない間柄なんだろう。簡単に説明できることでも、その事情を打ち明けるわけにもいかないってところだろ。そんなんじゃ、どんなに選の巫女が頑張って根性の限り正面からぶつかっても、まず永遠に糸口は摑めないと思うな」

それは、言われるまでもなく、黒鷲城に着いて以来、ネイスリーズの協力を受けてせっせと説得に勤しみながらも全敗に終わった結果でもって明らかだ。

「でも、だからって……」

離れたくない――が理由に含まれているとしても、別のそれがあるのなら、そこを突いたところで効果は望めないではないか。

くつくつと、そこでリーインが笑った。

先ほどと同じ、『これだから……』と言わんばかりの空気を感じれば、「なによ!?」と噛みつきたくもなる。

きっ、と睨みつけると、案の定青年の黒い瞳は笑みに細められていた。
しかし、続けてその口から紡がれた声に、こちらを馬鹿にする響きは一切なかった。
「選の巫女は女だからわからないかもしれないけどな……いくら『大好き』で『ずっと一緒にいたい』と思っていたとしても、男は成人近くにもなれば、そんな本音、恥ずかしくて絶対口になんか出せなくなるんだよ。まあ、これが恋愛事情なら話は違うんだろうが、家族愛に関してはなー、気恥ずかしくってまず言えない。ついでに言うなら指摘されでもしたら、そりゃあ恥ずかしいやら焦るやらで平常心は保てないと思うぞ？　最初の一撃って限定はつくけどな」
それは……つまり……？
「……ええっとぉ……慌てさせて、失言させて本音を引き出す……と？」
そういうことでしょうか、センセイ？
「正解。でも、なんだよ、そのセンセイっての。おれはあんたの先生になった覚えはないぞ？」
実にイヤそうに顔を顰める結界術師の青年に、（わたしだって教え子になった覚えはないわよ）と思いながら、ナルレイシアはずっと気になっていたことを口にした。
「ナルレイシア・フォイリル・ダカール」
「うん？」
なんだ、と首を傾げる青年に、「わたしの名前」と念押しする。

「知ってるが……だから？」
怪訝そうに問い返してくる青年に、彼女は告げた。
「知ってるなら、選の巫女って呼ぶのやめて。それ、東方での選定者の呼び名でしょ？　わたしは『選の巫女』なんて名前じゃないのよ」
リーインがしばし沈黙した。
そうして、再び口を開いた末に紡がれた言葉は――。
「んー、じゃ、爆竹娘？」
「それのどこが名前なのよーっっ!?」
「ぴったりだろうが！　ハーンじゃよほど親しくない限り、相手の名前を直に呼ぶのは御法度なんだよ！　ぱちぱち弾けてどこに転がるかわかんないあたり、そっくりじゃないか！　決定！　あんたは爆竹娘！　さあ、爆竹娘、そろそろ行くぞ。良い具合に暗くなってきたし、結界攻略には絶好の時間帯だ。あの城の鉄壁の結界はおれがなんとかしてやるから、あんたはウォルセン陥落に全力を尽くすんだぜ、爆竹娘！　んでもって……これ、だが」
おもむろに、リーインが懐から取り出したのは大きめの手巾だった。
雲を抜けて地上に降りるまでの間、自力では止めることのできなかったナルレイシアの悲鳴絶叫を極力殺してくれた究極の――。
「要る？」

問いかけられたナルレイシアは正直なところ逡巡した。
超上空を移動するわけではない。雷光迸る雲の中を移動する訳でもない。
それでも……まだ雷鳴は完全には遠ざかっていない。
「是非トモオ願イシマス」
まさか自分から進んで猿ぐつわを噛む日が来るとは思わなかった――。
ナルレイシアの記憶に鮮烈な印象を残す出来事は、こうして積み重なっていくのだ……。

12

それは、夏の最後の日と言われる日――アシュアイードは黒鷲城の接客室で、招かれざる客人たちと対峙していた。

知らせが届いたのは三日前――『奇跡及び神罰調査委員会』と名乗る一団は、しかしその用件を書状に認めてはいなかった。

奇跡及び神罰調査委員会。

耳慣れない名称だが、アシュアイードはすぐに彼らの目的を悟った。十中八九行方不明となった選定者のことについてだろう。

(事故か、事件か調査に来たというわけか……)

そう思っても、彼に焦りはなかった。

形ある証拠は何ひとつ残ってはいないのだ。何も恐れる必要はない。

ただひとつ、気がかりなのは数日前から不調を訴え、今回の件について『視る』ことができないと申し訳なさそうに言ってきた占術師のことだ。

『強大な気が近づいてきます……その巨大さに空気が乱れ、水晶から何も読み取ることができません……』

強大な気と聞いて、すぐに思い出したのはネイスリーズのことだった。

『ガライラの御方がまた戻ってらっしゃると……？』

しかしノアイールはかぶりを振った――気配はかの柱神のそれより更に強いのだ、と。

これではとても、何かを『視る』ことはできないと。

そのときは、さほど気には留めなかった。ネイスリーズでなければ、こちらに関わることはあるまいと思ったからだ……が。

（このタイミングでの『委員会』の訪問……偶然か？　いや、たとえそうでも動じることはない……選定者を疎んじる理由など、こちらにはないのだから。普通、自分の一族から柱神が選ばれたと知って、喜ばない貴族はいない……）

だから、自分が疑われることはあり得ない。

そう心に言い聞かせながら、一行が案内されて来るのを待っていたアシュアイードだったが、一団の中に見知った――強烈すぎて忘れようにも忘れられないのだ――顔を認めた瞬間、さすがに驚きに目を瞠った。

緑がかった金髪はつややかで、その瞳は印象的な灰緑色――顔立ちときたら人間離れした整いぶりだ。

初めて目にした時の衝撃は忘れられないが、二度目でもそれはあまり変わらなかった。
（ガライラの御方がなぜ『委員会』に!?　いや、まさかそんなはずは……）
柱神がいくら神殿とはいえ、人間の組織に所属するはずがない。
しかし、別人だというには、その美貌は稀有にすぎる――到底この世にふたつあっていいものとは思えない。
（どういうことだ……？）
表面上こそ平静を保ってはいたが、アシュアイードは動悸が激しくなるのを感じた。
そんな彼の心中を見抜いたわけでもあるまいが、その青年はなにか得心したように小さく頷くと、やはり聞き知った声で話しかけてきた。
「驚かせてしまったようですね。わたくしはスカルトード・ナネリーアン・フォスカリク……ディエーンにおける『奇跡及び神罰調査委員会』の長を務めさせていただいております。先日はうちの大伯父がお世話になったそうで……ご迷惑などおかけしませんでしたでしょうか？」
大伯父――という言葉に、ふたりが酷似している謎は解けた。
が――。
（あれの身内ということは、やはり油断は禁物ということだな）
表面はにこやかに振る舞いながら、アシュアイードは気を引き締めた。
しばらくは挨拶と和やかな話題が続いたが、ティーカップの中身が半分ほどになった頃、ス

カルトードがおもむろに口を開いた。

（来たな）

アシュアイードは内心身構えた――無論、それを外に出すような真似はしない。

「ところで、わたくしどもがこちらに伺ったのはふたつほどございまして……ですが、どちらも声高に言える内容ではなかったため、前もってお伝えしなかったことをまずお詫びしておきます」

回りくどい言い方だが、アシュアイードは気にしない。

神殿の人間はとかく持って回った話し方をするものだ――神々の威光を自分のものと勘違いしているのではないかとおかしくなるほどだ。もっとも目前のスカルトードの態度に権威を笠に着た様子は窺えない。

彼はあくまで自然に振る舞っており、それがしっくりと馴染んでいるのだ。

「いいえ、お気遣いなく。委員会のお役目の内容を考えれば、慎重に振る舞われるのは当然のことかと。なんなりとお申し付けください、できる限りの協力をお約束いたしますよ」

アシュアイードの言葉に、スカルトードがほっとしたように微笑んだ。

しかし、次いで紡がれた言葉の内容に、アシュアイードは心臓を鷲摑みにされた。

「そう言っていただけると助かります。早速なのですが、ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアス殿にお会いしたいのです」

「ディー……いえ、義弟にですか？　理由をお尋ねしても？」

内心の動揺は綺麗に隠しながら、アシュアイードは務めていつもと変わらぬ声で問いかけた。

（ディーに……!?　なんだ、一体何を考えている!?）

探るような視線を向けても、驚異の美貌の青年は穏和な笑みを浮かべているだけだ。

（狸の血縁はやはり狸か……）

内心ぎりぎりと唇を噛みしめる思いで、アシュアイードは彼からの返答を待った。

「驚かれることと思いますが、貴家の第二子……ああ、養子でいらっしゃいましたか。ウォルセン殿は、先日新たに見いだされた神宝『翠唱子』の半身……つまり、新たな御柱の君となる方なのです」

あっさりと告げられた内容に、アシュアイードは微かに目を瞠った。

（今更なにを……？　あの娘が死んだ時点で神宝は再び姿を消したはずだ……それとも、消えなかったのか!?　まさか、ガライラの柱神が預かっていたというのか……？）

人間の手からは消えるが、柱神のもとには留まるというのだろうか――。

自分がしたことは、所詮は無駄な足掻きでしかなかったと……？

（いいや、まだそうと決まったわけではない。候補を見極めることができるのは選定者だけだ……選定者が不在である以上、神殿はあくまでディーを候補としか扱うことはできないはず……それなら……）

いくらでもやりようはある。

そう思うアシュアイードは、しかしさらに信じがたい言葉を聞かされることとなる。

「先日大伯父とともにいたふたりの少女を覚えておいでしょうか？」

スカルトードの問いに、アシュアイードは「ええ」と頷いた。

忘れるわけがない——忘れられるわけが。

「可憐なお嬢さん方でした。おひとりがあのようなことになってしまい、残念でなりませんでした」

これにスカルトードが深く頷く。

「痛ましいことです……彼女はこの役目を勤め上げることを強く望んでいました。年若い乙女には大きすぎる役目であるにも拘わらず、彼女は真摯に向き合おうとしていた……」

ここではわざと驚くべきだろうか——自問の答えは一瞬で出た。

否だ。

（わたしが偶然そのことを知ったことは、件の柱神あたりから知らされているはずだ。白々し

い演技は必要ない）

「本当に……不遜を承知で言わせていただくなら、神々も酷なことをなさる……」

沈痛な面持ちで神官相手に言うべきでないことを敢えて口にすると、スカルトードを除く神官たちが咎める目を向けてきた。

しかし、長である青年は静かにかぶりを振っただけだ。

「残念です……本当に残念でなりません……御柱の君となる方と、このような巡り合わせでお会いすることになろうとは……」

それは心底からの言葉に聞こえたが、それ以外にもなにか含みを感じさせた。

（なにが言いたい……？）

内心の訝りを押し隠したまま、アシュアイードはスカルトードの次の一手を待った。

そして、告げられた内容に、はらわたが煮えくり返るような怒りを覚えた。

「選定者の行方不明について、ウォルセン殿には重大な嫌疑がかけられております。同行したアゼルフィア嬢……彼女は緑神神殿から正式に任命された今回の見届け役なのですが、彼女の話によると、ウォルセン殿は頑なに神宝を拒んでいたとのこと――」

そこまで言うと、金髪の青年は意味深長に言葉を切った。

「待ってください！」

黙っておられず、アシュアイードは思わず叫んでいた。

「何を仰ってるんです!?　まさか、ディー……いえ、義弟がヴィル・ダカールの件に関与しているとでも？　あり得ない！」

そう、誰よりもよくそのことを自分は知っている。

（手を下したのはディーじゃない、おれなんだから！）

馬鹿正直にそんなことを口にするつもりはないが、こんなとんでもない話を受け入れられるわけがない。

「……義弟を侮辱なさるおつもりか？　ただ神宝を拒んでいたというだけの理由で、なぜそのような恐ろしい疑惑が浮上するというのです？　そもそも、彼女の死に何者かが関与していたというのなら、神々がすでに罰を下しているはずでは？」

暗にお前たちの出る幕ではないと仄めかすと、スカルトードが憂い顔で息をついた。

「無論、本人に会いもせずに、決めつけるつもりなどありません。またそうあって欲しくないと我々全員が思っております。ですが、もしも我らの懸念が当たっていた場合、下される神罰は尋常なものではないでしょう……神々の怒りは大きく、罰は罪人のみに下されるとは限りません。それを防ぐためにも、できることは人間の手でなすべきではありませんか？」

つまりは神罰による多大な被害が出る前に、自分たちが処断すべきではないか――半ば脅しのような言葉に、アシュアイードの怒りは頂点を極めた。

（巻き添えになりたくなければ、おとなしく従えと？　ずいぶん舐めたことを言ってくれるも

のだ）

「言いがかりだ」

低い声はどこまでも静かだった。

「そのようなご用件でしたら、先ほどの言葉は撤回させていただくしかありませんね」

協力？

（誰がするものか）

表面上は友好的な顔で通すつもりだったが、そういうことなら話は別だ。

論外というものだ。

「しかし、アシュアイード殿……」

「彼は無実です。そうとわかっている者を、どうしてあなた方の手に委ねられましょう？　先ほどから聞いていれば、彼を疑ってかかってらっしゃるご様子。それでは到底公正な調査や判断がおできになるとは思えない」

口調が辛辣になるのを抑えることはできなかった。

またその必要性もなかった。スカルトードを除く神官たちが、怒りに肩を震わせるのが見えたが気にはならなかった。

ただ、これほどの挑発にも拘わらずスカルトードの表情がいっそ悲しげですらあるのが解せなかった。

（なんだ？）

頭の奥で警鐘が鳴り響く。

（まだ、なにかあるのか……？）

アシュアイードの胸中の疑問が聞こえたわけでもないだろうが、その時スカルトードが眉間に指を当て、深いため息を洩らした。

「アシュアイード殿。気分を害されたのならいくらでも謝罪いたします。ですからどうか、ウォルセン殿に会わせてはいただけませんか？」

先ほどまでの高圧的な態度が嘘のような言葉に、アシュアイードは知らず眉宇を顰めた。得体の知れない不安が胸に広がっていく。

「本来ならば、このことは秘中の秘に当たること……ですから、お話しせずにすませられるならばと思ったのですが、傲慢でした。大切なご家族に関わることだ、貴方には知っていただくべきでしょう」

彼の言葉が終わった瞬間、いくつもの声が咎めるようにその名を呼んだ。

しかし彼は断固とした態度で彼らの反対を抑え込むと、真剣な眼差しをアシュアイードに向けてきた。

「ウォルセン殿が、もし本当に翠唱子に半身として選ばれているのであれば、我々は一刻も早く彼にその事実を受け入れてもらわなければなりません。忌まわしき暗黒時代、人間の傲慢さ

によって歪められた神宝は、一度半身と定めた者を違えることができません。つまり、半身に選ばれた人間は、神宝を拒む権利を持たないのです。にも拘わらず、あくまで神宝を拒絶した人物は……」

意味ありげに言葉を切られ、アシュアイードは内心唇を噛みしめた。

（なにが言いたい）

しかし、まさか「神殿が処理するとでも？」とはさすがに言えはしない。

そこまで冒瀆的な言葉を、ディエーンのおいて微妙な立場にあるマルシアス家の次期当主として口にするわけにはいかないのだ。

「五厘です」

唐突な言葉に、アシュアイードは問いかけるような目をスカルトードに向けた。

「過去、神宝の半身に選ばれた人物の……受け入れる以前に死亡した者たちの死因ですが、ほとんどは事故か人為的なものですが……五厘に当たるだけの人数が、人間の手では到底かなわない、不可解な死を遂げております。我らが先達が調査した結果として、その五厘分の案件はすべて神罰として記録に残されております」

灰緑色の双眸に強烈なまでの決意をたたえて、一団の長たる青年が身を乗り出し、訴えかけてくるのを、アシュアイードは呆然と見つめた。

「五厘……」

百人に五人の確率――決して高くはない、だが偶然と言い切ることもできないその数値が意味するところはなんなのか。

神罰があるのなら、自分が受ければ良いだけだと思っていた。選定者など、現れる端から葬ってしまえばいいと……その果てに自分が永劫の地獄に堕ちようと構わないと思っていた。

だが、もしもその行為によって、『あくまで神宝を拒絶した』として罰を受けるのが自分ではなくウォルセンなのだとしたら……そうだ、先ほどスカルトードが言ったではないか、

「神々の怒りは大きく、罰は罪人のみに下されるとは限りません」と。

「……馬鹿な……」

口を突いて出た声は掠れて言葉にならない。

「わかっていただけませんか？　我らとしても、ヴィル・ダカールのことは残念でなりません……ですが、彼女は言い方は悪いですが換えのきく存在です。待っていれば、いずれ新たな選定者は現れるでしょう。しかし、神々がそれまで待ってくださるかどうかはわかりません。その怒りを買って御柱となる貴重な命が喪われることこそを、我らはなんとしても避けたいのですよ」

非情な言葉だが、それはいかにも世界の存続を第一に考える神殿の人間が口にしそうなものだった。

信じるべきか疑うべきか――心の天秤が大きく揺れる中……。

それは、起こった。

一瞬、太陽が落ちたのかと思うほどの強烈な光が窓から飛び込んできた。
数瞬遅れて、大地を揺るがす轟音が黒鷲城……否、アシャス全体を震わせた。
「なんだ!?」
何が起こったというのか——事態を把握するために、アシュアイードは窓に駆け寄った。
そしてそこで……目にした光景に声を失う。
「……ディー……!?」
その翡翠の眼差しが向けられたのは、黒鷲城の一郭。
ウォルセンのために新たに用意した部屋のあるあたりだった。
その部屋を含めた部分は、しかしアシュアイードの目に映ることはない。まるで切り取られたかのように完全に消失していた……瓦礫ひとつ残さずに。
そして、そのぽっかりと空いた中空に、彼は信じられない——いや、信じたくないものを見た。
晴天の空には雲ひとつない。

だというのに、蒼穹から真っ直ぐに大地に突き刺さる雷光の槍とも剣ともつかないものに、胸部を貫かれ、串刺しにされているのは――。

「ディーっ！」

心臓が、凍りついた。

（嘘だ）

こんなことはあり得ない。

恐怖に心は縛られたが、肉体は本能的な恐怖さえ押しのけて動いていた。

部屋を飛び出し、ひたすらにウォルセンのもとへと足が動く。

彼の部屋はすでにないのだと、理解していなかったわけではない。しかし足は構わずに動く――ただそこへと駆けつけようとする。

「アシュアイード殿！」

背後から自分を呼ぶ声が聞こえたが、構ってはいられなかった。

（ディー！　馬鹿な……こんな馬鹿なことが！）

切り取られた黒鷲城の廊下――ウォルセンの部屋へと続くそれが、無残に途絶えたそこに到ってもアシュアイードの足は止まらなかった。

背後から乱暴なまでの力で肩を掴まれなかったら、その体は宙に舞っていたかもしれない。

「馬鹿な真似を……貴方まで死ぬおつもりですか!?」

怒鳴りつけてくるのはどこぞの狸柱神の血縁者だ。
ぎり、と睨みつけてアシュアイードは怒鳴り返した。
「放せ！　こんなのは幻覚だ！　目くらましか何かに決まってる！」
「落ち着きなさい！」
「放せと言っている！　早くディーを助けないと……っっ！」
「落ち着きなさいと言っているでしょう！　あれは……あの状態ではもう……」
「馬鹿を言うな！」
あくまでも肩を放そうとしない青年に、怒りのまま拳を振り上げようとしたアシュアイードは、その瞬間、聞こえてきた歌声にはっと息を呑んだ。
「これは……」
スカルトードもまた驚きの表情で空を見上げる。
歌声は——空から聞こえて来たのだ。
人間のものではあり得ない、音ならぬ音と声ならぬ声が重なりあった不可思議にして心を揺さぶるその歌声。
その旋律に言葉はない。
いくつもの声が幾つもの旋律を比類なき調和を以て紡ぐそれを、歌と評していいものかどうか——しかし、それは確かに歌であると聴いた者は感じるのだ。

天上の――あるいは神が奏でる至高の調べ……。

この時、アシャス中の住人が、この歌声を耳にしていた。ある者は理由もわからず涙を流し、またある者は胸に湧き上がる喜びに身を震わせ――世界を愛しみ、世界の美しさを称え、生きる喜びと同時に胸を締めつけるような悲しみを歌い上げる声に支配された。

そうして声の主を求めて空を見上げた全ての者が、光に貫かれたウォルセンと……そのそばに現れた人間ならぬ女性の姿を目撃したのだ。

全身を光に包まれたその女性の肌は褐色――双眸は極上の翡翠。

地上からはかなりの距離であったにも拘わらず、ふたりの姿は遠目にもしっかりと見て取れた。

誰も、そのことを不思議とは思わなかった。思うはずもない。

なぜならその女性の額には、マーシャス一族の末裔であれば知らぬ者はない聖なる痣があったのだから！

それは目にもあざやかな、緋色の翼ある蛇の印――マーシャスの『聖印』!?

（ファタランテさまだ……）

（マーシャスの女神……）

奇跡の光景に、咳ひとつ上がらない中、褐色の女神はウォルセンの全身を貫く光の刃に手をかざし、消し去った。

しかし、その体は力を失ったまま、閉ざされた瞼が開かれることはない。
女神が青年の体を抱きしめる――長い睫に縁取られた翡翠の双眸からはらはらと涙をこぼしながら。
『愛しい子……わたくしの愛し子』
血の気のなくなったその頬に触れる仕種からは深い愛と悲しみがにじみ出ていた。
『約束の地は定まりぬ……その喜びの歌を世界中に広めるために、あなたをこの世に送り出したというのに……どうして翠唱子を拒んだの……なにがあなたを縛ったの？』
それは囁きに過ぎなかった――だが、それは彼女の姿を目にした全員の耳にはっきりと届いたのだ。
そうして、この奇跡に立ち会った者たちすべてが悟ったのだ。
ここそが女神が約束した地なのだと。そしてウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスは、それをマーシャスの末裔に伝えるために女神によってこの世に送り出された最後の『聖印の子供』だったのだと。
本来であれば、祝福と喜びを世界中に伝えるために生まれた子供は、しかし喪われてしまったのだ――と。
その日、アシャス中が約束の地を得た喜びと、祝福の子供を失った悲しみに満たされた。
アシュアイードが前侯爵エルセイドの死を公表し、喪が明けると同時に爵位を継いだのはこ

の半年後のことだった。

新たなマルシアス侯爵が、その報告を兼ねてロスタロイドの王宮に伺候したことは、ディエーン中を揺るがす大事件として長いこと巷間を賑わわせた。

実に四世紀ぶりに、王宮に足を運んだマルシアス侯爵――それは、彼らがこのディエーンを安住の地と認めたことを意味していた。

13

慌ただしくも剣呑な夏が終わり、秋が過ぎ、気がつけば新年まであとわずかという頃、ディエーン王国王都ロスタロイドの『不思議の館』――ファティ・リンシャの屋敷には十人を超える客人を迎えることとなった。

その顔ぶれはガスカール、スカルトード、ランディータ……までは普通だが、他の面子がとんでもなかった。最初に客人の名前を列挙されたときには、ナルレイシアは呆然と空を見上げてしまったほどだ。

何故と言えば――。

アマンシールとネイスリーズのふたりに加え、夏にファエンで集まった面子が大集合することになったからだ。

そうして、年明けまでもう間もないという時刻、十人近い柱神が一堂に会したこの屋敷ではお祭り騒ぎが展開していた。

アマンシールを除けば『国持ち（？）』の柱神はいないため、問題はないと言われたとはい

え、ナルレイシアは緊張せざるを得なかった。
現人神たちに囲まれることに対して、ではない。それほどの人外魔境が集まり、そこにトラブル体質の自分が加わって——果たして無事に新年を迎えられるかどうか、非常に不安だったからだ。
しかし、屋敷の女主がいいと言っているものを、「何が起きるかわからないからやめてください」などと言えるはずもなく、また彼らが集まる理由が理由であったため、ひたすら何事もなく年を越せますようにと天に祈るばかりである……。
（ああ、神さま……創世の七神虹神さまがた。どうか、どうかこのおめでたい席で、わたしが原因で騒ぎなんか起こりませんように！）
空になった大皿を厨房へ運ぶ間も、「わたしは空気、空気だから目立たない、なにも起きない、起こさない」と呪文のように呟いていたのだが……当然のことながら、空気とは違い目に見える肉体を持つ彼女を放っておいてくれるような面子はここにはいなかった。
「ナーシア！」
突然がしっと腕を掴まれ、振り返った先に見たのは銀の髪に褐色の肌を持つ美女——ランディータの上機嫌な顔だった。
心なし頬が赤いところを見ると、結構呑んでいるのだろう。相当な酒豪である彼女は、そうそうの酒量では顔色ひとつ変えないのだ。

「なに片付けなんてやってるんだい？　そんなことはそこの仏頂面男にでもまかせときゃいいんだよ、さぁ、今日こそ夏の騒ぎのことを全部話してもらうよ！　ここまで待ったんだ、いやとはまさか言わないよね？」

にこやかな笑顔で、しかし強烈な圧迫感を醸し出すあたり、さすがにただ者ではない。

王家直属の情報部に属する女丈夫はここぞという時、その実力を惜しみなく発揮するのだ。

……因みに、「そこの仏頂面男」とはガスカールのことだ。仮にも公爵位にある人物を表現する言葉ではない……相当酔いが回っている。

（うわー、こんな状態のランディータさんに捕まっちゃったら、どんだけ呑まされるか……手当たり次第に勧めてくれるし拒否権認めてくれないから、翌日が地獄なんだよね）

かつて彼女の迫力に負けて、勧められるままに酒杯を干した結果、この世を呪いたくなるような二日酔いに苦しめられた記憶は鮮烈に脳裏に刻まれている。

二度と繰り返したい思い出ではない。

「イヤじゃありません……ありません、けど……」

ランディータの目が据わっている……はっきり言って、怖い。

しかし、天はナルレイシアを見捨てはしなかった。魅惑的すぎる声がふたりにかけられたのだ。

「おや、小鳥姫と琥珀の女神じゃないか」

声の主は――言うまでもあるまい。
途端にランディータが「ぎゃぁっ！」と叫んで飛び上がった。
「いやだ、来るな！　スカーと同じ顔と同じ声で、そんな鳥肌の立つような呼び方されたら……ううう、駄目だ我慢できないーっ！」
来るなと言いながら、よほど気持ち悪かったのか彼女は脱兎の勢いでその場を逃げ出した。
残されたナルレイシアは、感謝をこめてネイスリーズに礼を述べた。
「ありがとうございました、ネイスリーズさま。話をするのはいいんですけど、ああなったランディータさんは勧め上戸になっちゃうんで、どうしようかと思ってたんです」
本当に助かりました、ともう一度繰り返すと、人外美貌の万年青年――恐ろしいことに、現在この屋敷には、他に万年少年やら万年少女やら万年美女が集っている――はにこやかに「わたしはなにもしていないよ」と答えながら、彼女から空の大皿を取り上げた。
「……ネイスリーズさま？」
きょとんとして見上げると、輝かしすぎる美貌の柱神は、そっと身を屈め、彼女の耳元に囁きかけた。
「あまりの賑やかさに驚いたのか、今日の主役が行方不明なんだ。よかったら小鳥姫が捜してくれないかな？　この騒動で気疲れしたのなら、しばらく散策するのもいいし……彼さえ良ければ空の散歩用の足を用意してもいい――と、見つけたら伝えてくれるかな？」

今日の主役――そう表される人物はひとりしかいない。
ナルレイシアは笑顔で頷いた。
「わかりました。因みに疲れた主役はどこへんにいるとお思いになります？」
くすくす笑いながら尋ねると、囁きで返される答え。
「じゃあ、ちょっと行って来ますね」
そう言って、ナルレイシアは『答え』に上げられた場所――冬にも拘わらず四季の花々が咲き誇る、敷地面積を無視しているとしか思えない広大な花園へと向かった。
花と――何より緑が溢れる場所は、人間から柱神への再生を果たしたばかりの『彼』が最も安らぐ空間であろうとのネイスリーズの予想は外れなかった。
三日月はすでに空から姿を消し、星明かりだけが照らし出す庭園で、緑味を帯びた栗色の髪の青年が、静かに夜空を見上げていた。
「ウォルセンさん……」
呼びかけると、青年は振り向きながら「違うよ」と答えた。
「ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスはもういない……あの夏の最後の日、神の怒りの光刃に貫かれて息絶えた……」
その口調はとても静かで、だが諦念や後悔の響きは感じられない。
けれど、直接確かめたくて、ナルレイシアは尋ねずにはいられなかった。

「わたしの提案に乗ったこと、もしかして後悔してます？」
これには即座に否定の言葉が返ってきた。
「まさか！　あなたには感謝してるんだ。あなたがおれの前に現れて、めちゃくちゃに引っかき回してくれなかったら、おれは今でも自分の中の本当の望みに気づけないままだったと思うから」
厭味のつもりはないのだろうが、その発言内容は、素直に喜ぶには微妙すぎる。
しかし、青年は別にナルレイシアの答えを期待してはいないのか、再び空に目を向けてぽつりと呟いた。
「思い出していたんだ……あの日、死んだと思っていたあなたがテラスの窓を叩いて現れた時のことを――」
運命に転機があるなら、おれにとってはまさにあの夜がそうだったな――。
星明かりしかない空の下――鮮やかな緑に輝く瞳の青年は、そう告げて彼女ににっこりと微笑んだ。

あの日――ネイスリーズたち一行が黒鷲城を去ったことをアシュアイードににこやかに告

げられ、彼に生じた歪みが正に自分のせいなのだと絶望した日の夜のことだった。
テラスの硝子を叩く音に、訝りながらも窓掛けの布をめくったウォルセンは、そこにあり得ないモノを見いだし言葉を失った。
「どうもー」
また空を飛んできたのだろう、蒼白な顔にそれでも笑みを浮かべた疫病神……もとい金髪の少女が佇んでいた……用途不明な布を握りしめて。
日は暮れていたがソレが出るにはいささか早い時刻ではある——だが、ウォルセンには他の可能性を思いつくことはできなかった。
「化けて出た……？」
思わず洩らした言葉に、少女がぷぅ、と頬を膨らませる。
「失礼な！　ちゃんと足だってついてます！」
そう言って、ドレスの裾をめくろうとするものだから——当人は靴下を履いているから大丈夫という認識だったが——彼は慌ててそれをやめさせた。
「見せなくていい！　というか、裾をめくるんじゃない！」
あなた、自分が女だって自覚ないの!?
呆れてそう訊くと、またしてもナルレイシアは頬を膨らませた。
「せっかく、生きてる証拠を見せて安心してもらおうと思ったのに……」

気持ちは嬉しいが、やり方に激しく問題がある——いつか彼女が痛い目を見る前、誰かが教えてやるべきだろうとウォルセンは他人事ながら心配になった。

そうして、得心する。

（この非常識……突拍子のなさ。幻覚でも幽霊でもない、本物だ……）

あの断崖から落ちてどうして生還できたのかは甚だ疑問だが、なに、相手はウォルセンが認める『非常識の化身』だ。

遺体が見つからなかったと聞いた時点で、これぐらいのことは予想すべきだった。何しろ向こうには海千山千の人外魔境がついているのだから。

そこでようやく、目の前の少女が生きているという事実がすとんと胸に落ちた気がした。

ふう、と息を洩らして、「よかった」と呟くと、少女が「やー、さすがに今回は危なかったですけどねー」と全然危機感のない様子で答えてきた。感動もへったくれもあったものではない。

しかし、疑問はいくつも残っている。

黒鷲城の最上階にあるこの部屋のテラスにどうやって——というのは、前回のことがあるから想像は容易い。

「……もしかして、また雷馬で……？　あれ、でもここは精霊が出入りできない結界が張られていたはずで……」

選定者とは、まさかどんな結界にも阻まれない人外だというのか――だとしたら、却って納得できるというものだが。

目の前の少女は、どう考えても人類よりは人外に近いイキモノだ。

ナルレイシアが聞いたら頭から湯気を出して怒り出しそうなことを考えながら問いかけたウォルセンは、少女の背後に佇む黒髪の青年の姿に目を瞠った。

「えー、と、結界に関してはそちらの専門家に任せちゃいました」

少女の言葉も耳に入らないほど、彼は衝撃を受けていた。

「リーイン・ル・ファン……生きて……」

それに対して結界術師の青年は「まあ、なんとかな」とだけ応じた。

いったいどうやってあの襲撃から助かったのか――逃げたのだとはかけらも思わなかった――是非知りたいところだったが、それより先に訊かなければならないことがあった。

「どうしてあんたが選定者と一緒にいるんだ？　黒鷲城の結界を破ったのか……？」

「あー、ひとつ目の質問の答えは長くなるから、まず二番目のやつからな。答えは否だよ、考えても見ろ、そんなことしたらあんたの義兄さんが兵隊連れて飛び込んでくるだろうが。この城の結界は出来はいいが、完璧に閉じられてるわけじゃない……その隙間にこう、小さな結界を嵌め込んで、その結界内を雷馬で移動してきたってわけだ。だから、心配しなくてもこのことは誰にもばれちゃいない……この部屋まるごと結界で包ませてもらったからな、あの凄腕の

占術師さんもすぐには気づかないはずだぜ？」

リーインと知りあって以来、結界術について調べるようになったウォルセンには、その説明で充分だった。

改めて、目の前の青年が大変な腕を誇っていることを思い知った。

「そう……」

取りあえず彼らがすぐに捕まる危険はないとわかり、ほっと息をつく。

ナルレイシアが生きていることを知れば、あの親友は黙ってはいないだろう――そのことを考えれば、真っ先に怒鳴りつけて追い返すべきだったのだが、今更それはかなわないだろう。

果たして、金髪の少女がじりじりした様子で、件の腕輪を懐から取り出すのを見て、今度は諦めの息が洩れた。

「……あのね……」

死にそうになっても諦めないあたり、凄い根性である、とは思う。

思うが、やはり聞けないものは聞けないのだ。

今度こそはっきりきっぱりと断って、一刻も早く立ち去らせようとウォルセンが口を開きかけた時――。

機先を制するかのように、ナルレイシアがとんでもないことを言い出してくれた。

「受け取ってくださらないのは、やっぱりアシュアイードさんと離れたくないからですか？

柱神になっちゃったら、政治に関わるアシュアイードさんとは離れなくちゃならないから……ずっとそばにいるために、翠唱子を受け取ってくださらないんですか？」

「な、な、な……」

（なんだ、その恥ずかしすぎる台詞の羅列は!?）

信じられない——よくもそんな言葉を口に乗せられるものだ。

（この娘には羞恥心ってものがないのか!?　それとも他人事だからか!?　他人事だからこんな恥ずかしいことをぺらぺら喋ってくれるわけか!?）

なんという非常識——言葉だけでなんという破壊力を示してくれるのか。

「なんだよ、それ！　どこのお子様の駄々だ！　アッシュと離れたくないだなんて、そんなの理由になるか！　あなた、馬鹿じゃないの!?　アッシュのそばにいようといまいと、そんなことは大したことじゃないんだ。問題なのは、そんなものになったらますますアッシュに負担がかかるってことで……」

しまった、と口を噤んだ時には遅かった。

「アシュアイードさんに負担をかけたくないから……それが理由なのね？」

見つめてくる蜂蜜色の瞳には、すでに確信した光が宿っている。

これは、いくら否定しても無駄だろう——してやられた口惜しさに唇を噛みしめる。

「……そうだよ、おれはこれ以上アッシュの足枷にはなりたくないんだ……」

観念してウォルセンは頷いた。
「知ってるかもしれないけど、おれには『聖印』と呼ばれる痣がある……妙歌星ファタランテさまと同じ緋色の痣だ。一族はそんな子供を『聖印の子供』と呼んで特別視してきた。本家に養子として迎え入れられたのもそのせいだよ。分家に置いておいて、おれを次期侯爵に担ぎ上げようと考える一派から隔離すると同時に牽制したんだな……義父上は。それでも、やっぱり聖印にこだわる人間たちは諦めなくて、この間終息するまで、おれとアッシュは二つの派閥の御輿に担ぎ上げられて、本人の意志に無関係に敵対状態だった。おれのせいでアッシュが認められないだなんてことあっちゃいけないのに、争いは激化の一途を辿るばかりで……だから、おれは家を出たんだ。おれのせいでアッシュの命が狙われるなんて、断じて許せなかった。本当は……二度と戻ってくるつもりはなかったんだ。それを……」
ちらりと視線を向ける先には、黒髪の結界術師――。
咎めるそれに気づいたのだろう、リーインはひょいと肩を竦めた。
「そう言われてもねえ。お仕事だったわけだし……」
「だったら、もっと早く見つけてくれたら良かったんだ、選定者なんかに見つかる前に！」
ナルレイシアの「ウォルセンさん、なんか、って酷い」という声はこの際無視する。
「それはおれも凄く残念……この爆竹娘が関わると、大抵ろくなことにならないんだよなぁ……エアランで見かけた瞬間、いやーな予感は覚えたんだよなぁ。案の定というか……今こう

してただ働きさせられてるってわけだ」

しかし文句をつけたリーインが、同感とばかりに頷くのには何とも言えない気分を味わわせられた。

さらに、そこにナルレイシアが乱入してきたものだから話は脱線する一方だ。

「なによ、閃公の幸く車の上に空から血まみれで降ってきたくせに！　あの時わたしたちが空飛んでなかったら、あなたなんか意識なくしたまま地面に激突して即死だったんですからね！　恩返しに少しぐらい無償奉仕しても罰は当たらないでしょう!?」

……なんとも奇天烈な話だが、少女は大真面目だ――思わず自分が信じてきた世の中の常識というものを疑いたくなってしまったウォルセンだった。

（空から降ってきたって。そもそも空飛んでる時に降ってきたって……）

いったいどういう状況だ――興味を抱いたものの、それどころでないことを思い出しウォルセンは慌てて口を挟んだ。

「いや！　だから！　脱線させて悪かった！　でも、事情は大体わかっただろう!?　おれの聖印を特別視する人間は、一族中にまだいるんだ。そんな中で、おれが柱神候補だなんて知られたら、後継者争いのほうは落ち着いても、今度は別の騒ぎが持ち上がるに違いないんだよ。うちの一族はとかく『約束の地』に固執してるから、おれを担ぎ上げて今度は自分たちの国を立ち上げようとか言い出しかねない……」

いや、確実に言い出すだろう。

それが目に見えているから、ウォルセンはナルレイシアが選定者であると知った時、決して彼女の話に耳を傾けまいと決めたのだ。

「……そんなことになったら……わかるだろう？　大変な騒ぎになる……下手をすればディエーンを割りかねない。そして、その時対処に当たるのはアッシュなんだ。そんな面倒で危険なこと、絶対させたくないんだよ……もう、これ以上アッシュの負担には……」

だから、諦めてくれ――声にならない懇願に、しかし蜂蜜色の大きな瞳を持つ少女は気づいてくれなかった……らしい。

「アシュアイードさんに、なんでそんなに負い目を感じてるんですか？」

「負い目!?」

違うだろう、これは当然の心配というもので――と、反論しかけるが、ナルレイシアが言を継ぐほうが早かった。

「だって、そうとしか聞こえませんでしたよ。おれのせいで、おれのせいでってそればっかり。アシュアイードさんの負担にならないためなら、自分の感情は二の次みたいな……」

かっとした。

心底腹が立った。

「あなたに何がわかるんだ！　死にかけてたおれの命を掬い上げてくれたのはアッシュなんだ

よ！　命の恩人ってだけじゃない、壊れかけてたおれ自身を救ってくれたんだ！　それなのにおれはアッシュの害にしかなれなくて……だけど、アッシュは死ぬことは許してくれなくて……だから、だからおれはっ！」

感情のままに叫んでから「しまった」と思うのは、今夜二度目だった。

失言などというものではない。

これは裏切りだ――アシュアイードに対する明白な。今の今まで自分ですら自覚していなかった昏すぎる望みに、背筋に冷たいものを感じた。

「……死にたいの、ウォルセンさん？」

遠慮も容赦もないナルレイシアの追及に、彼はがくりと肩を落とした。

「そういうわけじゃない……けど、どこまでもアッシュの負担にしかならないのなら……そんなおれなら、おれは要らない……」

そう思い続けてきたのだと、今ようやく気がついた。

「それじゃ、アシュアイードさんもウォルセンさんも不幸だわ。アシュアイードさんはわたしを殺してでも……つまり神罰どんと来いってぐらいの覚悟を決めてでもウォルセンさんと一緒にいたいって思ってるし、ウォルセンさんだって、アシュアイードさんに余計な負担をかけたくないから柱神になんかなりたくない……どころか、自分さえ要らないって思ってるのに……どっちも相手のことを優先しすぎて、却ってすれ違ってるみたいに見える」

「そんなこと――！」

ない、とは言い切れないことに改めて気づかされる。

アシュアイードらしからぬ決断と行動――それが、彼女の言うすれ違いから来るものである可能性は否定できないのだ。

言葉に詰まったウォルセンを、しばらく無言で見つめていた少女がぽん、と唐突に手を打った。

「あー、なんか、なんだか少しだけわかっちゃった」

ひとり得心した顔で、うんうんと頷いたナルレイシアはびし、とウォルセンの鼻先に人差し指を突きつけてきた。

ひとを指さしたらいけません……なにやら混乱状態にあるウォルセンの脳裏に浮かんだのはそんな間抜けな言葉。

そして彼女はまくし立て始めた。

「ウォルセンさん、わかりました。要するに、あなたは頭が固い上に真面目すぎるんです……だから、何事も正面から向き合おうとして、早々に諦めちゃうところがあるのね。そんなあなたに教えてあげられることがあります！　世の中にはね、世の中には抜け道とか裏道なんてものがあるんですよ！」

……いや、今更そんなことを教えてもらわなくても――。

そう思ったウォルセンに罪はないはずだ。少なくとも、『人間社会における』抜け道やら裏道を探そうと血眼になって、結局見つけることができなかったのだから。

「知った風な口を……っっ！」

利くな——とまで言えなかったのは、ひとえにナルレイシアの次に取った突飛な行動のせいだった。

彼女はおもむろに懐から封書を取り出すと、びりびりとその封を破って中身を抜き出し、さらに懐から携帯筆記具を取り出し、その手紙なのか書類なのかわからない結構な量の紙の束にものすごい勢いで書き込みを始めたのだ。

その速度は目覚ましく、果たして本当に文字となっているのかとウォルセンが疑問に思ったほどだった。

そして書き始めた時と同様、唐突にペンを止めた彼女は紙片を絨毯の上にばらまいたまま、すたすたとウォルセンに歩み寄った。

「あのですね、ウォルセンさん」

急に改まった態度に出られ、ウォルセンは思わず身を退いた。

「なんで退くんですか！」

「いや、条件反射？」

「真面目な話なんですから、退かないで聞いてください！」

これまで見たこともないような迫力満点の声と顔でそう言われても……その注文は無理があるが、無理さえ通す気魄に負けた。

というより、彼女が勝手に話し始めたのだ。

「ファティ・リンシャが仰ってたのだけれど……あ、ファティ・リンシャってわたしが全幅の信頼と敬愛を注いでる柱神さまなんですけどね。本来柱神という存在は、国や人に縛られるべきではないのだそうです。情があるから縛られがちだけれど、本当は柱神は自由なのですって。世界を支える御柱であることだけが柱神の務めであり、ほかに縛られることはなにもないのですって」

つまり、柱神になったからといって、一族に縛られる必要はないのだと。

「もっと砕いて言っちゃうと、世界を支え続けさえすれば、どこに行こうがどこに居ようが文句を言われる筋合いはなんにもないんですって。それって、やりたい放題だってことですよね」

にこにこにっこり――仮にも選定者が口にすることではない……とは思うのだが、柱神のお墨付きだというその内容には大いに心惹かれてしまった。

しかも、そんなウォルセンの心中を読んだかのタイミングで、床に散乱していたはずの加筆済みの書簡――いや、厚みからして書類と呼ぶべきか――を、いつの間にか回収したらしいリーインから受け取り、「はい」と差し出してきたのだ。

思わず反射的に受け取ってしまっても、これは仕方がないだろう。
そうして金髪の少女は、にこりと微笑みこう告げたのだ。
「気が向いたら読んでみてください、一応派手な裏道を用意してみましたから」
返事は明日また来ますから、その時お願いしますね――。
一方的に言い切って、来たとき同様唐突に部屋を出て行った。
残されたウォルセンは呆然としながら、湧き上がる好奇心に抗うことができず、問題の書簡もどきに目を通すこととなったのだ。
そして――すべての内容が頭に染み渡った瞬間。
彼は叫んだ。
「これは裏道や抜け道じゃなくて、立派な詐欺ってものだろうがっ！」
翌日の再訪のために、リーインが結界を維持していなければ、全てが水泡に帰したかもしれないそれは……だが、彼のどうしようもない本音だった。

「……あのさ」
恐らく自分のことを案じて捜しに来てくれたのであろう少女に告げるには不向きな言葉だろ

うという自覚はある。
だが、一度覚えてしまった感情は膨れあがる一方で抑えることができない。
感情――いいや、これは希求だ。
（会いたい）
少女に尋ねたいことや話したいことは山ほどある。
あの臭すぎるほど臭い脚本は誰が書いたものなのかとか――大まかな筋は間違いなく彼女なのだろうが、演出の臭さと細やかさはどう考えても別の人物によるものとしか思えない――あんな大がかりなペテン劇に喜んで参加する柱神とは一体どんな性格をしているのかとか。
だが、翠唱子を受け入れたことで、肉体を作り替えられるのにかかった三カ月以上の仮死の眠りから醒めた時、真っ先に浮かんだ思いは――。
「ちょっと、出てきて……いいかな？」
今の自分なら、精霊たちに頼めばアシャスまで運んでもらうことは容易いはず――けれど、そのことをわざわざナルレイシアに打ち明けるのも気恥ずかしくて、誤魔化したつもりだったウォルセンは、彼女の満面の笑みをたたえた答えに落ち込まずにはいられなかった。
「どうぞ、ご存分に。ああ、そうだネイスリーズさまからの言伝です。空の散歩に最適な連れが要りようならご一報を……みたいな」
（やられたー。というか、全部お見通しってわけか）

悔しいが、差し出された手は正直ありがたい。
ここは甘えさせてもらおうと思った――。

「……行ったのか」
突然背後から声をかけられ、一瞬ぴくりと肩を震わせたものの、ナルレイシアは声の主を振り返りはしなかった。
「うん」
代わりに、大きく頷いた――と同時に、背後から深いため息をつく気配が伝わってきて、
「んん？」と眉を顰めた。
「なに、そのため息」
意味深長どころかわざとらしいまでの大仰さに突っかかれば、黒髪の青年公爵は、
「……つきたくもなる」
と簡潔だが意味不明な答えを返してくれた――どういう意味かと更に更に突っ込めば。
「一件目といい、今度の件といい……お前が関わると詐欺とペテン塗れになるな」
との答え――自覚がないでもない少女は真っ赤になって――激怒した。

エピローグ

喪中ということもあり、年末年始に華やかな行事は控えることとなったものの、それでも最低限のそれは求められる。

病弱なアシュアイードに配慮して組み上げられた行事の予定は、それでもこの乾燥する季節、気管支が弱い彼にとってはいささかきついものだった。

しかし、そんなことを外に出すわけにはいかない。弱みを見せてもかまわない人間は、もはやそばにはいないのだ。

体を丸め、苦痛を抱え込みながら、ただただその時が過ぎ去るのを耐えている最中。

不意に、その気配に気づいた。

「ようやく、か」

呟く声は苦い。

信じていた――それでも気配の欠片も感じ取れないと占術師に告げられる日々が続く中、アシュアイードの心は疲弊していた。

「遅すぎる」

叱りつけるように不満を洩らすと、記憶にあるままの声が「ごめん」と返してきた。

寝室の扉が開いた音はしなかった——窓もまた。

なのに、『彼』は確かに傍らにいる。悪くもないのにまず謝るのも変わらない。

「やっぱり見抜かれていたか」

ウォルセンが苦笑する気配が伝わってくる。

「当たり前だろう。あんな奇跡もどき……女神や光剣の幻影も空中浮遊も、お前が以前精霊に頼めばこんなこともできると言って、実践して見せてくれたものを大がかりにしただけのものじゃないか。お前ひとりでは無理かもしれないが、どうせ柱神が力を貸してくれたんだろう？……何より、あの歌声。女性の声に聞こえるように細工してあったが、あれはお前だろうが……あんな歌、お前以外に歌えるはずがない」

と仏頂面を隠さずに答えると、微妙な沈黙が室内に横たわった。

破ったのはアシュアイードだ。

「結局、この家もわたしたちも、お前を縛る檻と枷にしかなれなかったのか……」

自嘲も露な言葉は、知らず洩らしたものだった。

ウォルセンが「違うよ」と即座に反応したが、素直には受け取れなかった。

「一族全員騙してまんまと逃げ出したくせに」

「違うよ、アッシュ。おれは確かにマルシアスの一族との縁から解放されてほっとしてるかもしれない。でも、だからこその喜びは、全部アッシュに繋がってるんだよ」

わけがわからない――アシュアイードはそこで初めて布団から顔を出し、死んだことになってしまった最愛の存在を見つめた。

そんな彼に、ウォルセンは嬉しそうな笑顔で告げたのだ。

「おれは『聖印の子供』であることがずっと苦痛だった。そのせいで両親と離ればなれになった。大好きなアッシュと敵対関係に持ち上げられた。おれは……アッシュの足枷にしかなれない自分が大嫌いだった……でも」

今は違うのだとウォルセンは告げた。

「今なら……ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスでなくなったただのおれなら、誰に遠慮することなくアッシュのことを好きだと言ってもいいんだ。胸を張って誰より大切な親友なんだって言ってもいいんだ。おれは、それがなにより嬉しい……」

沈黙が横たわる――。

ややあって、アシュアイードが呟いた――「馬鹿鳥」と。

くぐもった声だったのか、聴き取れなかったのかもしれない――「なに、アッシュ？」と問いかけてきたウォルセンに、どうせだからと我が儘をぶつけることにした。

「お前は仕方のない馬鹿鳥だ……籠に閉じ込めたら死にかける、離してやったら飛び出したき

り戻って来ない、枷をつけたら本気で死ぬ……とんでもない馬鹿鳥だ。仕方ないから離してあげるよ……だから、時々は戻ってきて、おれのために琴を弾いて、歌を歌ってくれ……それで、勘弁してやるから」

恩着せがましく言ってやると、ウォルセンは果たして困り果てた顔になった。

あんな詐欺紛いな方法で一族から抜け出したくせに、今更『柱神は俗世に関わってはならない』などというご託に拘るつもりなのかと、結構本気でむっとしていると、義弟で親友の青年は突然くしゃりと顔を歪めた。

榛の双眸から溢れる涙は、言葉より雄弁に彼の真意を伝えて来る。

アシュアイードは思わず微笑んだ。

今、この瞬間、自分たちは互いに欲しくて堪らず、だが決して手にすることは適わないと諦めていたものを手に入れたのだと——そう気づいて。

「泣くなよ、ディー」

優しい優しい声で告げながら、彼はウォルセンの鼻先を指で——赤くなるほど強く弾いた。

あとがき

この本が発売される頃は冬真っ盛りと思いますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。『天を支える者』緑の章最終巻『空に響く緑の鈴音』をお届けいたします。

終わりました！

緑の神宝『翠唱子』にまつわる話はこれにて閉幕です。広げに広げた大風呂敷を畳むのに四苦八苦させられましたが、どうにか畳めてほっとしてます。

やはりナルレイシアが動いてくれると話がさくさく進んでくれます（執筆速度と比例するものとは限りませんが）。彼女の行動力がなかったら、ぷっつんアシュアイードとどんよりウォルセンで話にならなかったかもしれません（笑）。

今回途中で暗黒化したアシュアイードについて、担当さんからの電話で「前田さん……アッシュが怖いです」と言われてほっとしました。いえ、書いてる自分ではなかなかわからないものですから。

アシュアイードの本性は最初から決めてましたので、前巻と今回でようやく出せたー、という感じです。『緑風』でのウォルセンの回想に出てくる彼については、ウォルセンの目に張り付いた鱗（と書いてフィルターと読んでください）越しの人物像なので、実は書きながら「ウォルセン、君は親友を誤解してるよ」とか突っ込んでました。本当のアシュアイードは立派な危険人物です。結構勝手に喋ってくれるひとですから、今回「一生ここから出すつもりはないよ」とか言い出してくれたらどうしよう……と本気で不安を覚えました。指が滑ったら危なかったかもしれません。

今回クライマックスで流れた歌については、実はイメージ源があります。いえ、歌詞はついてるのですが、祈りとか感謝とか世界の美しさ、生きる喜びが伝わってくるような曲と歌声なのです。

『ADIEMUS』――発売されて時間が経っているので入手は難しいかもしれませんが、機会があったら聴いてみてください。

しかし、緑の章を振り返ってみてしみじみ思ったことですが、ナルレイシアの周囲は見目良い男性陣で埋め尽くされているというのに、どうしてこうも糖度が低いのでしょうか。チョコレートにしてみると、カカオ86％ぐらいでしょうか。ビターチョコより甘くない。そして、どうして今回の準主役であるウォルセンとアシュアイードが無駄に糖度が高いのか……高校生の姪っ子も認めた事実だから、気のせいではないはず。こちらはカカオ60％ぐらいと認識してま

すが如何でしょう……？

次の章の色はまだ未定ですが、何とか糖度を上げたいです……あくまで希望ですが（笑）。

今回もイラストの明咲（あさき）トウルさまを始め、関係各所の皆様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それではまた、次の本でお会いできますように――。

平成二十一年　冬

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。


緑の章完結！ですね。
この章、いつからはじまったか…と思えば
何と1年前でした。あれ…もっと前の気が…
ガスカールは相当な天然だ…！
でもそれ以上にナルレイシアが…。
この2人の行く末が…
……少しは進展してる！はず！
2009.1.日脱稿しました。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
空に響く緑の鈴音

COBALT-SERIES

2009年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社 集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2009　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601256-0 C0193

〈好評発売中〉
コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！
前田珠子〈天を支える者〉シリーズ
イラスト／明咲トウル



天を支える者
天を支える者2
天を支える者3
天を支える者4
天を支える者 古戀唄
天を支える者 古戀唄2
天を支える者 古戀唄3
天を支える者 古戀唄4
天を支える者 古戀唄5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑籟の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る



〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！



柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。

空の呪縛

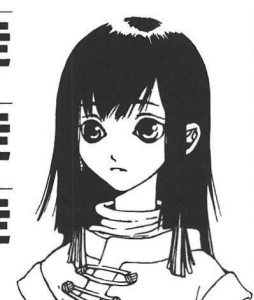
月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者
聖石の使徒
其は力を放つ者
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
揺籃の瞳
聖石の使徒
蒼の組木箱
聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ!

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸(前編)(後編)

翡翠の夢1~5

鬱金の暁闇1~3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

祝♥結婚!! あの2人がやっとゴールイン!!

伯爵と妖精

すてきな結婚式のための魔法

谷　瑞恵
イラスト／高星麻子



青騎士伯爵の結婚式に招待しなければならない妖精5人に手紙を出したリディア。しかし、招待されていない6人目の妖精が怒り出して!?

伯爵と妖精シリーズ・好評既刊

あいつは優雅な大悪党
あまい罠には気をつけて
プロポーズはお手やわらかに
恋人は幽霊
呪いのダイヤに愛をこめて
取り換えられたプリンセス
涙の秘密をおしえて
駆け落ちは月夜を待って
女神に捧ぐ鎮魂歌
ロンドン橋に星は灯る
花嫁修業は薔薇迷宮で
紳士の射止めかた教えます
紅の騎士に願うならば
誰がために聖地は夢みる
運命の赤い糸を信じますか?
誓いのキスを夜明けまでに
紳士淑女のための愛好者読本

〈好評発売中〉 コバルト文庫

魔王シリーズクライマックスへ!

貴方に捧げる「ありがとう」

野梨原花南

イラスト／宮城とおこ



シンギンガンド城に残されたホルイー姫は、女王となることを宣言する。一方、サファイヤは魔王の八翼白金と一緒にいたのだが…?

〈魔王〉シリーズ・好評既刊

王子に捧げる竜退治
占者に捧げる恋物語
僕に捧げる革命論
首領に捧げる子守歌
我に捧げよ至高の愛

〈好評発売中〉 コバルト文庫

黒い心臓が告げるラムの正体とは――！

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―

神々の脈拍 vital.X

桑原水菜

イラスト／夢花李



湖底都市ラムリアの真実を知ったケヴァンとアイザックは、ラムの地上進出を阻止しようとする。一方、奏はある決意をするが…!?

――〈シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―〉シリーズ・好評既刊――

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―
ワルキューレの雪騎行
アリアドネの糸車
シヴァの踊る森
燃える湖底のラム（前編）（後編）
神々の脈拍 Vital.A
神々の脈拍 Vital.B
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン
―カラクムルの機械神―

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あなたのために、力を手に入れる！

封印のエスメラルダ

赤薔薇の女王

山本　瑤
イラスト／香坂ゆう



ついにエルフリーデと再会したクラウディアは、彼女の本性を知り決別を宣言する。さらに、皇帝となったレオンハルトと再会して!?

〈封印のエスメラルダ〉シリーズ・好評既刊

封印のエスメラルダ

封印のエスメラルダ
黒伯爵と野いばらの森

封印のエスメラルダ
夜明けを告ぐ魔女

封印のエスメラルダ
約束の海　紺碧の絆

〈好評発売中〉 コバルト文庫

お兄様、結婚してくださいませ!!

神巫(かんなぎ)うさぎと嵐を招く王子様

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



居候中の魔族の王子様・エルドに振り回される生活を送る美和(みわ)。エルドの妹姫だという美少女リリが現れ、彼に結婚を迫って…？

〈神巫うさぎ〉シリーズ・好評既刊

神巫うさぎと俺様王子の悩ましき学園生活

〈好評発売中〉 コバルト文庫

私はあなたの憎むべき「仇（かたき）」。

そして花嫁は恋を知る

紅の沙漠をわたる姫

小田菜摘
イラスト／椎名咲月

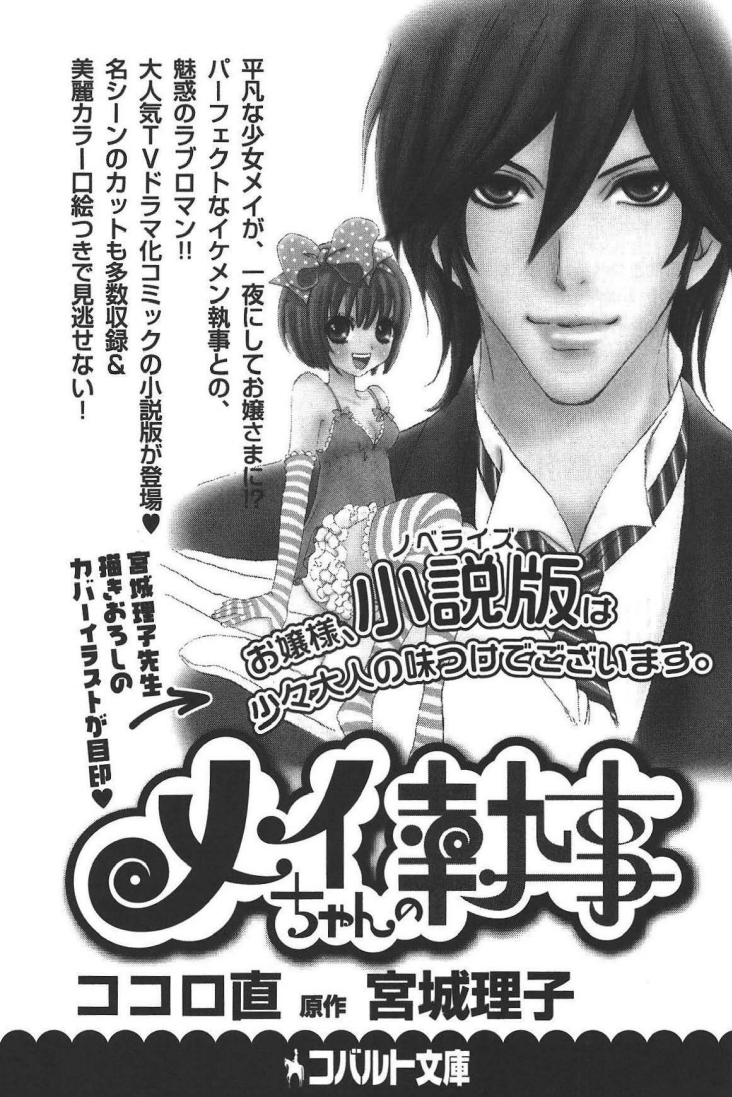


ブラーナ帝国占領下のネプティス王国へ嫁ぐ事になった皇女ユスティニア。旅の途中、ネプティスの王子が率いる反乱軍に誘拐され!?

――〈そして花嫁は恋を知る〉シリーズ・好評既刊――

そして花嫁は恋を知る
黄金の都の癒し姫

そして花嫁は恋を知る
白銀の都へ旅立つ姫



平凡な少女メイが、一夜にしてお嬢さまに!?
パーフェクトなイケメン執事との、
魅惑のラブロマン!!
大人気TVドラマ化コミックの小説版が登場♥
名シーンのカットも多数収録&
美麗カラー口絵つきで見逃せない!

宮城理子先生描きおろしのカバーイラストが目印♥

ノベライズ
お嬢様、小説版は少々大人の味つけでございます。

メイちゃんの執事

ココロ直 原作 宮城理子

コバルト文庫

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作 **正賞の楯と副賞100万円**(税込)

佳作入選作 **正賞の楯と副賞50万円**(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚~105枚。
【しめきり】毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」1月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**(読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚~350枚。
【しめきり】毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」9月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt(2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売)をごらんください。

9784086012560

ISBN978-4-08-601256-0

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫

緑属の柱神候補・ウォルセンを偏愛するアシュアイードは、彼をやっとの思いで手中に収め、ひと心地ついていた。しかしそれも束の間、少女ナルレイシアの登場で、ウォルセンは再び渦中の「人」ならぬ「神」に！　ナルレイシアはここぞとばかりに「女優」になってこの苦境を突破しようとするが、ウォルセンはそう簡単には神の座についてくれず…。愛の逃走劇も大団円？　緑の章、これにて完結！